



国際的共同学位による 新たな人材育成の可能性

ASIA JOINT-DEGREE PROJECT

2012年 3月



TOHOKU
UNIVERSITY

東北大学大学院教育学研究科
東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター

アジア共同学位開発プロジェクト シンポジウム報告集Ⅱ

国際的共同学位による新たな人材育成の可能性

東北大学大学院教育学研究科

は し が き

東北大学大学院教育学研究科では、2011年4月より2016年3月まで、文部科学省特別経費を受け、「アジア共同学位開発プロジェクト」（正式事業名は、「東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究」）に取り組むことになりました。

グローバル化の進む東アジア諸国には、多文化共生、経済・文化格差など共通する教育課題があります。人口流動化の高まりは多文化共生を喫緊の課題としています。またこの地域では初等中等教育が普及し、教育研究の主題は教育の質的改善へと移りつつあり、思考力、課題解決スキル、省察力、価値や態度などを全面的に育てる教育への転換が模索されています。これらは、東アジア共通の教育課題と言えるでしょう。中国、韓国、台湾、日本では、学校という階梯を通じた社会的選抜の競争は未だに激しく、そのためにさまざまな弊害も生じています。カウンセラーなどの新たな教育専門職が求められています。

このプロジェクトは、グローバル時代を迎えつつある東アジアにおいて、教育行政に関わる職員や学校教員などの教育専門職の資質能力の向上を図るため、また新たな教育的課題に応える教育専門職の養成を旨として、東アジアを中心に ASEAN 諸国の有力大学と連携し、東アジアにおけるリーダー養成のモデルとなる国際的教育指導者共同学位プログラムの開発を行います。プロジェクトでは、第1段階として国際的教育指導者養成共同学位創設を目指した研究拠点を形成します。第2段階として、東アジアの有力大学と共同学位プログラムを共同開発します。こうして東アジアの教育課題に対応できる国際的視野を持った指導的人材を養成します。

さて、ここにお届けする冊子は、2011年12月に開催された国際シンポジウム「国際的共同学位による新たな人材育成の可能性」の報告書です。中国の北京師範大学、南京師範大学、華東師範大学、韓国の高麗大学、ソウル国立大学、台湾の国立台湾師範大学、国立政治大学、またロンドン大学教育研究院から18名の先生方をお招きし、東北大学の取り組みを紹介した上で、各大学における国際化への取り組みや新たな人材育成について、2日間にわたり熱心な討議が行われました。記録には共同学位を開発し、また新たな人材育成に着手する上で、重要なポイントが網羅されています。ご参考にしていただければ幸いです。

初年度にあたる2011年度は、東日本大震災のため、プロジェクトのスタートが大幅に遅れました。しかし、国内外からご理解とご協力を賜りながら、プロジェクトを進めてまいりました。関係諸機関、関係各位に御礼申し上げます。われわれのプロジェクトは未だ緒に就いたばかりです。試行錯誤を繰り返しながら、遅々とした歩みを続けております。この報告書を手にする読者の皆様には、忌憚のないご意見をお寄せいただければ幸いです。

2012年3月

東北大学大学院教育学研究科副研究科長
アジア共同学位開発プロジェクト・リーダー
本郷 一夫

目次

はしがき

第一部

開会挨拶 東北大学大学院教育学研究科長 宮腰 英一 ……………1

基調講演 アジア共同学位開発プロジェクト：
東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究
東北大学 本郷 一夫……………3

講演1 北京師範大学と教育学部における国際化の発展
北京師範大学 李家永 ……………6

講演2 国際化が進展する中で共同学位による新たな人材養成を探求する：
華東師範大学大学院生の教育を実例として
華東師範大学 徐光興 ……………13

講演3 南京師範大学教育学科専門学位の大学院生育成の現状および国際化
南京師範大学 傅 宏……………19

討議1 東北大学と中国の3つの報告を受けて……………24

第二部

講演4 高麗大学校における国際交流と留学
高麗大学校 韓龍震……………27

講演 5	グローバルな教育コンピテンスに向けて：ソウル国立大学校教育学部の現状と構想	
	ソウル国立大学校 宋 眞 雄	32

討議 2	韓国の 2 つの報告を受けて	39
------	----------------	----

講演 6	国際的デュアル・ディグリー・プログラム開発の経験とチャレンジ	
	国立台湾師範大学 林 家 興	45

講演 7	若き才能を引き出すための新たなチャレンジ：国立政治大学の事例分析	
	国立政治大学 詹 志 禹	52

討議 3	台湾の 2 つの報告を受けて	58
------	----------------	----

第三部

講演 8	EU における共同学位の取り組みについて	
	ロンドン大学 エドワード・ヴィッカーズ	63

総合討議	ロンドン大学の報告を受けて（全体討議）	72
------	---------------------	----

資料編

シンポジウム招へい者一覧	95
報告資料（パワーポイント）	97
写真集	207
あとがき	213

第一部

開会挨拶

基調講演

アジア共同学位開発プロジェクト
東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究

講演 1

北京師範大学と教育学部における国際化の発展

講演 2

国際化が進展する中で共同学位による新たな人材養成を探求する：

華東師範大学大学院生の教育を実例として

講演 3

南京師範大学教育学科専門学位の大学院生育成の現状および国際化

討議 1

東北大学と中国の3つの報告を受けて

開会の挨拶

東北大学大学院教育学研究科長

宮腰 英一

東北大学教育学研究科の宮腰英一です。国際シンポジウム「国際的共同学位による新たな人材育成の可能性」の開会に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

このたびの国際シンポジウムには、中国、韓国、台湾のそれぞれの大学から先生方をお招きしました。東北大学にお越しくださいました先生方には、心より歓迎し、また御礼申し上げます。

まず、本年開始した東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究プロジェクトについてご紹介させていただきます。このプロジェクトは、東北大学と東アジアの有力大学が共同して、国際社会で活躍するリーダー的教育指導者を育成する共同教育プログラムの基礎研究と共同学位プログラムの開発を目的としています。

今日、急成長しつつあるアジアにおいては、国境を越えた東アジア地域に共通する課題が山積しています。たとえば、多文化共生社会に応える多文化教育の必要性、初等中等教育における教育の質保証の問題、格差是正の問題、さらに高齢化対策など、教育課題や社会問題に関するさまざまな課題です。こうした課題に対して、広い視野と高度な専門的知識、能力、優れたコミュニケーション力や国際性を備えた人材の育成が求められています。グローバル化時代における教育は、もはやドメスティックなものにとどまることなく、東アジアの有力大学と連携・協力して、優れた教育プログラムを開発し、国際的に通用する魅力あるリーダーを育てる共同学位プログラムの創設は喫緊の課題です。そのため、本プロジェクトでは、国際的共同学位の開発に5ヶ年計画で取り組みます。最初の3年で修士学位レベルの共同学位プログラムの創設に向けて基礎的研究を行い、その可能性を多面的に探ります。最後の2年でパイロットプログラムを実施する計画です。そして、創設された共同学位の成果および運用のノウハウを広く教育学系の他の大学へと普及拡大を図るとともに、教育学以外の他の研究領域への応用可能性も念頭に置いて取り組んでいく所存です。

本プロジェクトは修士の共同学位を構想しています。修士課程の2年間で国内の大学のみならず、韓国、中国、台湾、あるいはシンガポールなどの大学に赴いて、異なる文化、異なる言語、異なる宗教、異なる生活空間で他国の学生と共に学び、切磋琢磨し、あるいは自らの心身を鍛え、対立や葛藤、協調を経験しながら互いに敬愛し、アジアの共通課題に立ち向かう国際的リーダーとして育てていく。こうしたリーダー的人材の育成は、教育学の基礎的知識、専門的知識や技能を修得した学士課程の上に築き上げられるもので、博士課程における高度に細分化・専門化された課程ではできません。修士2年の課程でこそできる人材育成であると考えています。

本プロジェクトは、本年3月11日の東日本大震災の影響で、スタートがやや遅れましたが、ようやくプロジェクトの運営実施体制も整いました。今後、各国で異なる制度をどう調整していくか、学位水準をどう設定して質保証を図っていくか、学生をどのように募集していくか、教授言語をどうするかなど、目標達成に向けて数々の課題を乗り越えていかなければなりません。

すでに先生方もご存じのように、東アジア地域においても、ヨーロッパのエラスムス・ムンドゥス計画の刺激を受けて、国や地域を越えた大学間の連携協力によって、学生や教員の交流を促進する「キャンパス・アジア」構想が計画されています。ヨーロッパのエラスムス計画は1987年に開始され、教育の分野のみならず、行政、政治やビジネスなど、実にさまざまな分野でレベルの高い人材を輩出し、大きな成果を収めていると評価されています。

本日のシンポジウムも、本学で学んでいる多くのアジアからの留学生によって支えられ、進められています。留学生は政治、経済、文化、言語、社会諸制度の違いによる障害を乗り越えて、学業を達成しています。留学生は困難に立ち向かう意欲と力を持ち、優れた協調性と競争力を備えていますし、何よりも国家間の架け橋になる人材でもあります。

われわれのプロジェクトは、東アジア地域の優れた大学と連携し、日本人・外国人の垣根を越えた共同教育により、語学力を含むコミュニケーション能力や異文化を理解し、多文化環境の下で新しい価値を生み出す能力を備えたグローバル人材の育成を目標としています。本日のシンポジウムでは、これからの時代にふさわしい教育指導者の人材育成と、共同学位プログラムの創設に向けて、それぞれの大学からご提案をいただき、共通理解が得られることを願っています。

簡単ではありますが、シンポジウムの開催に当たってのご挨拶とさせていただきます。

どうもありがとうございました。

基調講演

アジア共同学位開発プロジェクト 東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究

東北大学 本郷 一夫

おはようございます。東北大学の本郷一夫と申します。これから、東北大学が考えているアジア・ジョイント・ディグリーについて説明させていただきます。タイトルは「アジア共同学位開発プロジェクト」です。皆さんのお手許には、それぞれの言語と英語による資料が渡っていることと思いますが、日本語の資料に基づいて話をさせていただきます。

共同学位開発の目的として、1番目に国際水準のアウトカムの質保証が挙げられます。共同学位の創設は1つの目標でもありますが、もう1つ、その共同学位を通じて、大学院教育の質を高めていくことをねらいとしています。そのためには、研究・教育の交流を進めることによって、共同学位をつくり上げ、そして大学院教育の質を上げていくことを計画しています。

東アジア共同学位プロジェクトで、なぜ東アジアなのかというと、日本に来る留学生数の予測を見ると、現在でもそうですが、2025年にはかなり多くの東アジアからの留学生が出ることが予想されています。また、2009年の東北大学における留学生の割合は、約82%がアジアからの留学生です。このように、東北大学においても日本においても、アジア、とりわけ東アジアからの留学生が現在でも多いですし、これからも増えていくと考えられます。そこで、われわれは東アジアを中心に置きながらプロジェクトを展開していきます。

次に、国際的教育指導者とはなかなか難しい概念です。国際的教育指導者とは何かということ、われわれは現在、英語では *internationally minded educational professionals* と表現しています。実際にはこのプロジェクトを通じて、さらにこの国際的教育指導者とはどういうものなのか、何が求められているのかを明らかにしていこうと考えています。

養成すべき人材として、教育研究者、教育行政関係者、リーダー教員を考えています。実際にこれらの国際的教育指導者に必要とされる資質と能力、コアとなる4つの要素を *KASP* といたしました。すなわち、専門的な知識 (*Knowledge*)、アジアに対する理解と共感 (*Attitude*)、研究技法と言語 (*Skills*)、そしてそういった能力、態度、スキルを持って実際に情報を発信してネットワークを形成していく (*Practice*) という4つの要素を持った国際的教育指導者をつかっていきたいと考えています。

現在ではこういった人材を育成するシステムはどこにもないと考えています。このプロジェクトでは、東アジアを拠点として、東アジアの教育をリードする研究拠点をつかっていきたいと考えています。

皆様のお手許に配布した英語版、中国語版、韓国語版でも同じように英語で示されています

が、そのときにどのようなカリキュラムを編成するのか。現在、私たちが考えているカリキュラムの例が示されています。

これは修士の2年間で想定したカリキュラムになっており、入学前の準備段階から、基礎的な知識・技能の獲得、実際的な調査などのスキルを身に付けて、最終的に修士論文を書いていく2年間のプログラムになります。この間にそれぞれ日本と中国、韓国、あるいは台湾のそれぞれの大学で学びながら、1つの学位を取っていくという構想です。

このプロジェクトは今年度から始まりましたが、東北大学において現在どのような研究拠点を形成しているかを簡単に説明させていただきます。プロジェクトの全体会議と推進会議が開かれており、その下にプロジェクトの専任教員、外国人客員教員、教育研究支援者、事務補佐員といったスタッフが専任でおります。

もう少し詳しく年度ごとに見ていきます。現在、2011年度については、専任教員が2名います。客員教員も2名で、2012年度以降も2名になっていますが、実際には人数というよりも24ヶ月分の客員教員という意味合いで、たとえば1ヶ月ずつ来ていただくと24人の方をお呼びできることになります。2014年、2015年は48ヶ月分なので、1ヶ月ずつだと48人、2ヶ月だと24人の客員教員をお呼びできるような予算配置をしています。それから、教育支援者と事務職員も配置しています。2011年の予算は7,240万円ですが、だんだん増えていって、2015年は試行的に共同学位プログラムを実施し、学生や教員の交流も盛んに行うため、1億円を超えるような予算を配置しています。5年間で総額5億6300万円という予算の下で、共同学位のプロジェクトを開発していきます。

事業計画の詳しいところは後で見ただければと思いますが、1つのポイントとして、来年度、共同学位サマー・プログラムを開始する計画を立てています。来年の7~9月ぐらいの期間で、主に今日来ていただいている大学から、可能であれば学生を送っていただき、東北大学でサマー・プログラムを実施します。また、各大学から先生方にも来ていただいて、サマー・プログラムの講師をしていただくという計画を立てています。現在のところ、このサマー・プログラムに関しては、言葉は英語で行うこと、2単位ずつの2科目をサマー・プログラムで実施するという計画の下、準備を進めています。

このような東アジア共同学位開発プロジェクトを通じて、共同学位プログラムの開発の拠点形成、それから国際的教育指導者の組織的な養成を通じて、東アジアの高等教育機関の国際的な魅力を向上させること、そういった共同学位の運営を通して、それを他の研究領域にも移転していくことを構想しています。

共同学位（ジョイント・ディグリー）を達成することは、なかなか難しいと考えています。より現実的には、ダブル・ディグリーの方が可能だと考えています。ただ、ジョイント・ディグリーが達成可能であれば、より質の高い教育ができると思っています。それを目指して、この5年間にジョイント・ディグリーをつくるには、どのようなやり方、ノウハウ、あるいは連携が可能かを探っていきたいと考えています。

もっとも、本日お越しいただきました大学と連携しながら共同学位をつくっていくのですが、

それぞれ大学にはそれぞれの事情等があるかと思うので、すべての大学と共同学位をつくるわけではありません。それぞれの大学、あるいは東北大学との関係によって4つのレベル、研究交流、部局間協定と学生交流、単位互換あるいはダブル・ディグリーを考えてもいいかもしれません。最終的にレベル4の段階で共同学位（ジョイント・ディグリー）ができると良いと考えています。ジョイント・ディグリーを目指しながら、それぞれの水準でそれぞれの交流をしながら、東北大学、あるいは本日までご出席いただきました大学の大学院の質向上につながれば幸いです。

簡単ではありますが、われわれ東北大学の考えている共同学位の構想について、ご説明させていただきました。どうもありがとうございます。

北京師範大学と教育学部における国際化の発展

北京師範大学 李家永

東北大学の皆様、中国や韓国、イギリスよりお越しの皆様、各大学の先生方、同僚の皆さん、おはようございます。今回のシンポジウムに出席する機会を得ることができ、非常に喜ばしく、光栄に思っております。北京師範大学を代表し、今回のシンポジウムのテーマに関連する北京師範大学の状況について皆様にお話ししたいと思います。

まず一言申し上げておきたいことは、歴史的に見た場合、北京師範大学と東北大学との協力関係は少なくとも 100 年に及ぶということです。中国人である私と同世代もしくは私より少し上の年代で日本をよく知っている人々にとって、最もなじみ深い日本の地名の 1 つが仙台だと思います。なぜならば、仙台は中国の非常に有名な作家である魯迅ゆかりの地だからです。およそ 100 年余り前、魯迅は仙台に留学し、医学を学びました。しかし、帰国後の魯迅は医学の研究には携わず、医師にもなりません。彼は文学の研究と創作活動を行うようになり、おそらく当時の中国で最も影響力のある、最も有名な作家・教授となったのです。

魯迅は、中国国内のいくつもの大学で教鞭をとりました。北京師範大学もその 1 つであり、本学で教えた期間は非常に長期間に及びます。私が先ほど申し上げた、北京師範大学と東北大学との協力関係に少なくとも 100 年の歴史があるというのは、こういった意味からなのです。

現在、我々は共同教育の国際化、共同学位等の非常に重要な議題に直面しています。本日は北京師範大学、中でも教育学部の状況について皆様にご紹介させていただけるということで大変うれしく思います。

本日お話しするテーマは、北京師範大学および教育学部の国際化推進に関する簡単な状況と、現在行っている取り組みについてです。主に 4 つの面について皆様にご紹介します。1 つ目は北京師範大学の簡単な紹介、それから本学の国際化に関する概況、教育学部の簡単な紹介と教育学部で現在行っている基本的な方針、主な戦略、おおむねこの 4 つについてお話しします。

まずは北京師範大学の状況について簡単にご説明いたします。

北京師範大学は 1902 年に正式に設立された、中国の高等教育機関の中で初めての、教師教育と教育研究を専門に行う大学です。中国で最も古い大学というわけではありませんが、教員養成と教育研究を行う大学として最も歴史ある大学であり、そのため教師教育、教育研究、教員養成の面で中国国内では相当大きな影響力を持つと言えるでしょう。今日では研究に比較的重点を置いた総合大学へと発展を遂げています。

中国国内の大学の中での位置づけで言うと、北京師範大学は 700 余りある公立大学の 1 つであると同時に、中国のいわゆる「211 重点大学」105 校のうちの 1 つでもあります。「211」の前

の「21」は 21 世紀を、後の「1」は 100 校を表します。当時、中国政府が 21 世紀に世界レベルの大学を 100 校作ろうということで、先例として 100 の大学に特別な資金助成を行いました。これは当時「211 工程」と呼ばれ、100 校を世界の有名大学にすることを目指したのです。個人的にその実現は不可能だと思いましたが、それは後に証明されました。世界の有名大学 100 校を作るには政府の資金援助は十分ではなかったのです。

その後「985 工程」が打ち出されました。「985 工程」は、最終的に条件を満たした 38 の大学を世界の一流大学にしようというもので、喜ばしいことに北京師範大学もその 1 つとなっています。

これはまったく個人的な考えですが、現時点では政府がこの 38 校を世界の一流大学にすることは不可能か、あるいはその目標実現には非常に長い時間が必要であり、我々の世代が見届けることはできないだろうと思います。もちろんこれは悲観的な考え方です。

結果としてその「211 工程」、「985 工程」は、中国ではその大学に影響力があるかどうか、有名かどうかを示す指標となってしまいました。「211 大学」かどうか、「985 大学」かどうかということは、すなわち上位 100 校、上位 38 校に入っているかどうかであり、その大学の学術レベルを判断する基準となったのです。もちろん唯一の基準ではありませんが、判断可能な基準の 1 つです。

こうした中国国内の状況はおそらくアメリカに倣ったものと思われそうですが、個人的にはアメリカの酷いやり方に倣って大学をランク付けすることはいかなるものかと思います。どの大学も唯一の存在で、それぞれに違いがあります。無理に順位を付けることには、さまざまな議論もあるでしょう。しかし、個人的には酷いやり方だと考えます。ですが、北京師範大学が中国国内の各ランキングで上位に入っているという概況についてはご理解いただけたかと思えます。この話はここまでいたします。

北京師範大学の基本的な構成は、1 つの学部 (faculty) ——我々はこの教育学部に所属しています——、24 の学院、3 つの系 (学科)、17 研究センター・研究所となっています。学生数は約 2 万人ですが、中国の大学の標準的な規模から言えば小さい方です。学生数 2 万人の大学は、現在の中国では大きいとは言えません。大学院生と学部生の割合で言えば、大学院生の数がやや学部生を上回っています。

次に非全日制の学生についてですが、より良い形で社会教育の実現に結びつくように、さまざまな形式を提供しており、通信教育や夜間大学を合わせると膨大な数になります。また現在ではインターネットによるオンライン課程も開設しており、この学生が別に 3 万人余りいます。これは通常各大学では正規の学生として統計には入れません。

最後に、本日の議題に関連があると思われる留学生についてです。留学生はここでは長期、すなわち少なくとも 1 学期以上在学する学生だけを含めます。本学には数週間や 1 ヶ月などの短期留学生が非常に多くいます。主に中国語を学ぶ学生については、数週間程度といった非常に短い期間のため、統計に含めるのは困難です。主に約 1 年以上在学する長期生は 1700 人余りとなっています。

スライド9は、北京師範大学の教員の状況です。

スライド10は、人材育成、教育、教育プロジェクトの展開についてです。本学にはおよそ100の博士課程専攻、162の修士課程専攻、52の学部専攻、18の博士後研究の専攻があります。人材育成の状況はおおむねこのようになっています。

次に北京師範大学で特に強い学科、つまり学術研究などの学術面での力や人材育成の能力も含め、優位性のある学科について簡単にご紹介します。人文社会科学では中国言語文学、歴史、教育、心理学、自然科学および理数系では数学、地理、生物、環境研究などが他大学に比べて強い、あるいは優位性のある学科です。

スライド13では、本学の国際化について簡単なデータを示しました。本学は34か国の300余りの大学と姉妹校関係や正式な提携交流協定を結んでおり、その中には日本の大学も多く含まれています。毎年こうした学校から400人から500人の研究者の訪問を受け入れ、また北京師範大学からも毎年のべ1,000人前後が国際交流参加のため出国しています。

基本的な状況は以上の通りですが、「孔子学院」についても簡単にご説明しておきます（スライド14）。孔子学院とは、中国の言語文化を普及させることを目的とした中国政府プロジェクトの1つです。中国国内では設立されてきましたが、現在、中国政府は海外でも300か所以上の孔子学院をすでに設立しています。主な設立モデルは、中国の大学と海外の大学が提携して、中国以外の国に共同で孔子学院を設立し、教育を含めた中国文化を普及するという形です。

北京師範大学はこれまで6、7か所の孔子学院を設立しており、さらに現在もいくつかの交渉を進めており、近いうちにイタリア、アメリカを含む数か所が新たに増える予定です。またロンドン大学教育研究院でも設立の話が進んでいます。

北京師範大学の国際化に関して重点的にご紹介したいのは、2011年からEnglish talk programと呼ぶ、すべて英語による4つの修士プログラムをスタートさせたことです。その特徴は、学生がすべて中国以外の国から来た留学生であり、2年間の修士課程はすべて英語で開設するという点にあります。学生が最後に提出する学位論文も英語で書くことができるので、中国にいながら英語で修士課程を修了できることとなります。中国語のレベルはゼロからでかまいませんが、一定の英語力は必要です。今年、2011年からこのようなプログラムをまず4つ開設しました。大変喜ばしいことに、我々の教育学部でも1プログラムが開設されました。理論と教育マネジメントおよびリーダーシップを学ぶプログラムです。簡単に紹介しますと、今年がプログラムの1年目であり、2011年に第1期の学生を募集しました。学生数は少数で、およそ16名の学生が入学しました。しかしこのクラスは非常に国際的で、学生16人の出身国は11か国に及んでいます。アメリカ、ドイツ、イタリア、スペインなど欧米の学生もいますが、やはり主となるのはアジアの国々の学生で、韓国、インドネシア、モンゴル、シンガポール等々からそれぞれ来ています。残念ながら、第1期生には日本人の学生は含まれていませんでした。今後はぜひとも日本人学生にも参加してほしいと考えています。

教育学部のプログラムについて紹介させていただきましたが、北京師範大学全体についてもお話ししたいと思います。先ほどは教育学部のプログラムについてでしたが、そのほかに環境

科学などいくつかのものがああります。「世界経済と中国」というプログラムは、実際は中国研究の一種です。ここ2、30年で中国経済は急速に発展したため、そういった中国の問題、特に中国経済の問題も研究の対象として注目を浴びています。本学の別の学院が世界経済と中国のかかわりをテーマにした修士プログラムを設けています。4つ目は環境です。これは中国研究であると同時に環境の研究でもあります。

このように、本学は2011年からこれらの4つの修士課程のFOEプログラムをスタートさせました。大学は、今後5年間で現在の4つの修士課程プログラムを10に拡大しようとする5ヶ年発展計画を進めています。教育学部に関して言えば、あまり多くは申し上げられませんが、今後5年で現在の1プログラムから2か3、あるいはそれ以上に増やせたらいいと思っています。

そこで本日はこのテーマについて、各国からお越しの皆様方と一緒に考えてみたいと思います。国際化に関しては我々自身の考え方もありますが、皆様と一緒に検討していければと思っています。ここまでが大学全体での国際化推進の基本的な状況です。教育学部に関しては、時間の関係上簡単にご紹介させていただきます。

これが現在までの教育学部のおおよその発展の歴史です。先ほど、北京師範大学の説明の際に申し上げた通り、本学は中国で教師教育と教育研究を早い時期から行ってきた高等教育機関です。ただし教育学部の、学部としての正式な歴史は非常に短いものです。正式に教育学部 (faculty of education) ができたのは2009年です。これはなぜかと申しますと、かつて北京師範大学は大学全体が教師教育と教育研究を行うためのものでした。しかし、約100年の発展の過程で、教師教育・教育研究に関連する学院、研究センター、研究所、系が北京師範大学の各方面に分散してしまいました。そこで約10年前に大学側が、分散してしまったこれらの機関をできるだけ統合しようとする取り組みを始めました。現在の教育学部は元の教育管理学院、教育技術学院、教育学院の計3学院が統合されて2009年に設立されたものです。このうち教育学院は、もともと2001年に1つの教育系と、国際および比較教育研究所——これは私自身や本日あちらにいらっしゃる高益民先生が所属する、比較教育研究を行う研究センターになります——、そしてカリキュラムや教育指導研究を主に行う教育科学研究所があり、これらの1つの系と2つの研究所を統合したものを基礎として設立されたものです。この教育学院が2009年に再び別の2学院と統合され、現在の教育学部になりました。ですから先ほど北京師範大学の状況を説明した際に、1学部と20余りの学院があると申し上げましたが、その1学部が現在の教育学部なのです。

統合以後、教育学部の内部構造はご覧になってお分かりの通り、非常に複雑になりました。こちらが教育学部の内部になります。このほかに、我々が実体的研究機関と呼ぶ、現時点で14の研究機関があります。時間の関係で詳しくはご説明しませんが、こちらが14の学院・研究所・系の名称です。これをご覧いただければ、教育に関連するあらゆる面の研究がほぼすべてカバーされていることがお分かりいただけるかと思います。簡単に総括しますと、就学前教育、高等教育、生涯教育に至るまで、すなわち人が生まれてから死ぬまで、ゆりかごから墓場まで

の全段階の教育を研究対象にしていると言って良いでしょう。我々の教育学部は中国国内でも比較的規模が大きく、学術研究の対象範囲が幅広い学部と言えます。

教育学部の教員は約 220 名の教授、副教授、各授業担当の講師からなっています。そのほかに事務サービス担当のスタッフが 50 名余りいます。学生は学部生が約 600 名、修士課程の大学院生が 1,500 名、博士課程の大学院生が 200 名余りいます。また、先ほど申し上げた留学生が 100 名弱、90 名余りとなっています。約 2,000 名の学生の中で留学生の占める割合は決して高いものではありませんが、我々が皆様と共に努力し、国際化の程度を徐々に高めていくことで、将来的にその割合を引き上げたいと考えています。

また学部については 5 つの専攻がありますが、この学部レベルで教育専攻をこのまま残すかということについては現在も検討が重ねられているところです。この問題については議論が続いていますが、今も結論が出ていません。この問題は教育学部のみならず北京師範大学全体でも重点的に議論されているテーマであり、もしかすると数年後には教育学部の 4 年制学部からはこれらの専攻がなくなっているという可能性もあることを、本日皆様に申し上げておきます。現在はあくまでまだ検討中です。修士課程では 16 の専攻がありますが、時間の関係で 1 つずつご説明できませんので、資料をご覧くださいと思います。こちらは博士教育課程の専攻です。

また教育学部では、学術研究に関連する 4 つの刊行物を発行しています。厳密に言うと学術的な定期刊行物が 3 つと、総合的な刊行物が 1 つで、前者が「比較教育研究」、「教師教育研究」、「教育学報」、後者が「中国教師 (Chinese teacher)」です。「中国教師」は小中学校の教員向けの非学術性の雑誌です。

最後に人材育成について簡単にお話をさせていただきたいと思います。我々の教育プログラムの中で最近議題に上るのが、教育学部としてどのような人材を重点的に育成していくべきかということです。その議論の中で提起されたことの 1 つが、APIC という人材教育育成のモデルです。この APIC とは 4 つのコアとなる資質を指し、その英文の頭文字をとってこう呼びます。我々が育成し教育する人材は、まずしっかりとした理論的または学術的な基礎を有していること、高い実践能力を備えていること、幅広い国際的な視野を持っていること、そして新しいものを創造しようとする精神を持っていることが必要だと考えます。この 4 つの面は最近の議論の結果として打ち出されたもので、教育という立場から考えたとき、未来を担う人材はこの APIC、すなわちコアとなる資質を備えるべきという結論に至りました。今後の人材育成はこの 4 つの面を主体として展開されることになるかもしれません。

ここでこの 4 つの面それぞれの基本的な部分について、時間の関係でごく簡単にご説明します。たとえば最初の文字に当たる Academic、すなわち学術または理論的な基礎の面では、我々の育成する人材は、教育活動の基本的な理論や法則、教育発展の基本的な理論、教育研究の基本的な模範例、方法などを十分に把握しておく必要があると考えます。学術的または理論的基礎にはこういったものが含まれます。

次に実践 (Practical) の面ですが、教育学の多くの専攻は非常に実践的なものであり、これ

らの専攻では学生は実践的な技能を身につけることを求められます。この中には、教育研究または教員に関連する専攻など、法律面や、さらには倫理面での高い実践技能が要求されるものがあります。こうした場合に学生はこれらの要求を理解するとともに、研究者や教員としての活動の中で一貫してそれらを満たさなければなりません。その仕事に従事するための専門的な技能を身につけ、自らを客観的に振り返りながらそれをその後の行動に生かすことなども必要です。

必要なものの最後は、協力関係とリーダーシップです。集団の中で他人との協力関係を築けるか、集団の中のメンバーとしてうまくやっていたら、そしてリーダーとして集団を引っ張っていく能力があるかどうか。これらが、実践面で学生に与えたいと願う中核的資質です。

次に、新しいものを創造 (Creative) するという面ですが、ここでは教育問題やそれに関する問題に常に敏感であり続け、理性的な批判精神を持ち、真理の追究を行うことなどが求められます。いわゆる創造にはこういった内容が含まれるというのが我々の考えです。

最後に国際化 (International) の面についてですが、国際的な視野を持つとはどういうことかと言うと、我々の育成する人材は国際的な意識を持ち、異文化や異なる民族、異なる言語、異なる文化を鑑賞し、寛容に受け入れ、理解することを学ばなければなりません。たとえば本日のシンポジウムのように世界各国から同じ分野の研究者が集まる場合に、海外の研究者と交流や対話をし、さらには協力して活動することができる能力を身につけなければなりません。これらのことを、我々は論理的に考えた結果、4つのコアとして打ち出すことにしました。この4つのコアがそれぞれどんな意味を表すのかについては、もちろん先ほどから述べてはいますが、例を挙げたに過ぎず、完全には説明し切れずはいません。

そこで最後に、我々の人材育成の中でどうやってこの4つの面を徹底的に追求していくかについてお話したいと思います。時間の関係で、国際化についてのみ、我々の行おうとしている取り組みをご紹介します。実践面でも、創造の面でも、我々はいくつかの取り組みを行おうとしているところですが、やはり重点的にご紹介したいのは国際化についてです。

国際化に関しての取り組みですが、人材育成の面で言えば、第一の可能性として考えられるのは、現在まだ検討段階ではありますが、将来的に4年制学部をなくし、修士と博士課程のみとすることです。その国際化を意識的に行うためには、入試、学生選考の段階で外国語のコミュニケーション能力を見ることも、選考の1つの方向性になり得るでしょう。我々が開設するカリキュラムはどれもその学術分野の世界最先端の発展内容を論じるものなので、国際化は決して「国際化カリキュラム」という1つのコースを設けることではなく、すべての専攻、すべてのカリキュラム、授業、研究分野において世界最先端の発展内容を追求することです。我々のカリキュラムデザインはこうしたことを念頭に行っています。

もう1つの側面は、学生を海外に送り出すことです。現在でも毎年多くの学生が海外に留学しています。主に博士課程ですが、将来的には修士課程の学生や学部生の留学もさらに増えるでしょう。ただし、もちろんこれは4年制学部の存続が決まるのが前提です。その場合はより多くの学生が海外に留学できることでしょう。たとえばここ東北大学へも、もっと多くの中

国人学生が勉強しに来てほしいと思います。海外留学には長期と短期の2種類があります。我々の言う長期は少なくとも1学期、すなわち半年以上を指します。このぐらいの期間がないと、たとえばそれぞれの大学で系統的に授業を選択したり、単位を取得したりすることはできません。短期は1週間、2週間といったものから1ヶ月や1ヶ月半ぐらいものを指します。この程度の短期間では一定の学習内容を完了することはできませんが、このような交流もまた非常に重要なものです。

最後にお話ししたいのは、先ほどの話と共通する点ではありますが、国際化の角度から言うと、より多くの外国人の先生、海外の大学からの先生に北京師範大学で教鞭をとっていただきたいということです。先ほどお話しした英語のプログラムでは、留学生を募集してすべて英語による講義を行っております。現在は毎学期、外国人講師の先生や海外の大学から来ていただいた先生に授業をお願いしています。もちろん、ぜひとも日本や韓国の先生にもこのプログラムにご参加いただき、講義を行っていただきたいと思うのですが、残念ながら現在は英語で学生に講義をしていただける方のみ募集しています。現在の中国の教育により、本学の大学生、大学院生は基本的に英語で授業を受けることが可能ですが、日本語あるいは韓国語で直接講義内容を理解できる学生は非常に少ないです。将来的に日本語や韓国語の高い能力を持った学生が増え、そういったクラスが開講できるまでになれば、日本や韓国の大学の先生方に、直接日本語や韓国語での講義を行っていただきたいと思いますが、今はまだ難しいです。現在海外の大学からお越しいただいている先生方も英語のみで授業をされています。英語であれば大部分の学生は問題なく授業が受けられます。

私からのお話は以上です。この後の時間をできるだけ長く使って皆様との意見交換ができれば幸いです。ありがとうございました。

講演 2

国際化が進展する中で共同学位による新たな人材養成を探求する 華東師範大学大学院生の教育を実例として

華東師範大学 徐光興

尊敬する東北大学の諸先生方、各大学の諸先生方。ここからちょっと変な日本語になってしまいます。日本滞在を終えて帰国してから、すでに12年が経ちました。長い間日本語を使わずにいましたので、日本語に自信が持てないでおります。どうかお許してください。

今日の私の報告は、国際化が進む中で共同学位プログラムを通して、どのように新しい人づくりを行って行くかですが、私の勤務しております華東師範大学における大学院教育の実例についてお話ししたいと思います。

スライド2をご覧ください。中国の大学院教育にける国際化の1つの指標として、1988年以来、中国はすでに世界の15カ国との間で共同学位の協定を結んでいることを挙げるができます。

中国の高等教育については、2つの特徴を指摘したいと思います。1つは大学院教育の組織形態に3つの形があるということです。たとえば、さきほど報告のありました北京師範大学や私が所属しています華東師範大学は国立大学です。中国政府教育部すなわち中国教育省の管轄に直接に属する大学です。それから地方政府が管轄する大学があります。たとえば上海師範大学がそうです。そして学位授与単位と呼ばれる個々の学位授与機関があります。このように3つのレベルに分かれています。

特徴の2つ目は、中国の高等教育が急速な経済的発展と人口増加の中で行われていることです。今、中国の人口は14億人から15億人に達しており、多くの若者がいます。このように発展のスピードがとても速い中にありますが、質と量のバランスをとりながら、教育を発展させる態勢を作っていこうとしています。

次に華東師範大学の大学院教育の特徴についてお話ししたいと思います（スライド3）。大学院における人材養成の目標として5つのことを掲げています。「研究の発展」、「知識の創造」、「文化の継承」、「社会貢献」、そして最後に「知的人的資源の拡張」、すなわち新たな知識と新たな人材を創出することです。

スライド3の左側は華東師範大学の留学生用学生宿舎の様子です。右側は華東師範大学のキャンパスにある有名な池です。「麗娃河」と言いますが、「美しき乙女の川」という意味です。

次はスライド4です。華東師範大学は今年、共同学位ではなく共同の大学を設立しようとしています。華東師範大学はアメリカのニューヨーク大学との間で、上海の浦東地区に新たな

国際大学を共同で作ろうとしています。このような大学は、中国の歴史上、中華人民共和国建国以来、初めての試みです。アメリカ側から4人、中国から4人、計8人の代表の先生方が集まって、設立委員会が構成されています。写真に映っているのは上海の国際的な証券・金融の中心街です。ここに共同で大学を作ろうとしています。

次のスライド5でわかるように、華東師範大学における教育の特徴の1つは、学部教育と大学院教育を一体的に行っている点にあります。従来は、学部生と大学院生は別々に教育を受けていました。今は学部生と大学院生の教育は一体化しています。優秀な、非常に成績優秀な学部生は、入学試験を受けずに直接に大学院に進学して勉強することができます。さらに、最も優秀な学生については、学部、修士課程、博士後期課程の教育を同時に進める教育体制になっています。これが1つ。

2つ目は、基礎的な学術研究分野の教育は縮小し、応用分野の専門的な人材の養成に比重を移し、応用分野の学部生、大学院生に対する専門教育を強化しようとしている点です。基礎的な学術研究分野の修士課程は3年です。これに対して応用分野の専門家養成を目指す課程の修業年限は2年です。

3つ目は、大学院生の研究費と奨学金の充実が進められている点です。華東師範大学の大学院生の約30%が奨学金と研究費の支給を受けています。

4つ目は、心理学や教育学の学部・学科で、積極的に世界各国からの留学生を受け入れている点です。また、華東師範大学からも優秀な修士課程、博士後期課程の学生が、海外の優れた大学に留学しています。今、私のところにも多くの留学生が来ています。日本、アメリカ、韓国、台湾、香港、マカオ、シンガポールからの留学生が来ています。

以上、4つの特徴をお話ししました。すなわち、学部生と大学院生に対する一体的な人材養成、応用分野での専門的な人材養成態勢の強化、大学院生に対する研究費や学費の補助、そして留学生の積極的な受け入れです。大きく言えば、私が学生だった頃のエリート養成の教育から専門的な人材の養成を目指した教育に変わってきています。

スライド6で示しているように、実際、今年、華東師範大学の心理・認知科学学部では、初めてMaster of Applied Psychology、すなわちマスターレベルの応用心理学の人材養成プログラムを設置しました。中国でいう「研究生」は日本語では大学院生を意味します。今年初めて約30名から40名ぐらいの大学院生を受け入れました。今年は、全員、心理健康教育専攻でした。

次のスライド7では、華東師範大学の外国人留学生についてお話しします。華東師範大学には現在900人ぐらいの留学生がいます。

また、華東師範大学では、優秀な大学院生は博士前期課程、後期課程に関わらず海外に留学させるようにしています（スライド8）。普通1年間学んでもらうようにしています。このお金は中国政府教育省が出します。保証人は指導教官がなります。私も保証人になっています。留学先の大学の先生が大丈夫だということであれば、私が保証人となります。留学費用

は中国政府から出ます。期間は1年で、短い場合は半年です。中国教育省の方針としては、優秀な学生には1年は留学させるようにとしています。

今年から始まった心理健康専攻の教育学修士課程ですが、いわゆる基礎学術的な修士課程ではなく、応用分野の専門家養成を目指す教育学修士課程です（スライド9）。

新修士課程には3つの特徴があります。その1つは「多様化」です。「単一化」に代えて「多様化」を進めます。「単一化」とは応用も学術も一緒に養成しようという形ですが、これに代わって「多様化」を推進します。後でお話ししますが、多様なプロジェクトが生まれています。2番目は「統一化」に代えて「個性化」を進めている点です。「統一化」とは、要求は1つだということです。たとえば学術の修士号は、修了前に必ずジャーナルに最低1本は論文が掲載されることが必要です。しかし専門の修士号では、そうではありません。たとえば1つケースを扱って、社会貢献をする。これは証明するものがあれば認められます。3番目は、「一体化」に代えて「柔軟性」を持たせようとしている点です。レベル分けを行い、ゆっくりと、全方位の教育態勢を作ります。これが華東師範大学の心理・認知科学学部の現在の教育方針です。

次にあるスライド10は、心理・認知科学学部で応用心理学修士課程を設置するにあたって考慮した基本原則です。4つあります。1番目は、この修士課程の持つ基礎的性格です。この修士課程は、心理学の中でも最も根本的で不可欠な知識、非常に重要な内容を扱っています。2番目は総合性です。異なる学問分野の知識をまとめて学ばせます。たとえば文学、臨床心理学、教育学、生命教育、健康教育、精神医学、あるいは音楽など。こういった様々な学問分野の基本的な部分を総合して、この修士課程はできています。3番目は、国際化や情報化、インターネット化などが進む時代の特徴に対応し、心理学や教育学の最新の成果を取り入れるなど、新しい発展の方向性を反映させた修士課程になっている点です。4番目は、上海という国際的な金融センター都市に位置する本学の特徴を反映させようとしている点です。上海は人の交流が多く、外国人もたくさんいます。日本の学校もいくつかあります。上海の日本人駐在員やその家族は今何万人にもなっています。こうした上海の特徴、華東師範大学心理学部の独自性を反映させることを目指しています。これらの基礎的性格を活かす、総合性を持つ、時代の要求に対応する、そして特色を活かすという4点が新修士課程の設置にあたって基本とした原則です。

今年の9月にこの応用心理学修士号を目指す心理健康専攻の修士課程が始まりました。ほぼ1週間に1回、海外の大学の先生による研究発表があります。多い時には1週間に2回、3回とありますけれども、院生はこのような発表に参加することが必要です。卒業の要件としてこのような講演を30から40以上聴講していなければなりません。1回の講演は、大体2時間から3時間ぐらいです。

スライド11は、授業の様子の一例です。我々はコミュニティを重視しています。住宅地や団地などのコミュニティです。心理学教育で育てた人材は、将来はコミュニティで働くわけです。ですから、コミュニティでの業務を念頭に置いて人材を養成します。我々はそこに科

学商店、科学スーパーマーケットと名付けた場所を構えます。団地や住宅地といったコミュニティでは、登校拒否やうつ状態の子どもがいたりします。心理学ではいろいろな解決方法がありますけれども、カウンセリングの方法などの心理学の教育指導を行い、アドバイスを与えたりするわけです。

こちらの写真は、「科学商店」で実習をしている様子です。政府の係員あるいは団地の責任者と華東師範大学の教授の立ち会いの下で実習を行います。また、ほぼ1年に2回、団地の住民を対象に心理検査、心理健康の検査を行います。その結果を院生や学部生が持ち帰って分析し、もし何か問題が見つければ、先生が対応します。こうしてデータ分析の方法などを指導するわけです。その後で、住民に対して助言を行います。コミュニティ・センター型の教育の実際例です。

スライドの写真は住民からの相談を受けているところです。対応しているのは大学院生です。その結果を報告書にまとめさせ、成績を評価します。写真に映っているのはケースの相談、すなわち心理相談、カウンセリングを行っているところです。博士後期課程では臨床心理学の授業や臨床心理学の実習を行います。担当教授の指導のもとで大体200時間以上カウンセリングの経験がある大学院生が心理相談を行います。

さて、国際共同学位プログラムを構築した場合、それぞれの国、それぞれの大学で文化も違いますし、社会のニーズも違います。異文化間でどのように共同していくべきか。私はケースワークと実習の分野で共同していくのが一番良いのではないかと考えています。ケースは中国語では「案例」と言います。また異文化間コミュニケーションは中国語では「跨文化」と言います。文化の境界を跨ぐことになると、カルチャーショックの問題が出てきます。このカルチャーショックを克服するために、ケースワークや実習を共同学位プログラムの中で中心に位置づけるのが良いのではないかと思います。異なる文化の間こそ研究、交流、協働の可能性が出てくるのではないのでしょうか。

本日のディスカッションでは、このことについてお話しできればと思っています。心理相談とその指導というテーマです。指導教員が1週間に1回は心理相談の実習について指導を行うといったことを、共同学位プログラムの中に組み入れる。私は非常に興味を持っております。

これはケースの検討を行っているところです。院生はレジュメを用意したり、パワーポイントを用意したりして臨みます。院生が大体20分か30分ぐらい報告し、院生達の間でディスカッションを行います。指導教授や他の教員がそれを評価します。心理相談をうまく行える能力があるかどうかについては、最初は分かりません。1年に2回から3回、小中学校に行き実習を行います。小中学校の現場でカウンセリングの能力を養成する。これはとても重要です。現在の中国では、日本と同じで、登校拒否や不登校、自殺、学習上の問題、あるいは反社会的行為など多くの問題が生じています。たとえば、ある学校で自殺のケースが重なっている場合、小中学校の新学期に合わせて私たちの大学院生が手分けをしてカウンセリングを

行います。保護者に対しても同様です。子どもたちや保護者たちが、どういう悩みを持っているか話を聞くわけです。

高校生の場合には、大学進学で親達が非常に焦っている場合があります。こういう状況に対しては、集中的なカウンセリングを行います。上海のある中学校の場合ですが、大学院生がそれぞれ1クラス——生徒数は各クラス40人から50人ですが——を担当し、大学進学の指導を行います。この写真は、その指導について報告書をまとめます。そうすることで、それぞれの大学院生のカウンセリング能力を評価します。

次に、国際交流についてお話しします（スライド13）。華東師範大学では、現在、早稲田大学と交流を行っています。早稲田大学と合同ケースの検討会を行いました。我々は学生の就職の悩みの相談や自己愛の問題などのケースを3つ出しました。早稲田大学からも3つのケースについて出されました。これについて一緒に検討しました。これは両大学合同での検討会の様子です。これは早稲田大学で発達心理学を専門となさっている青柳先生です。私もそれぞれのケースについてコメントしました。

人材育成を行って行くうえで、体と心の健康の問題はとても大事になります。大学が人材を養成しても、彼らが社会に出て行って、悩みを抱え、精神的な問題を抱えることになれば、これは非常に勿体ないことになります。大学在学期間中に教育を受ける中でも、自分の心の健康には注意しなければなりません。私は中国の太極拳をやっています。私は授業中、座りません。お茶も飲みません。ずっと立ったままです。太極拳では緩やかな運動を通して自分の心の健康を保ち、体の健康を促進します。

音楽セラピーも重要です。ハーモニカとかフルートとか台湾のオカリナ、これらを自閉症に対して使っています。各自が自分の興味のある楽器を1つか2つを選んで練習します。私はフルートをやっています。私のミュージック・セラピーの授業では10人の生徒たちが15種類の楽器を演奏できるようになりました。

中国の文化については、アメリカや日本の留学生はとても興味を持ってくれます。二胡〔中国の伝統的な楽器で、日本では胡弓とも呼ぶ〕についても音楽療法ということで興味を持ってくれます。

さて、共同学位プログラムができれば、日本からの留学生が私たちの大学にも来てくれる。東北大学とそのようなプログラムができればと思うと私は大変嬉しく思います。

このような共同学位プログラムを構築するにあたっては、これから解決すべき非常に難しい課題があります（スライド14）。問題は多いと思います。今、検討すべき課題は3つあると思います。かなり厳しいチャレンジになると思います。キーワードは国際と共同です。

課題の1つ目ですが、共同学位プログラムをどう作っていくか検討する必要があります。各国の文化と社会の要求はそれぞれ違います。たとえば日本の制度と韓国の制度は違いますし、中国大陸と台湾の間で文化や考え方が違うわけですが、この共同学位プログラムの場合、プロジェクト作りをどうするかということが1つの重要なテーマであり、チャレンジでもあります。

2番目はテキストです。テキストが必要になるわけですが、中国語ともう1つの言語で作るのか、すなわち、たとえば中国と日本語の2カ国語で書かれたテキストにするのか。あるいは日本語、英語、中国語の3カ国語にするのか。さらに韓国語も入れて4カ国語にするのか。果たしてこういうテキストを作ることは可能でしょうか。中国と日本、あるいは韓国と日本の間で教科書に関するいろいろな争いがありますが、テキストをどう作っていくのかという問題です。

3番目は、共同学位プログラムの構築にあたって最も重要なことは、先生方の意識の問題です。指導教員になってもいいという積極的な意識を持つ先生たちが、一体どのぐらいいるのか。もし来年にも共同学位プログラムを実施する場合、現時点で積極的な先生がどの程度いるのか。それが問題になります。人数的な量の問題もありますし、積極性の度合いという質の問題もあります。これらのことは将来かなり厳しいチャレンジになると思いますが、挙げておきます。

以上、詳しくお話できないところもありましたが、後はディスカッションの時間に是非いろいろとご意見をいただければと思います。どうもありがとうございました。

講演 3

南京師範大学教育学科専門学位の大学院生育成の現状および国際化

南京師範大学 傅 宏

皆様、おはようございます。

本日のシンポジウムで 30 分という貴重なお時間および発言するチャンスをいただき、感謝を申し上げます。時計を見ながら、お伝えしたい内容をなるべく短い時間でお話ししたいと思います。

本日、私は南京師範大学教育科学学院（以下、教育学科）を代表して発言させていただきます。先ほど 3 名の先生方による、各大学を代表してのお話を拝聴することができ、大変嬉しく思っています。特に本郷一夫先生による国際的共同学位に関するご報告からは、非常に大きな啓発を受けました。国際的共同学位をどのように実践していくかについて、実はこちらに伺うまでは多くの戸惑いがありました。

本日は皆様とより意義のある交流ができるよう、2 つの内容を用意してまいりました。1 つ目は我々南京師範大学、特に教育学科の大学院生育成の現状に関する簡単な紹介です。2 つ目は我々の今後の大学院生育成と国際協力の面での構想についてのお話です。皆様との意見交換の材料や、あるいは参考としてお役に立てればと思っています。それでは、まずは南京師範大学教育学科の大学院生育成の状況についてご説明します。

南京師範大学は創立から長い歴史があり、その歴史はすでに 110 年近くに及んでいます。ただし、本学は地方大学であります。先ほどスピーチされた 2 人の先生方の、北京師範大学と華東師範大学が国直属の高等教育機関であるのに対し、本学は省の高等教育機関です。中国国内での状況はこのようなになっています。もちろん長い歴史の中で、本学も高等教育や大学院教育、および基礎教育全般に関する多くの専門家が輩出されています。

現在の学科の設置状況について大まかに現状を述べると、中国が重点的に設置を進めている学科が本学に計 6 学科あり、その中には教育学原理と就学前教育も含まれています。人材育成を重点的に行っている学科にはカリキュラム教育指導論や、他の省や地方の大学でも重点的に設置している学科が含まれます。

我々の専門学位教育の発展は、おおよそ次のような過程を経て発展してきました。まず 1996 年から教育学の修士学位の取得を目指す大学院生の育成をスタートしました。本学は中国で初めて専門学位を取得する大学院生の育成を始めた機関の 1 つでもあります。その後、法学修士、芸術修士、漢語国際教育学修士などもスタートし、2009 年には教育学博士、2010 年には応用心理学修士のコースも開設されました。現在、計 7 専攻で学位を授与しており、募集に応じて入学した大学院生の数は現在まで 5788 名います。

スライド8は、現在本学で開設している専門学位の方向性を一覧表にしたものです。専門学位教育という枠組みの中で、だいたいこのような形式で行っています。指導教員と大学院生の間には上位組織があります。それは教育学修士の専門教育指導センター、学位教育センターであり、我々の教育科学学院または関連するその他の学院、および大学院部が含まれます。それから、管理事務室といった組織も含まれます。また大学院の指導教官と学生の管理体制としては学位委員会や、教育学修士の学位指導委員会などがあります。こういった方向に沿って、100名余りの教員がその中で仕事を行っています。

スライド11は2009年の統計データですが、学位授与の状況はこのようになっています。

スライド12は本学で開設している中心的なカリキュラムの状況です。我々の中心的カリキュラムは、専門学位の学習におけるいくつかの重要な基礎および専門的な内容に重点を置いて展開しています。こちらの図は関連部門での実習の状況を表しています。こちらの表でよく見ていただきたいのは、学生が実習を行う機関は学校がほとんどであり、実習機会の90%以上を占めています。もちろん他にも政府の教育主管部門や大学自身の実習施設などがあります。そのため、我々の統計では学生が参加する実践的科目は教職に関連するものに集中しています。これらが専門修士育成に関する基本的な状況になります。このような現状の下で、本学からはすでに3000名近い教育学修士が巣立っています。彼らは主に中国の江蘇省とその周辺の省で教育や教育に関連する行政管理の仕事に携わっています。彼らはまた非常に成績優秀で、このように数々の賞も受賞しています。ここまで、我々の大学院教育の現状と、教育学修士養成の方向性に関して簡単にご紹介しました。

次に(スライド18)、国際的共同学位による人材育成に関連して、南京師範大学の教育学科大学院生育成の現状と結びつけたいいくつかの構想と、それに対する我々の考え方について、皆様と共に検討してみたいと思います。

我々の全体的な構想は次のようなものです。既存の条件と可能性の両面から考えて、我々は専門学位教育を、中国本土に軸足を置きつつ、世界を見据えるものになりたいと願っています。両者を結合させることができれば、社会の発展ニーズに適応したハイレベルな教師および教育管理者を育成することが可能です。彼らの主な就職先は中国本土の小中学校です。

具体的な育成方法の構想については、教育学修士という学位取得課程を特定の教育職業背景に照準を合わせることによって、基礎教育における応用型ハイレベル人材を育てようというものです。そのコアとなるものが目標設定であり、重点となるのが育成方式のイノベーションです。難点はどのように品質を保証するか。これについては1つの考えがあります。構想をいくつかの面に分け、それらに基づいて学位と大学院生育成の基本的な道筋について簡単な計画を立てます。目標、育成システム、カリキュラム、実習、口頭試問の組み立てなどいくつかの面について簡単にお話しします。

まず育成の目標についてですが、我々は学生を基礎教育の分野で最も優秀な教師、あるいは業務上中心的な役割を担える人間、学校関係の管理職に就くことのできる人材などに育てたいと願っています。これは1つの側面ですが、それと同時に、我々の学生にはしっかりとした専

門的理論の教養や新しいものを創造する能力、優れた探求精神と能力を身につけてほしいとも願っています。さらに3つ目として、教育指導や管理において実際に問題を解決できる良好なスキルを養うことも求めます。もちろん、学生の人格面や個人的な心理状態が健全であってほしいのは当然のことです。これらが目標面での我々の基本的な考え方です。我々の養成計画はこのような目標に基づいて設計したいと考えています。それがもし専門上比較的高いレベルの要求であるなら、養成計画もそれに見合ったものを考慮しなければならないからです。我々は実際の場面での応用力を育成の基本方針とし、職業上の必要性を満たすことを目標としています。多元的な教育学修士の育成システムを作り上げたいと思っています。このようにして、我々は大学院生の専門学位教育の特徴を際立たせたいと考えています。

具体的にお伝えしたいことは2点あり、それはまた共同学位に対する我々の1つの考え方でもあります。具体的に言うと、現在の2年制の専門学位教育の方向性はそのまま維持した上で、1年間の基礎訓練、あるいは1年半の基礎の上に1年間または半年間の実践訓練を組み合わせることを模索しています。これは学生の有する背景に合わせて設定します。簡単に説明しますと、現在の専門学位は中国本土の育成方式に基づいたものであり、基本的にはほぼ2年で修了します。そこでその2年のうち1年間を基礎的な訓練のカリキュラムとし、別に1年間または半年間で実践的な訓練を行います。通常、この専門学位コースに入学する学生には2種類あり、1つは学部卒業後に直接進学する学生です。これらの学生には基礎的なカリキュラムの他に多くの実践的なカリキュラムで訓練を積んでもらいたいため、1年+1年の方式とします。

それとは別に、小中学校の教師など現場から専門学位コースに入学してくる学生もいます。このような学生は実践的な訓練の基礎ができているため、基礎理論の面でより訓練を積んでほしいと考え、1.5年+0.5年の方式を適用します。こうした育成方式に基づいて共同学位を考えた場合、我々にはある提案、または構想があります。それはどの国から来た学生であっても、少なくとも1年以上の基礎的訓練を受けるという前提のもと、国際交換学位およびダブル・メジャー制度の可能性を模索します。これが育成に対する1つ目の構想です。

次に(スライド24)カリキュラム構成の面についてお話しします。現在我々は、それぞれの育成の方向性の特徴やその法則に基づき、学生の実践的な教育指導レベルを向上させることを目的として、カリキュラムから必修科目の比重を減らしています。最も基礎的な必修科目は残していますが、それ以外の必修科目は適宜削減し、特色あるカリキュラムを増やしています。たとえばケーススタディ、教育改革の最前線の紹介、古典的名著の読書案内、優れた教師経験の研究検討、特殊技能の強化などの面の細分化されたカリキュラムを新たに設けました。同時に多くのカリキュラムの中で実践面をより深く掘り下げ、教育指導の相互研究や個別事例に基づいた教育などを強化しています。こうした背景の下で、もし条件が整えば、違う国や地域の間で指導教員を交換し、それぞれの国の教育や文化とかわりの深いカリキュラムを設置し、大学院生の視野を広げることができればと考えています。

この問題については、前回、東北大学の教授が南京師範大学にお越しになった際にもこのような構想をお話ししました。つまり、まずは我々の自国または地域の文化、あるいは教育の特

色にかかわるカリキュラムの設置から始め、段階的に共同育成に拡大していきたいという内容でした。

教育学修士のカリキュラムについては、おおむねこのように考えています（スライド 25）。すなわち、基礎理論を発展させると同時に、専門学位コースの学生がその学科の最前線の内容をよりしっかりと学ぶための手助けをすること、研究の規範を的確に理解し把握すると同時に、学生が自ら新しい研究テーマを生み出すための手助けをすること、教育の問題を適切に理解すると同時に、新しい教育理念をより大きく発展させること、この3つを基礎として、我々の学生が国際的な視野を切り開き、自らを省みながら教育活動を行っていきけるよう支援したいと考えています。

当時、この問題について議論した際、それぞれ異なる地域、異なる学校にいて、さまざまな考えを持つ我々がコミュニケーションと交流を行うことで、お互いに啓発し合い、発展することが可能だと感じました。教育指導の方式についてもいくつかの考えがありますが、それを簡単に述べると、対話と研究検討を強化し、重大な問題を追跡し、教育上関心の高い問題に焦点を当て、典型的な事例を分析し、教育理念を再認識し、最終的にはお互いの経験を参照し合い、視野を広げると共に発展していくことと考えています。

ここで、教育方針に関して我々の考えをここで少しご説明しなければなりません。先ほど皆様お気づきになったかと思いますが、大学院の専門学位教育は中国ではまだ比較的最近始まったばかりですので、まだ経験を蓄積している過程であり、これまでの大学院の普通学位教育を行っていた時の経験を、今の専門学位教育にそのまま当てはめることはできません。そのため専門学位コースの教育方針に関しては、特色ある教育内容をより多く試み、実践していきたいと思っています。

たとえば、専門学位コースの学生に対し2名の指導教員をつけます。1名は大学教員、1名は第一線、つまり現場の出身者です。たとえば指導力に優れた経験豊かな小中学校教師とすることなどです。また我々は学生に対し、将来の就職に役立つ専門資格の取得などの支援も行うことを考えています。教育方針での我々の考えはこういったものですが、国際的な学生の共同育成を行う際に、これらの内容を検討し、参考にいただければ幸いです。

最後に論文の口頭試問についてですが、我々の考えはおおよそ次の通りです。現在、我々は学生に対し、論文の口頭試問や傾向の考査以外に、カリキュラムのデザインや個別事例など、より専門に関連した内容で、より多くの形式を提供することにより、口頭試問の場で彼らの実践能力を表現できるようにしようとする試みを行っています。

そこで、もし条件が可能であれば、口頭試問の形式を適宜に刷新し、複数の国や地域間でこれらを試み、異なる学校の教授を招いて相互研究を行ってはどうでしょうかと思います。初期段階では相互研究、その後は相互参加の形で共通の学位、論文の口頭試問活動を行いたいと望んでいるところです。

最後に、共同学位をサポートする制度に関して、いくつかの提案と構想を述べさせていただきます。

1 つ目は、もし条件が整えば、関連する大学、国や地域の教育行政部門の幹部、大学教師らの代表者で構成された、専門学位教育に関する合同会議制度を設立したいということです。これがあれば教育学修士の学位教育に関する理論や方法、問題や対策を定期的に検討し議論することができます。それにより教育学修士育成の国際化を真に効果的に推し進めることが可能になると思います。

2 つ目は、相互訪問や交流を通じてそれぞれの異なる点を発見し、協力を模索することです。これには教育学修士課程の学生の育成、教育実践活動、および管理面での研究と交流などを含めることができます。

3 つ目は、具体的な交換カリキュラムは、最初は一部の実際のカリキュラムからスタートし、段階的に共同育成や共同学位制度へと発展させていきたいと考えています。

南京師範大学は長い歴史を持つ大学であり、我々の教育学科もまた長年にわたり、教育専門の大学院生の育成に大きな貢献を果たしてきました。今回のこの探求的な取り組みに対しても我々はぜひ貢献を果たしたいと望んでいますし、またそうできると確信しています。

本日は皆様の貴重なお時間をいただいたことに感謝いたします。

ご清聴ありがとうございました。

討議 1

東北大学と中国の3つの報告を受けて

清水： 残された時間は10分くらいなのですがけれども、ご質問等があれば受け付けたいと思います。…それでは、ソウル国立大学校の李炳政先生、どうぞ。

李炳政： 質問がないようですので、私から質問したいと思います。

東北大学で発表されたプロジェクトにおいて共同学位制の話がありましたが、この教育がどのような意味なのか明確ではないように思います。

私の理解としては、3つの意味があるように思います。1つ目は高等教育全般に関する意味での共同学位制、2つ目は教育学、教育と関連する全分野において、たとえば教育学を含んだ数学教育、社会教育、歴史教育のようなものをすべて含むものがあります。3つ目は教育学、つまりカリキュラム、教育評価、教育哲学のような分野で、この3つに分類することができると思いますが、東北大学の主な関心はどれに該当するのか知りたいと思います。

本郷： はい。ありがとうございます。先ほど十分に説明できておりませんでした。私の資料のスライドの4枚目に簡単に書いてあります。今ご指摘いただいた3つの水準があります。どのような国際的教育指導者なのかという点ですが、スライドに示されているように、必要とされる人材の中には、教育の研究者——これは将来研究者になっていく人で、国際的なマインドを持った研究者です——、教育行政に関わる人で国際的なマインドを持った行政官、それから、今ご指摘いただきましたように、数学とか物理とかいろいろな教科の教員——彼らは通常はドメスティックに教育をされており、その国の中で教員と位置づけられてきました——が含まれています。東北大学ではこのプロジェクトを通して、これらの人材を東アジアについての国際的なマインドを持ったリーダーとして育てていきます。このように、3つの水準の人材を作りたいと考えています。

研究の領域、研究者の領域としては、いわゆる教育学と心理学がありますが、その両方の人材の養成を考えています。かなり欲張りな構想ではありますが、どこか特定の分野に限定をした国際的教育指導者ではなくて、さまざまな分野で活躍できる国際的教育指導者を養成したいと思います。そういったカリキュラムを、今日来ていただいている大学の先生方とディスカッションしながら作っていきたい。そのような構想でございます。

清水： 高麗大学の李蓮淑先生、よろしく申し上げます。

李蓮淑： 私は高麗大学校師範大学の学長をしておりますイ・ヨンスクです。私の専門は家庭

科教育で、主に家政学の教育を担当しています。

まず、このような共同学位に関連したシンポジウムを開催して頂いた東北大学の関係者の皆様に感謝の言葉を申し上げ、このような素晴らしい席にお招き頂いたことに、もう一度感謝を申し上げます。

このシンポジウムは非常に興味のあるテーマであり、私たちが進むべき方向であると考えます。すべての講演を大変興味深く聴かせて頂きました。

私は、行政的な支援の部分に対して考えてみました。このような素晴らしいプログラムが施行されるためには、予算が最も重要な問題であると考えられます。本郷先生のご発表では、東北大学は2011年から5年間、この課題を行う計画のようで、これに対する予算を政府から支援を受けると仰っていましたが、課題を遂行するその5年間で、政府の支援を受けられるのかを知りたいですし、また5年後に政府の予算が切れた場合、どのようにしてその予算を確保するのかという問題があります。

また、このプログラムを行うためには、すべての大学で予算を確保する必要があり、それに対してどのように確保するのか。政府や民間から資本を誘致しなければならないのか。そのような予算の部分も少し議論できればと思います。

本郷： どうもありがとうございました。ただいま、予算のご質問がございました。これは、文部科学省の特別な運営交付金のプロジェクトとして5年間取り組んでおります。私どもとしては、3年の基礎研究、それから2年の実践的試みを行って、さらにその上でまた外部資金を獲得する努力をして参りたいと考えています。その際、私ども単独で行うよりも、そのパートナーのコンソーシアムを組む大学と協働して予算を要求していく。現在「キャンパス・アジア」構想等の文部科学省のプロジェクトも動いておりますので、ぜひ私どもは5年間に基礎を築いて、さらにその上で外部資金を獲得する努力を協働で行って参りたいと考えています。

学生については、奨学金の準備もありますし、あるいはその授業料の相互の免除ということも考えなければいけないと思っています。さらに、学生の住居、生活費についてもケアしなければいけません。さまざまなその学費等に関する経費の問題があります。それらについては、1つ1つ、パートナー大学、コンソーシアムを組む大学と協働して検討しながら、お互い相互・互恵的な方向性を作って、学生がより学びやすい環境を整えていく。そういうふうを考えています。

清水： あと1つぐらい、ご質問があればお受けいたします。いかがでしょうか…。はい、それでは、午後もプログラムがございますので、午前中はここで休憩ということにさせていただきます。どうもありがとうございました。

第二部

講演 4

高麗大学校における国際交流と留学

講演 5

グローバルな教育コンピテンスに向けて
ソウル国立大学校教育学部の現状と構想

討議 2

韓国の 2 つの報告を受けて

講演 6

国際的デュアル・ディグリー・プログラム開発の経験とチャレンジ

講演 7

若き才能を引き出すための新たなチャレンジ
国立政治大学の事例分析

討議 3

台湾の 2 つの報告を受けて

高麗大学校における国際交流と留学

高麗大学校 韓 龍 震

高麗大学校の学生交流について報告致します。

今日ご報告することは4つです。学生の移動と関連した国際的な動向について、1つ目は派遣と受入、2つ目は高麗大学校の簡単な紹介、そして3つ目は高麗大学校の国際化、4つ目は高麗大学校教育学部——韓国では「師範大学」と呼びます——でどのように人材を育成しているかについてです。

スライド3は、留学生数の推移を示しています。2006年から2010年までの5年間の統計です。大学院レベルで見れば2008年度に若干減少しました。2007年度に比べて2008年度に減少したのは、経済的な問題が原因だと思われます。つまり、米国の経済危機の影響です。一方、学部の場合は、継続して増加していることが分かりますが、これは韓国全体の統計で、学部レベルでは継続して増えている反面、言語課程(Language Course)に入る学生は若干減っています。

全体から見れば、韓国の場合、留学に来るよりも留学に行くことが多く、現在25万人程度の学生たちが韓国から外国に留学しており、留学先は米国が最も多いようです。2006年度と2010年度の統計を見ると、その前年度と比較して増加したか減少したかが分かります。2006年度は2005年度よりも韓国から日本に留学する学生数が減少しましたが、2010年度を見れば、再び増加しています。韓国から、現在、米国、中国、日本、オーストラリア、英国の順に留学していることが分かります。

他の国から韓国に留学する受入の場合、中国からの留学生が最も多く、これは日本でも同様であると思われます。数字上では2009年度が最も多く、2010年度は数値は増えますが、比率そのもの自体は68.9%に減少しています。日本の場合、比率は減っているが、数値は継続して増えています。韓国に留学する学生たちの出身国の3位はモンゴルで、4位は米国、その後ベトナム、台湾の順に続きます。

スライド5は、各国の留学生に関する計画を示しています。中国の場合は、2020年までに50万人の留学生が来るものと予想されています。同じく2020年までに台湾は43万人、日本は30万人の留学生を招く計画です。韓国の場合、2012年までに10万人の留学生を招く計画です。

現在、韓国では留学生の量的な増加よりも、留学を受け入れる大学に対する評価の向上を追求しています。留学生のためのプログラムの運営内容を評価して、プログラムを十分に運営できない大学は留学生を受け入れることができないようにする政策をとっています。そのため、数字よりも質的な側面において、韓国で勉強しやすい環境を作ろうとしています。

最近、国際的な交流協定と言えるキャンパス・アジア・プログラムとアジア太平洋高等教育の

学位認定と関連したプログラムが新たに作られました。キャンパス・アジア・プログラムは、今年の日本の場合、約13の大学が選定され、その大部分の大学は国立大学です。アジア太平洋の学位認定については、すでに1983年度にユネスコで一度決定され、最近は、去年の11月に様々な国々が集まって確認をしました。内容は、ナショナル・インフォメーション・センター (NIC) を作り、他国で取得した学位を自国でお互いに認めるシステムを再度互いに確認して協議することを約束しました。

スライド7は、高麗大学校の歴史と現状です。1905年に普成専門学校から始まり、1946年に高麗大学校になりました。そして、2005年に「民族高麗大学」として、「高麗大学の百年を振り返って今後の千年の計画を立てよう」という意味から、「世界高麗大学校千年—Global KU towards the New Millennium—」計画を立てました。

高麗大学校には約39,000の在学学生がいますが、学部生が約24,000から25,000人、大学院生が約9,500人、そして外国人留学生が4,000人です。そして、教職員は3,000人で、半分は常勤、半分は非常勤講師とパートタイムで、大学職員は483人(非正規職は除外)です。

現在、81学科、20の単科大学学部、22の大学院、そして120の研究所があり、その特徴の1つは、英語による授業が35%を占めることです。授業の3分の1は英語で授業が行われています。新たに赴任する教授は、英語による授業をかならず担当しなければならないという規定があり、近いうちに、ますます英語授業の比率は高まるものと予想されます。しかし、赴任後3年が過ぎれば、このような英語授業に対する負担は少しずつ減らされます。

スライド9は、高麗大学のインフラを示しています。キャンパスの様々な施設と学校内の障害を持った学生に対する配慮や支援など、そして、Wi-Fiゾーンを利用したインターネット使用環境を構築しています。

高麗大学校の外国人学生についてですが、高麗大学校から外国に出て行く留学生は2009年に最も多く、2010年には若干減少しました。減少したのはサマー・キャンパスであり、1,500人程度です(スライド10)。一方、増加したのは高麗大学校の受入留学生です。外国から高麗大学校に留学に来る学生たちと、学位課程のために留学に来る留学生は順次増加しています。

高麗大学校の留学生政策は大きく3つに分けられますが、1つ目は、学生の移動について、2つ目は、大学の研究水準をいかに上げるかという問題、そして3つ目は、大学の内部的な改革と革新的な後援などです。

スライド10に示している学部学生に関しては、学生交流プログラムを促進させるということが挙げられ、その次に、学位を取る者に良い条件を提供すること、そして、学生相談や奨学金を提供することが挙げられます。大学院の場合は、外国から留学に来る留学生は、学費の50%の減免を受けることができ、特に英語の点数が良い学生は100%の減免を受けることができます。外国から留学に来た学生たちは、授業料を払わずに通うことができる多くの機会が提供されています。

スライド11の中に含まれる教授陣の研究資金に関する問題ですについて話します。これは、教授たちがどのようにすればより多くの研究費を確保できるかについて、多くの大学で悩んで

います。

その次に、良い教授陣を迎えるかという問題です。また論文を書いたり、本を出版したり、学会誌に論文発表をすればインセンティブが提供されます。

大学内ではスタッフ・ディベロプメント(職員の職能開発)の問題が挙げられます。これは、大学職員をどのようにして教育するかについてですが、順次国際化が行われることにより、大学職員が英語を話さなければならない必要性が高まっているためです。そこで、大学職員の語学力と、能力のある大学職員を採用することが重要となります。

また、内部の行政システムですが、これに関しては行政改革や建物施設のリモデリングを通して、大学内の国際化戦略を進めています。

学生については、大きく4つのことが挙げられます。1つ目は Degree Seeking (学位取得) があります。2つ目は Exchange Program (交流プログラム) で、これは6ヶ月から1年のコースです。3つ目は Short Program (短期プログラム) で、2週から6週のコースで、International Summer Campus で夏期プログラムです。4つ目は Language Program (言語プログラム) で、これは韓国語を習うことができる講座が用意されています。

複数の学位と関連した部分では、現在の S3 ASIA MBA プログラムがあります。これは、高麗大学校、シンガポール国立大学、復旦大学の3大学の連携による経営学修士学位(MBA)の取得プログラムです。「S3」とは、各大学が位置するソウル (Seoul)、シンガポール (Singapore)、上海(Shanghai)の3都市名の英語イニシャルから取ったもので、3学期制で運営されます。

来年からは、キャンパスアジア・プログラムにおいて、早稲田大学、高麗大学校、北京大学、そしてタマサート大学(タイ)、南洋理工大学(シンガポール)と共に共同学位プログラムを運営することとなります。その他に高麗大学校が参加しているプログラムは、APRU (環太平洋大学協会) プログラムと U21 (Universities 21) プログラムがあります。BK21 (Brain Korea 21) と所謂ワールドクラスと言われている World Class University (WCU) 、すなわち、世界的な学者たちを高麗大学校に迎えて学生たちを教えるようにするプログラムがあります。教育学科もこの WCU プログラムに参加しており、外国人教授と一緒に授業を行っています。

開放講座ですが、これは授業内容をインターネット上に上げておき、学生たちが自由に授業を聞くことができる開放講座です。

大学内での学生交流については、Student Exchange Programs を ISEP と言いますが、約 292 人のメンバーが所属しています。

また、インターンシップについてですが、これは4年間の8学期のうち、7学期は高麗大学校で授業を受け、残りの1学期は外国で勉強するプログラムです。

KLCC (Korean Language & Culture Center) は、1986年に初めて作られて韓国語を教えており、1年で約3,000人の学生たちが韓国語を学んでいます。

そして KUBA とは、バディ・アシスタント (Buddy Assistant) のことで、韓国の学生と留学生をマッチングさせて、メンターとメンティの関係、または友達関係を結んで留学生の適応を助けるプログラムです。

IOSSC とは、留学生のためのワンストップサービスセンターで、行政業務を一箇所ですべて処理することができるようにしたシステムです。

教育分野においては、グローバル・リーダーをどのように養成するかが重要な問題となりますが、根底にはサポーター・システムがなければならず、その次にグローバル・スタンダード、グローバル・ネットワーク、グローバル・スコープ（世界的な視野）があり、このような土台の上にコミュニケーション・ナレッジ、キャンパス間の連携が行われなければなりません。

また、どのようなビジョンを持ってリーダーになるかについては、このような教育システムを整えるために次のような統計（スライド 18）を参考にすることができます。

大学を卒業するまでに到達しなければならない最低限の英語のスコアについてですが、まず、英語の試験の形式として TOEIC、PBT、CBT、IBT の 4 種類があります。それぞれの試験形式の目標スコアはご覧の通りです。それらの英語スコアは最低限の卒業単位で、卒業時までに到達しなければならない点数になっています。また、学部生の専攻によって到達目標の英語スコアも異なります。教育学部では様々な専攻があります。英語専攻が一番高い目標スコアになっています。

グローバル・ネットワークについては、他の国に寄宿舎を設置しています。カナダの UBC (Univ. of British Columbia)、オーストラリアのグリフィス大学、英国の RHUL (Royal Holloway, Univ. of London)、米国の UC Davis (University of California, Davis)、そして UC Penn (The University of Pennsylvania)、早稲田大学、中国の人民大学などに寄宿舎を設置しており、高麗大学校の学生だけが利用することができます。

学生たちのグローバル・ネットワークについては、学生間で交流できる様々なプログラムがあります。毎年、高麗大学校と延世大学校では Annual Ko-Yon-Jeon というコンペティションが行われ、5 月には Granite Tower Festival という学園祭が行われています。学生会館には、学生たちが活動するクラブが約 165 あり、外国人留学生もたくさん参加しています。

グローバル・スコープについては、インターンシップを行うことができ、大部分が休み中に利用しています。これは教育実習で、教育学部（師範大学）の場合、学期中に 4 週間から一学期の間、今年度は約 48 人の学生たちがこのようなインターンシップ・プログラムに参加します。そして、グローバル・スコープを持つことができるように、ノーベル賞を受賞した方々を大学に迎えて特別講義を行います。これまでに 10 名のノーベル受賞者の方々を迎えて特別講義を行いました。このような方々を通して、学生たちが世界的な見識、グローバル・スコープを持つようにするプログラムです。

高麗大学校教育学部（師範大学）の学生たちは中国、インドネシア、日本などの複数の学校でインターンシップを行っています。教育学部（師範大学）の学生たちが海外の教育実習に行くために、英国の中学校ともプログラム交流を行っています。米国の場合はハワイ大学やユタ大学があります。ユタ大学の場合はユタ大学の教育実習を受けることで米国の教師の資格証を取得することができるプログラムを準備しています。もしそうなれば、韓国の師範大学を卒業してユタ大学に行き、教師の資格証を取得すれば米国の教師になることができます。ミズーリ

大学やフロリダ大学にもありますが、私たちが行くだけでなくミズーリ大学からも学生たちが来ており、学生たちがお互いに交流できるプログラムとなっています。

手短に中心的内容だけをお話ししました。ありがとうございました。

グローバルな教育コンピテンスに向けて ソウル国立大学校教育学部の現状と構想

ソウル国立大学校 宋 眞 雄

私はソン・ジンウンと言います。韓国のソウル国立大学校から来ました。英語で準備し、英語でお話しなければいけないと思い、準備しましたが私の英語のつたないことをお許してください。上手な英語でお話するようにしたいとは思いますが、私の英語はきっと韓国語よりずっとひどいです。

本日はソウル国立大学校のケースについてお話ししますが、スライド2に示しました順番でお話させていただきます。まず、韓国と韓国の教育に関する全体的な背景について少しお話し、次にソウル国立大学校について話します。ここでは特にソウル国立大学校の国際的な側面について少し紹介します。その後、ソウル国立大学校教育学部について話をします。ここでは特にグローバル・コンピテンスと国際化に焦点をあて、そこで行われていることにさらに絞って紹介します。最後は韓国政府の教育科学技術部によって作られた最近のプログラムについて少しお話しします。これについては簡潔にまとめるつもりです。

ご存知のように韓国は第二次世界大戦以降解放され、さまざまな時代を経験してきました。現在の韓国は非常に狭い面積に約 5,000 万人が住んでいます。また、国土の 70%が山地ということもあり、そのために人口密度が非常に高くなっています。現在、我が国の出生率が世界で最も低いので、韓国にとって難しい問題となっています。

韓国は多くの制約を抱えています。すなわち、天然資源がなく、科学、産業、富の遺産がなく、過去からの遺産もありません。多くの東アジアの国と同じで英語が使えるという強みもありません。さらに、わが国独自の制約もあります。多くの困難な時期を経験し、複数の超大国と隣接し、未だに南と北とに分かれています。これらが我が国の主な制約です。つまり、我が国は人的資源と教育によって国を発展させるしかないのです。

こうした状況が韓国だけの文化とは思いません。東アジアの国々が共有している文化があります。私たちは教育を大事に思い、社会で多くのことを教え、学ぶことについて共通の考え方があります。東アジア文化の中に生きる私たちは、社会やグループを優先させます。これは私たちが理解しなくてはならない基礎となる文化的背景であり、私たちはそれを踏まえて、教育政策やその他の社会政策を構築しなければなりません。

韓国の教育が称賛されたことがあります。『ニューズウィーク』誌に最近発表された世界の国の優秀度調査の結果によれば、韓国は世界の 15 位にランクされています。特に教育の面ではフィンランドに次いで 2 位にランクされています。ですが、私は韓国の教育専門家として、

我が国の教育が問題も困難もたくさん抱えていることを承知しています。

バラク・オバマ大統領はよく韓国の教育を称賛し、応援しています。韓国の教育方法の一部を取り入れるように働きかけ、アメリカの文化の一部を変えるためにそれを使用しました。ですが同時に、韓国の元教育部長のうちの 1 人は、バラク・オバマ大統領の立場に異を唱えています。彼は社会的圧力が強すぎ、時にはそのために、韓国の教授と学習の方法が必ずしも楽観的でもなく、最適化されておらず、修正し、変えるべき点が多々あると指摘しています。私もそれは韓国の教育について正しい、適切な評価だと思います。

韓国の教育システムについてですが、私は基本的にはアメリカの 6-3-3-4 制（小学校、中学校、高等学校、大学）に沿ったものだと思います。ほぼ 87%と、9 割に近い韓国の学生が継続教育や高等教育のレベルに進み、その割合はほぼ世界最高です。しかしそれが必ずしも良いことばかりではなく、多くの問題も引き起こしています。

教師の場合、韓国では教員養成について 2 つの別なシステムがあります。1 つはソウル国立大学校のような大学の教育学部によるものです。ソウル国立大学校は総合大学であり、その中に教育学部があります。高麗大学校も同様です。高麗大学校は大きな総合大学で、その中に教育学部があります。このような総合大学における教育学部で多くの中等学校の教師が養成されています。卒業して第一学位を取ると、教師候補者としての資格が得られ、その後採用試験を受けて中等学校の教師になります。初等学校、つまり小学校の教師は、もっぱら初等学校の教員養成を主な目的とする教育大学によって養成されます。他の方法で教職に就く道もありますが、すべてをお話しするのはやめようと思います。

このスライド 10 は韓国の教育行政を示しています。現時点では教育科学技術部が教育と科学・技術を所管しています。それぞれの部門に次官がいます。約 4 年前、これら 2 つの部が統合されて教育科学技術部（MEST）ができました。それまでは教育部と科学技術部がそれぞれ存在していました。政府はそれぞれの部門と連携を取っていました。今は、行政として教育科学技術部と 16 の地方教育事務所があります。この 16 の地方教育事務所は主に初等教育と中等教育に責任を持っています。韓国では来年大統領選挙が予定されていて、候補となる可能性が最も強い 2 人とも科学技術畑の出身ですので、また教育部と科学技術部に分離されるのではないかと考えている人が多いようですが、私にはどうなるか分かりません。

このスライド 12 は韓国教育の基本的な統計です。多くの国、日本、台湾、香港と同じように、韓国は成績の国際的比較調査、学習到達度調査（PISA）では、科学的リテラシーと数学的リテラシーだけでなく、読解力でも常に優れた成績を挙げています。一方で韓国の生徒の場合、成績はとても良いです。一方で、学習に関する生徒の取り組みと満足度は低くなっています。満足度の低さに関して言えば、韓国と日本が世界で最も低く、常に最低水準にあります。これは事実で、生徒は一生懸命勉強し、とても良い成績を取りますが、満足度と喜びは極端に低いのです。それが教育分野で私たちが直面する最大の問題です。

このスライド 13 は韓国で教師になるための条件を示しています。すべて説明はしませんが、お読みいただいて疑問があれば、後でご質問ください。

韓国で教師になるための採用試験は3つの段階があり、しかもますます難しくなり、競争が厳しくなっています。韓国で教師になるのはとても難しく、実際、中等学校教師の平均競争（合格）率は20倍で、普通は学生のうちトップの5-10%だけが教育大学や大学の教育学部に進むことができます。しかし、幸い、教員志望者の素質のレベルはとても高くなっています。ちなみに、このデータは国レベルの統計によるものです。

スライド 15 は韓国の教育の概要です。日本や中国でも同じだと思いますが、最高の大学に入るには特に競争がとても激しくなっています。韓国にはソウル国立大学校、高麗大学校、延世大学校を意味する「SKY 大学」という言葉があります。これらのトップ3の大学は「SKY 大学」と呼ばれており、これらの大学に入学するのはとても大変です。これらの一流の大学に入れるかどうかは、中等教育段階での学力到達度によって左右されていると言っても過言ではありません。すでに触れたように、韓国の学力到達度は高いのですが、学ぶことの喜びと満足度は低くなっています。

ソウル国立大学校についてですが、ソウル大学校にクアナクキャンパスというキャンパスがあり、かなり大きなキャンパスです。とてもきれいなところもあります。

ソウル国立大学校は正式には1946年、当時存在していたいくつもの単科大学を統合して設立されました。現在では16の学部と1つの大学院、9つの特別大学院があります。常勤の教職員は約1,900人で、別に3,700人の非常勤教職員がいます。事務職員の数は約1,000人で、多くの学生がいます。現時点では240人の外国人教職員がいて、常勤教職員の約15%が外国人です。研究では、SSCI（社会科学引用インデックス）についての発表では韓国は世界の20位にランクされています。最近、QS（クアクアレリ・シモンズ）世界ランキングでは、ソウル国立大学校は42位にランクされ、ソウル国立大学校の世界ランキングは通常は40位から100位のあいだにあります。ソウル国立大学校は大学レベルで220の大学と、学部レベルで250の大学と学術交流協定を結んでいます。このように、私たちの国際的關係はかなり広いものになっています。

ソウル国立大学校が最近重視しているのは、ありとあらゆる努力を注ぎ、世界をリードする研究大学になることです。そのためにソウル国立大学校の場合、今独立行政法人制度が導入されようとしています。来年から、ソウル国立大学校は国立大学ではなくなり、独立行政法人となります。これは非常に重大で決定的な瞬間です。私たちは日本の国立大学法人化の事例から多くを学びました。そしてそれが必ずしも最良の選択とは言えないことを私たちは承知しております。しかし、私たちはその決定についてとても真剣に考えています。

いずれにせよ、ソウル国立大学校の教職員の大多数が独立行政法人化を受け入れるとすれば、その理由は、世界でより強い競争力を持つ大学になるためです。国立大学の枠組みの中では、教職員やスタッフ配置、研究費使用など多くの事柄について、私たちの自由は非常に限られていました。ですから今が非常に重大な瞬間なのです。私たちは今、新たな外国人教職員の採用にさらに力を入れることを重点にしていますから、皆さんにチャンスがあれば、非常に高い評価と名声を受けている外国人のメンバーが当校に加わっていただくことを歓迎します。

ソウル国立大学校では、デュアル・ディグリー・プログラムについても拡充しているところです。私たちはまた、高麗大学校がこの分野では先行していると思いますが、やはり受け入れるだけでなく派遣も含めて、学生交換プログラムを是非とも実施しようとしています。ソウル国立大学校は今後研究の量に重きを置くだけではなく、研究論文や研究活動の質に重点を置くべきだということを承知しています。

私たちは英語で行う授業を増やしています。高麗大学校には及びませんが、その数は増えつつあります。ですが同時に、英語で行われるコースの質について心配する教職員も少なくありません。

さて、私が所属すソウル国立大学校教育学部について少しお話ししましょう。ここで紹介するのは教育学部の一面です。

教育学部では4年間の学士課程で、主に中等教育レベルの教員養成を行っており、修了すれば学士号が得られます。この会議にお越しの皆様は大学とはかなり違っているかもしれませんが、ソウル国立大学校教育学部には15の学科があります。学科のうちの1つは教育学科で、残りの14学科は教科を基礎にしたものになっており、韓国教育科、数学教育科、理科教育科などがあります。他の国の他のシステムとはかなり違う場合があります。ソウル国立大学校の学生の資質は最高であることを私たちは承知していて、私たちはこうした学生集団を相手に、韓国の教師だけでなく、世界の教育実践のリーダーでもある、世界のトップレベルの教育者となる十分な機会を彼らに与えるために、懸命に努力することが必要だと考えています。

私たちの学部はとても研究志向の強い学部です。お話したように、学部には15の学科と大学院生のために学科の枠を超えた7つのプログラムがあります。4つの実験校があって研究開発と強いつながりを持っています。2つのBK21（ブレイン・コリア21）がありますが、高麗大学校にもとても強力なBKグループが1つあります。

スライド21は教育学部の学科です。学士、修士、博士のプログラム、教育学科ならびに14の学科があります。学科の枠を超えた7つのプログラムがあります。家政、音楽、芸術、早期児童、特別教育、環境教育などに加え、最近、主に発展途上国におけるあらゆる教育問題に関わるグローバル教育協力のプログラムが加わりました。

ここでの研究ですが、ソウル国立大学校教育学部には長い歴史を持つ2つの英語ジャーナルがあります。1つがSSCI（社会科学引用インデックス）ジャーナルである *Asia Pacific Education Review*（「アジア太平洋教育レビュー」）で、もう1つが *The SNU Journal of Education Research*（「ソウル国立大学教育研究ジャーナル」）です。こちらはまだSSCIジャーナルではありませんが、最初の雑誌は主に教育一般についてのもので、2番目の *SNU Journal of Education Research* は主に教科教育の分野についてのものです。

教育学科には2つの長い間続いた定期的な国際会議があります。1つは教育学科が行うもので、「教育研究についてのソウル国立大学教育研究機関国際会議」、略してICERと呼ばれます。会議は毎年開催されます。もう1つは「次世代社会のための教育科学会議」です。これは、これから簡単にお話するBK21によって開催されてきました。

お話させていただいたように、韓国政府による国家プロジェクトである BK21 プロジェクトについて十分お話する時間はないと思います。教育学部門では BK21 は韓国全体で 3 つあり、1 つが高麗大学校に、他の 2 つがソウル国立大学校にあります。SENS は主要な BK21 グループの 1 つです。SENS は Science Education for the Next Society (次世代社会のための科学教育) の略です。以前は約 17 人、今は約 20 人の教授、約 50 人の大学院生、博士研究員、スタッフがいます。BK21 研究グループの予算は主に大学院生の研究と旅費に使われます。出席する国際会議がある場合に、論文を公表する場合に彼らを援助し、通常は彼らの公表のための費用などを援助します。

その SENS BK21 グループには、外国人の教職員が 2 人いて、1 人は中国から、1 人はアメリカから来ています。2 人と多くはありませんが、共にアメリカからの外国人の学生がいます。私たちはよく国際会議を共催します。これらの会議は今年 SENS グループが共催したものです。現在、グループの博士研究員だった 2 人が、海外の大学で研究しています。1 人がカナダで、1 人がトルコです。外国人の客員教授によるセミナーも数多く開かれます。こちらスライド 24 がリストです。今年は約 14、5 人の外国人ゲストに、SENS グループでセミナーを開いてもらいました。

ソウル国立大学校教育学部の国際的な関係はどうなっているのでしょうか。私たちは学術交流協定を結び、学部レベルでウィスコンシン大学マディソン校、ノーザン・アイオワ大学、南カリフォルニア大学と連携し、イギリスとはロンドン大学教育研究院、キングス・カレッジ・ロンドン、アストン大学、エッジヒル大学などと連携しています。他にもいくつかの大学と連携しています。

また私たちは 2 つの国際的なネットワークに参加しています。1 つは、スライド 26 にある以下の機関からなる世界主要教育機関国際連盟 (IALEI) です。ソウル国立大学校がその 1 つで、ロンドン大学教育研究院もそうです。私たちは APRU (環太平洋大学協会) のメンバーでもあり、APRU 教育学部長会議に参加しています。このように定期的な会議が頻繁に開かれています。

次に共同学位プログラムについてお話しします。これは事例として、カナダのアルバータ大学とのデュアル・ディグリー・プログラムについてお話ししましょう。ソウル国立大学校教育学部とアルバータ大学教育学部との間で、大学院レベルでスタートしたばかりのプロジェクトです。本拠となる大学で少なくとも 1 年間を過ごさなければならないなどいくつかの要件があり、登録、支払い、コース終了後の取得単位などいくつかの規則があります。もちろん、これはデュアル・ディグリーのシステムであるため、学生または学位を受ける予定者は両大学の両方の条件を満たさなければなりません。スーパーバイザーは双方の大学から選ばなければなりません。

高麗大学校と同様、私たちのところにも「学生グローバル教育リーダーシップ・プログラム」と呼ばれるものがあります。私たちには中・長期訪問プログラムがあり、短期訪問も行います。これは新しいプログラムで、約 50 人の学部学生がいくつかの提携大学や受け入れの大学に行きます。大学や学校で 1 週間の研究活動が行われ、それぞれのプログラムの個人プランにした

がって、もう1つの文化活動を行うことができます。アメリカ、イギリス、ドイツ、フランス、デンマークなどが現在訪問している国で、この訪問を大幅に拡大したいと思っています。

お話をさせていただいたように、教育学部には修士と博士の学位プログラムのあるグローバル教育協力（GEC）という学際的なプログラムがあります。そのプログラムの中には学位に関係のないプログラムもあり、韓国外の組織との国際連携もあります。これは主に開発途上国の教育の発展のためのもので、韓国の教育の経験が必要なアフリカなどの遠隔地を訪れています。

スライド 30 は教育学部で新たに議論されているビジョンです。私がこの準備委員会の委員長であるため、ソウル国立大学校教育学部のグローバル教育ビジョンは、その「グローバル学習」環境を基礎にグローバル教育の能力を構築するためのもので、ここで言う「グローバル」とは「オープンで均衡の取れた現地ニーズの評価を伴うグローバル・リーダーシップ」のことです。「学習」とは、「グローバル教育のための基礎能力、経験、適性、研究、ネットワーク作り」のことです。このために、さらにいくつかの具体的手段が取られています。特に学生のための、特に教職員のための、そして特に大学レベルのものなど、いくつかの分野があります。

今年、私たちはこのビジョンを正式なものにしようとしています。これと非常に大きなつながりがあるのが、グローバル教師大学（GTU）という名のプロジェクトです。これは韓国政府のプロジェクトで、現在のところ、まだ正式なものになっていません。政府はこの機能の本部としていくつかの大学を選定しようとしていて、ソウル国立大学校がその準備をしています。高麗大学校もこのための準備をなされているのか、私ははっきりとは知りません。

グローバル教師大学の目的は、学生たちを海外に派遣し、彼らが外国で資格を持った教師になることを奨励することにあります。たとえば部分的にソウル国立大学校で訓練し、アメリカやほかの国に送って教師になるための資格を取得させ、それによって教師の質が上がります。もう1つが交換および共同教授で、これはすでに現職教師のためのプログラムです。1つは教師志望者のためのプログラムで、もう1つが現職教師のためのプログラムです。そのために、英語での教育科学、英語での数学教育というような英語で教えるコースの開発が必要であり、そのためには多大な努力が求められます。また、このプログラムのための中央支援システムも必要です。

GTUプログラムの全体像は「グローバル教師プロジェクト」の略であるGTPともう1つはGTTC、つまり「グローバル教師訓練センター」からなっています。GTPは教師志望者のためのもので、GTTCが現職教師のためのもので、この2つはグローバル教師大学の中で補完的なもので、ともに海外プログラムなどと連携しています。申し訳ありませんが、時間が足りません。実は、これは政府のプログラムなので、私はこれ以上詳細を述べられる立場にはありません。

さて、冒頭でお話をさせていただいたように、韓国には国民と教育しかありません。これまで韓国はキャッチアップに成功してきました。ですが、教育には是が非でも必要な多様性と創造性が求められています。そのことを私たちは承知しています。ソウル国立大学校も量的飛躍ではなく、質的飛躍を必要としています。その具体的な目的のために、海外との国際協力事業が

特に重要で、EU の経験からも学ぶことができると思います。教育はグローバルであると同時にローカルであり、グローバル教育には韓国とその他の国も含めた現地ニーズに合い、グローバルで、オープンで、バランスの取れた評価が求められていると私たちは考えています。

大変ありがとうございました。

討議 2

韓国の2つの報告を受けて

清水： それでは、約 20 分間質問の時間があります。韓国のお 2 人の先生、韓先生、そして宋先生にご報告いただきましたが、この 2 つの報告につきまして、ご質問やご意見をいただければと思います。質問、ご意見のある方は手を挙げてください。

有本： 宋教授、プレゼンテーションをありがとうございました。1 つ質問があります。あなたのスライドの中で、ソウル国立大学校教育学部のグローバル教育ビジョンについて触れられていますが、その記述の中の「現地のニーズ」とあります。現地のニーズという言葉は何を意味しているのでしょうか？

宋： はい、教育がグローバルであるためには、原則として、それは世界のニーズを満たすべきだと思います。私たちがよく知っているように、この世界には多くのサブ世界があります。たとえば私たちには韓国として、韓国にはさまざまなニーズがあり——それはある程度まで日本と共通するところがありますが——、それらは世界の他の部分とはまったく違う可能性もあります。

私の所属するソウル国立大学校教育学部では、いわゆる先進国、その中でもほとんど西欧諸国だけに目を向けているばかりでなく、開発途上国、異なった文化的、社会的背景を持った別の国々にも目を向ける必要があります。そして、これらの国々と協力しています。それが基本的な意味です。

申し訳ありません、私の説明は多分あまり役に立たないでしょうが、私たちはこの考えをもっと具体的に展開しようとしています。是非、私たちにも助言を頂ければ幸いです。

清水： それでは他に？ 華東師範大学の徐海寧先生、どうぞ。

徐光興： 韓国の留学生に関する問題について質問させていただきます。

私の娘は、小中学校は日本の学校で学び、高校と大学では中国の大学に通いました。現在では日本の航空会社でキャビンアテンダントをしています。彼女は今、韓国に短期留学をしたいと計画をしており、私もそれが実現するようにサポートしています。

彼女の現在のハングル語は赤ちゃんレベルですが、選択したのは高麗大学校のようでした。ここである問題が分かったのですが、米国、カナダ、日本に行くのと比べて、韓国は留学生に対する条件に特別な制限があるようです。父である私に対して——私は華東師範大学で教授をしています——、私の給料だけでなく、報奨金やその他の収入明細も要求してくるのです。

私が思うにこれは個人のプライバシーの問題です。韓国では、どうして他の国々より要求が多いのでしょうか？

その後、私は学長を捜して学校に来てもらい、給料明細を発行してもらえました。しかし、その他の収入については例を挙げたにすぎません。韓国がこれほど多くの条件や要求を設定すれば…、韓国の留学生受入計画は 40 万以上、45 万以上ですね。韓国ははたしてこの数値目標を達成できるかどうか？

というのも、私が日本に留学した頃、当時の日本は何年か先に留学生 10 万人を目標としていました。当時の日本政府は、留学生に対する要求や制限があまりにも多ければ、留学生の拡大には不利だと提案していたからです。

現在の韓国が目標としている留学生数を達成しようとするならば、このように制限が多すぎると…。ご報告の資料では 2010 年に台湾は 43 万人で、中国は 50 万人にするとありますね。今のところ、私の家庭の事情に関わる書類、つまり必要とされる書類すべてを要求通りに提出することはできないので、娘には韓国には行くなと言っています。娘は日本に行くか、カナダに行くか、ということになります。

この面で今後学生を募集する場合、韓国では留学生に関するなんらかの優遇があるのか、準備の整った計画があるのでしょうか？さきほどお二方の教授のお話ではっきりとわかり非常に感謝していますが、今後の留学生募集の面で具体的に何かお話しただけないでしょうか？何か情報はありますでしょうか？

清水： 徐先生、ええと、どなたに対してのご質問でしょうか。韓先生に対する質問でしょうか、あるいは…？

徐光興： 両先生、どなたから答えてもらっても結構です。また、もし他に補足で話したいことがあれば、どうぞご自由にご発言ください。

清水： はい。韓先生、お願いします。

韓： ご質問を正しく理解できているかどうか分かりませんが、留学生数と関連して申し上げれば、この部分は人口と関係があるようです。すなわち、中国は人口が 13 億～14 億程度、日本が 1 億 2 千人余り、韓国は約 5 千万人です。韓国での 10 万人計画は、日本で 30 万人を計画しているようなものです。台湾が 43 万人計画というのは、台湾がこれまで、中国の留学生の受け入れを事実上していなかったものを、今年からは開放するものと理解しています。それにより、おそらく 10 年ほど後には、さらに多くの留学生を受け入れることができるものと予想されます。

基本的に地方大学の場合、留学生が多くなれば国際化指数は上がります。国際化指数が上がれば、大学の評価としてかなり良い点数を受けることができます。しかし、留学生がまともに

勉強をしない場合があります。登録だけしてビザを受ければ、他のところに行って仕事をするような場合です。したがって、どのようにすれば学生たちが勉強する環境の質を維持しながら留学生数を拡大させていくのか？こうした問題を考えなければなりません。

もう 1 つは、さっき申し上げた **Asia-Pacific Regional Convention on the Recognition of Qualifications in Higher Education** です。この部分は、各自が自国で取得した資格証をお互いに認めるシステムとして、留学生が他国で受けた資格証を自国に帰って受けることができる、環太平洋地域の国々が共通に認定するシステムとなるでしょう。このような側面から見れば、留学生たちは今後、2020 年までにかかなり増えるものと予想されます。これに関連して、奨学金も国家的なレベルで順次増やしていくべきです。

特にキャンパス・アジア・プログラムが来年から拡大されれば、それに対する奨学金がたくさん確保されるでしょう。留学生たちには今後、そのような機会がもう少し多くなるものと期待されます。

清水： はい、ありがとうございました。ソウル国立大学校の宋先生、何か補足はありますか。

宋： 少し補足説明をいたします。先ほど徐先生が「なぜこのように規制が多いのか？韓国に留学に行く中国の学生たちになぜそのように多くの書類を要求するのか？」という質問をされましたが、私は次のように考えます。

私自身は米国に留学した経験がありますが、その時、米国大使館でインタビューされました。インタビューの最も重要な内容は、この人がどれくらい熱心に勉強する姿勢があるのかではなく、どのくらい経済的サポートを期待できるのかということであり、それを最も重視していました。米国大使館では、勉強目的で米国に行くと言っても、お金がなければ、事実上、勉強することは難しいとの考えを持っているようでした。

したがって、東北大学の提案なされている学生交換プログラムの運営においても、私が思うに、ある学生がある国に行った時、どれくらい安定した基盤を持って勉強できるのか、そのための条件整備ができるのか、それがカギとなるでしょう。このような問題が、この席で議論されなければならない部分であると思います。

そうでなければ、学生が相手方の国の大学に行って、勉強より他のこと、たとえば、生活費を稼いだりする仕事などに時間を費やす可能性が非常に高く、そのような問題が解決されなければ、実際にこのような形の国際プログラムの場合、相当な問題が生じる可能性があります。ですから、その大学がサポートするか、もしくはその国がサポートするか、いずれの方法であっても、学費と生活費に対する配慮がなされなければならないと考えます。

今のところ、韓国政府や大部分の韓国の大学は外国の学生たちをサポートできる財政的基盤を持っていません。そのため、恐らく、基本的に十分に経済的支援の可能性に対して多くのレギュレーションが置かれているようです。今後、徐先生のおっしゃるとおり、多くの学生交換プログラムが活性化されるとするならば、そのような部分に対する支援が多く行われなければ

ならないと思います。

清水： ありがとうございます。とても重要な論点だったと思います。徐先生、何かありますか。

徐光興： 経済が非常に重要であることは承知しています。先ほど触れた私の娘ですけど、彼女はかつて日本にいたことがあり、みずほ銀行で勤めた後、日本の航空会社で働きました。収入も低くありません。自分で自分の留学費用を支払える十分な経済力を持っています。韓国に留学することを彼女は考えていますが、提出資料には親の収入などの情報も必要なのですね。たとえば、親の給料のほかに、ボーナスの金額などの情報も提供しないとイケないのです。それはちょっと厳しすぎませんか？

宋： 韓国の大学や韓国政府も、このような学生交換プログラムに対する経験が少なく、先行的な事例を探すことが簡単ではなかった、そこで真っ先に浮び上がったのが米国の事例だったのだと思います。米国の事例では、このような場合、経済状態に対する資料を米国大使館に提出します。私の場合、私の父の1年分の所得税の資料を提出したと思います。本人は経済的な自立が不可能なので、両親の経済状態をもって判断したのです。私にはそのような経験があります。

清水： ありがとうございます。今議論していただいた問題は、実際に学生を流動化させる時に、おそらく必ず出てくる大きな問題だと思います。今後も今回のようなシンポジウムやワークショップの機会を設けますので、その際に継続して議論していただければと思います。今の質疑応答は、一応ここで打ち切らせていただきまして、他にご質問はありますか？

本郷： 違う質問をします。2つの大学、高麗大学とソウル国立大学のお2人の先生にお尋ねしたいと思います。今お聞きして、2つの大学の国際化の取り組みは、プログラム面でも、インフラ面でも、東北大学よりも随分進んでいるとの印象を受けました。その上で2つの大学にそれぞれにお答えいただければと思うのです。2つの質問をしたいと思います。

1つは、高麗大学でもソウル国立大学でも国際化が進んでいると思いますが、現在さらに解決をしなければいけない問題として、どのような問題があると感じていらっしゃるのか。これが1つでございます。

もう1つは、国際化は1つの目的でもありますし、大学あるいは大学院教育の質の向上のための手段でもあると思いますが、その国際化によって大学あるいは大学院教育の質が向上したのかどうか、その向上したことがどのような手段で確認がされているか、あるいは確認をしようとしているのか。この2つについて教えていただければと思います。

清水： さてこれは…、韓先生、お答をお持ちでしょうか？ あるいは…はい、それでは高麗大学の韓先生からお願いします。

韓： まず、先にお答え申し上げます。

国際交流時に問題となるのは、結局、費用の問題でした。私たちの学生たちが外国に行く時、私が申し上げた中で「世界へ」(into the world)というプログラムがあります。このプログラムは、私たちの大学院生——大学院生とは日本で言うところの社会人大大学院生です——と学部生の3人以上がチームを作って外国に行き教育に関連した現場を見てきて、報告書を提出するプログラムです。この場合、往復飛行機のチケット代と出張費がすべて支援されます。このようなプログラムを運営する場合、結局は経費の問題をどれだけ解決できるかが問題です。

他の海外実習に行く場合でも、飛行機のチケット代は私たちが支援します。もちろん、生活費は本人が出さなければなりませんから、やはり費用の問題に突き当たります。

2番目に質問された教育の質に対する問題ですが、私どもが先ほど大学の授業の三分の一程度を英語で行うと申し上げましたが、この場合、英語で授業を行えば授業の質が落ちます。ひとまず、質が落ちます。

最初は教える人の語学能力と、2番目は習う人の語学能力が問題になるためです。話す人が自分の言いたいことを100%表現できず、50%しか伝えられないとしますね。そして習う学生たちが聞いた内容を100%理解できず、50%しか理解できないとします。すると、結局25%しか消化できませんね。ですから、どんな言語を使用するのか、それは高等教育を国際化するさいに難しい問題です。

基本的に東アジアの交流は漢字文化圏という背景がありますが、それでも自分が留学に行く国の言語を習うことが必須であると考えます。留学に行った国の言語を習得すれば、単に自分の専門だけ習うのではなく、その国の言語と文化と一緒に習得できます。そのために、単に英語で授業を行うよりは、東アジアでの国際化は、韓国語、日本語、中国語を習って勉強できる方法を模索しなければならないと考えます。

韓国の場合、高校で習う第二外国語のうち、日本語と中国語の比重が最も高いです。したがって、高校の時に第二外国語を習った学生たちが、中国や日本に留学することができる能力を備えていくことができるものと考えられます。したがって、英語以外の多様な言語の中から、共に学ぶことができる文化圏が形成されるものと考えます。

宋： 私も少し申し上げます。私は、最近まで東アジア科学教育学会の会長をしておりました。主な所属国は韓国、中国、日本、台湾で構成された学会です。この学会を始める時、公式言語は英語ですが、重要な文書は中国語や日本語でも明記することにしました。しかし、何年か過ぎると、この規則は守られなくなりました。

この経験を踏まえて申し上げますが、私の意見は少し違います。現実的に英語以外に、中国語や日本語や韓国語をすべて習いながら勉強することが本当に可能でしょうか？ 私ども専門

家の学会内においても、とても小さなことでも簡単にいかなかった話です。

質問のうち、解決が必要な問題点は何かと言えば、もちろん費用の問題が一番大きなことは同じです。ところが、費用の他にも問題は多いようです。そのうちの1つとして、私どもが経験した例を挙げれば、ソウル国立大学と英国や米国の学校の場合、両方の機関が学生交流を推進する意志とお金があったとしても、交換する学生数の数が釣り合わないこともあります。

たとえば、AからBに行こうとする学生は多いが、BからAに行こうとする学生はあまりいない場合です。その問題の解決は、費用の問題とも重なり、また他の言語の問題も絡んでいるのです。この問題が、私どもが経験したものとして最も難しい問題でした。そして、すっきりと解決することはできませんでした。

ですから、相互交流をどのくらい行うのか、その次に結局はどちらの方が魅力があり、どちらの方がそれを習いたいのか。一言で言うとニーズの差と言えます。そのニーズの差をどれくらい調和して均衡を取ることができるのか。これが、とても重要な問題であるようです。

質の向上の問題に関しては、まだ私たちにもよく分かりません。単純に研究論文をどれくらいタイムリーに出すか、あるいは研究者にどのくらい多くの外国人研究者の共同著者がいるか——これは計量的に測ることができると思います——。しかし、それが直ちに研究の質を担保するわけではありません。これは良い質問のようです。どのようにこれらの成果を評価し、またモニターし、またそれが新しい発展方向に進む可能性があるのか、その成否をどのようにして評価するのかという問題は、悩み続けなければならない問題のようです。

ありがとうございます。

清水： 宋先生、ありがとうございました。予定していた時間になりました。他にも質問があるかと思いますが、もし質問のある方は、この後、懇親会の時間等に意見を交わせて頂ければ幸いです。

ここで10分間休憩をとります。

国際的デュアル・ディグリー・プログラム開発の経験とチャレンジ

国立台湾師範大学 林家興

ご出席の皆様、こんにちは。私は台湾から参りました林家興と申します。台湾師範大学教育学部教育心理カウンセリング学科で教授兼学科主任をしております。東北大学からの要請に応え、パワーポイントは英文で作成しましたが、報告は中国語でさせていただきます。皆様、よろしくお願いたします。

朝から皆様のご報告を拝聴させていただき、多くのことを学ぶことができました。皆様のご報告の切り口は、いずれもどちらかと言えば学校のトップの立場からのものであり、どちらかと言えばマクロな角度からお話されていきました。私は、特に私たちの学科の視点角度から、皆様にご報告させていただき、どちらかといえば事例的なものとなります。台湾師範大学心理カウンセリング学科では、海外の大学と、国際的なデュアル・ディグリー・プログラムを推進しており、これについて皆様にお話させていただきます。

それでは、台湾師範大学の概要について、簡単に皆様にご報告させていただきます。本学は1946年に創立され、現在の学生数は16,000人です。学部の教師数は、約900人です。本学の学生数は、院生と学部学生がほぼ同じです。計10の学部があり、50の学科があります。以上、当校の状況について少しお話させていただきました。

本学には、国際部という事務局があり、国際化を推進しています。ここが事務の窓口になっているのですが、実務はやはり学科が行っています。台湾の政府は、国際化の推進にあたり、大学の外国人学生の割合を1割にまで増やすことを目標としています。しかしながら、現在、台湾師範大学には外国人学生が3%しかいないため、まだまだ多くの発展の余地があります。

次に具体的な活動について報告いたします。まずは、国際共同提携のプロジェクトから、1つ1つ簡単にご紹介します。台湾師範大学に限らず、国際間で、国際交流の方法がありますが、いくつか種類があります。

1つ目は留学です。我々教師の多くが、昔、留学しており、海外で博士、修士の学位を取得しています。この種の方法は、比較的従来型の留学方法です。

2つ目は学生の交換です。自分の本来の学校で学位を取得するのですが、1つの学期を利用して他の学校または別の国で1学期間勉強します。学生の交換も、現在では比較的多くなってきている提携方法です。

3つ目は、国外の学位クラスと呼ばれているものです。たとえば、大学が、別の国で学位クラスを設けます。私の知るところでは、台湾の国際暨南大学は、シンガポールに修士専門クラスがあるようです。このような方法です。

もう 1 つの方法は、遠隔教育です。オープン・コースウェアなどを用いた、オープンな授業です。台湾師範大学にもあり、図書館がさまざまな授業を録画して、誰でも見るできるようになっています。これが遠隔教育の方法です。

さらにもう 1 つの提携方法が、デュアル・ディグリー制度です。資料を見ると Double degree と書かれていますが、ダブル・ディグリーとも呼ばれています。

本日はご報告させていただき、内容の主なポイントは、台湾師範大学心理カウンセリング学科におけるデュアル・ディグリー制度推進の経験と課題です。最後の提携方法は、あまり多くはないのですが、比較的新しい提携方法です。東北大学のご提案なされた共同学位の開発という革新的な精神には、私も非常に敬服いたしております。もちろん、私たちも、このシンポジウムで、より具体的な進展が見られることを望んでいます。

それでは、デュアル・ディグリー制度において、学生が満たさなければならない 2 つの大学での履修条件について、さらにご説明いたします。通常は、4 年から 5 年の時間をかけなければ、学位取得の要求を満たすことはできません。この 4 年から 5 年というのは、いずれも学位習得が前提です。本日は、どちらかといえば、学位取得を目的としたプロジェクトについてお話をさせていただきます。他の方式の国際提携については、お話しません。学士号でも、修士号でも、博士号でも、学生が 2 つの大学の学位の要求を同時に満たせば、2 つの大学がそれぞれの卒業証書、それぞれの学位証書を授与します。この種の形式が、デュアル・ディグリー制度です。

デュアル・ディグリー制度は、基本的に、次の 4 種類に大きく分けることができます。1 つ目は副学士学位と呼ばれるものと学士学位で、先ず 1 つ目の学校で 1 年生と 2 年生の勉強をしてから、2 つ目の学校で 3 年生と 4 年生の勉強をします。こうすれば、副学士と学士のデュアル・ディグリーとなります。台湾師範大学には、これに該当するものがあります。2 つ目は、2 つの学士号を取得するデュアル・ディグリーであり、両校の学士課程を修了し、それぞれ学士の学位、2 つの学士の学位が授与されます。次に、学士学位と修士学位のデュアル・ディグリーです。当校の心理カウンセリング学科には、この学士、修士のデュアル・ディグリーがあり、すでに 6 年間も運営していますので、皆様に多くのことをお話しすることができます。4 つ目のデュアル・ディグリーは、大学院に属するものであり、2 つの、たとえば修士課程で学びます。たとえば教育学、教育修士と、たとえば文学修士の組み合わせであったり、または理学修士と MBA、経営学修士の組み合わせなどです。または、修士と博士といった、大学院の 2 つの学位の場合もあります。

それでは、台湾師範大学心理カウンセリング学科の例について、皆様にご紹介します。現在提携しているものには、3 つのデュアル・ディグリー制度があります。1 つ目は、米国のミズーリ大学のダブルマスターのデュアル・ディグリーです。2 つ目は、同じく米国のミズーリ大学のもの、学士と修士を組み合わせたデュアル・ディグリーです。3 つ目は、マレーシアのニュー・エラ・カレッジ(NEC)とのものです。マレーシアのニュー・エラ・カレッジは、2 年制しかないので、当校との提携は、同校の学生が台湾師範大学で 3 年生と 4 年生の勉強をすることになりま

す。このような提携は、副学士と学士学位のデュアル・ディグリーに属します。これはすでに何年も行われており、ダブル・マスター学位はほぼ 6 年、この副学士と学士の組み合わせもほぼ 5~6 年行われています。学士と修士のものは始まったばかりで、すでに学生が在学中です。

学術交流協定締結についてですが、デュアル・ディグリーでは通常、先ずこのデュアル・ディグリーの覚書を締結する必要があります。通常の締結方法としては、2 つの大学間で締結することも、2 つの学部で締結することも、2 つの学科で締結することもでき、このことは対象とする範囲にかかわってきます。全学レベルのものであれば、各学部が参加することができ、学部レベルのものであれば、各学科に適用することができます。学科レベルのものであれば、学科と相手方の大学の類似した学科の、2 つの学科の学生のみでの交換であり、2 つの学科の学生がこのプロジェクトに参加することができます。

この提携の実施面について、私の学科での経験についてお話しさせていただきます。現在、我々が締結しているものは、米国のミズーリ大学の学科と教育学部カウンセリング心理学科との、学科同士の覚書です。また、マレーシアのニュー・エラのガイダンス・カウンセリング心理学科とも覚書を締結しています。今のところ、米国との間では 5 年の覚書を締結しています。1 回の締結で 5 年間となり、5 年経ってさらに更新したい場合は、協定を延長します。一部は協定を延長しており、すでに比較的長年にわたる経験があります。

最初に紹介するのは、ダブル・マスターと呼ばれるデュアル・ディグリーです。1+1、つまり少なくとも 1 つの大学院で先に 1 年間勉強します。私どもの大学の例で言えば、台湾師範大学の学生が、少なくとも 1 年間米国のミズーリ大学に行って勉強する必要があります。1 年間勉強した後、台湾師範大学に戻って継続していくつかの授業を履修します。主なメリットとしては、台湾の学生が米国で勉強するときに、ミズーリ州に住む学生と同じ授業料で済むように交渉できたことがあります。州内生の学費は比較的安く、州外生の学費は非常に高くなります。それが、大きなインセンティブとなっています。また、学生には両大学に指導教授がおり、単位も互換することができます、認定することができます。

たとえば、台湾師範大学で勉強する際に、一部の単位を、米国のミズーリ大学では認定と呼んでいますが、認定した後、互換することができます。制限としては、たとえば、修了に必要な単位数の半分を超えてはならないという規定がありますが、半分は向こうで履修することができます。そのため、学生にとっても比較的採算に合うものとなっています。余分な単位を履修する必要がないからです。また、学習方法や異文化理解の訓練の機会も比較的多く提供されています。文化交流を行ったり、異文化コミュニケーションのイベントや練習を行ったりしています。現在、このプロジェクトでは、すでに 13 名の学生が修士課程修了しております。また現在、台湾師範大学で 1 年間勉強した後、米国のミズーリ大学の修士課程で学んでいる学生は 3 名います。

この部分については、もう少し説明が必要かもしれません。1+1 と申し上げているように、台湾師範大学で 1 年間勉強し、米国のミズーリ大学で 1 年間勉強するのですが、実際に米国で 1 年間勉強することについては問題がありません。論文を書く必要がなく、実習もないからで

す。しかし、台湾師範大学では論文を書く必要があり、1年間の実習も必要です。1年間の実習によって、修士課程が3年間に延長されます。3年または2~3年であるため、学生がこのダブル・マスター学位を取得するためには、約4年間かかります。台湾で心理カウンセリングを学ぶ多くの学生は、資格試験を受験する必要があり、資格試験を受けるには1年間の実習を受けるという条件がありますが、米国には資格試験受験の要求がありません。双方の要求が同じではないのです。しかし、提携は非常に好調で、多くの学生が参加を希望しています。

次に学士と修士のデュアル・ディグリーについてご紹介します。このプログラムは3+2です。このプログラムを履修するには、学生は通常、我々の推薦を必要とします。現在、米国のミズーリ大学での修士課程取得に興味をもっている場合、私どもの大学で3年間学び、必須科目を履修し終える必要があります。3年間学んだ後、優秀と思う学生を、ミズーリ大学で2年間学ぶよう推薦します。私どもの学科で3年間の訓練を受けた後、米国でさらに2年間の大学院での訓練を受けます。同様に、ミズーリ州の州内生の学費のみを納めれば良いように交渉しました。こうすることにより、比較的留学費用が安くすみますが、制限もあります。州外生の学費を免除できるのは、1年、1学期に最大10名という定員があります。これを超える場合には、州外生と同額の学費を納める必要があります。制限があるのです。先に紹介したプログラムと同様に指導教授が学生の指導にあたり、異文化の体験イベントもあります。学生は勉強だけでなく、勉強以外にたとえばクリスマスや感謝祭などの多くの行事にも参加し、地元の人から多くのことを学びます。今のところ、このプロジェクトは比較的新しいものです。現在、3名の学生がこのプロジェクトに参加しています。すでに台湾師範大学での勉強を3年間で終えた後、現在、米国のミズーリで修士課程の1年生の勉強をしています。ですから、まだ卒業していません。米国で2年間学んだ後、台湾に戻り、師範大学で学士学位が授与されます。米国のミズーリ大学からは、修士学位が授与されます。このようにして、合わせて3+2のデザインになっています。

これは、覚書締結の写真です。これは最近、今年、協定更新時に署名したときのものです。これはビデオ会議で協定を締結したときのものです。協定締結式です。我々は学科単位で覚書を締結していますが、私どもの大学の学部長も参加します。ここには、副学長も出席していました。本学では我々の学科を非常に重視しています。学科がデュアル・ディグリーの協定を締結するにあたっては、このような協定締結を奨励し、サポートしてくれます。

次に皆さんにご紹介するのは、マレーシアのニュー・エラ・カレッジとの2+2の副学士と学士のデュアル・ディグリーです。これは、中心的な発起人は、ニュー・エラ・カレッジの先生でした。マレーシアの華人は、カウンセリングを学ぶ機会が比較的少なく、それまでは、たとえば台湾に来て勉強する必要がありました。苦勞の末、2年制の短大を設立しましたが、機会があれば、台湾の大学とデュアル・ディグリー協定を締結することを希望していたため、私どもの大学と話し合い、我々も快く承諾しました。これによって、カウンセリング、心理ガイダンスの専門家を育成することが可能になりました。現在では、同校から、毎年最大6名の学生が、台湾師範大学に来て、3年次に編入学することができます。2年生まで勉強して、台湾師範大

学に来て、3年生と4年生の勉強をするのです。このようにして、ニュー・エラで2年間学び、台湾師範大学で2年間学び、両校の必須科目と選択科目を履修した後、ニュー・エラから副学士学位が授与され、師範大学は学士学位を授与します。これまでに、すでに7名がこのデュアル・ディグリーの課程を終えて働いており、もう1名は在籍中です。これが、今のところ、副学士と学士のデュアル・ディグリーに属するものです。

最近、デュアル・ディグリーに参加している学生にアンケート調査を行い、どのようなメリットがあるか、プラスになる点、マイナスになる点、どのような困難や課題があるかについて質問しました。学生の多くから前向きな回答が得られました。たとえば、語学を学ぶことができ、外国語の能力を強化することができるという回答があり、さらには、多元的な文化の経験をし、異なる文化を体験できるという回答もありました。これは素晴らしいことです。非常に好評を博しています。このほか、学生が国際的な視野を拓けることができるという回答もありました。実生活の面で異なる体験ができるというものもあります。比較的広い角度から物事を見ることができるようになるとの回答もありました。また、多くの新しい学習方法が身につけられるという回答もあります。たとえば、台湾では決まりきった方法で学んでいたかもしれませんが、米国には新しい学習方法があり、学生は多くのものが得られたと感じています。また、異なる文化において、自身の文化について省み、認識を新たにすることが比較的容易になるというものもあります。自身の文化の中にと特別には感じていなくても、異文化体験することによりその良さを再認識することができます。これはとても良いことです。

このアンケート調査では、具体的な提案も2つ来ています。1つ目は、実践的な体験または実習の授業を増やしてほしい、地元の人々の生活に馴染むことにより、さらに多くのことを学びたいというものです。より多くの体験の機会と実践的な授業が望まれています。2つ目は、これらのプログラムについてもっと広報してほしい、また——できる限り行ってはいるのですが——出発前の講習も行ってほしいというものです。一部の学生はこれらのプログラムについて全く知らず、一部の学生は知るのが遅すぎ、また早めに計画して準備したいという学生もいますので、毎年、説明会を行っています。米国のミズーリ大学の教授がちょうど台湾師範大学にいる場合には、自ら説明していただけるようお願いしています。本学の教授が提供先の大学の教授と一緒に説明することもあります。学生に質問がある場合には、説明することができます。提供先の大学の教授がこちらにいない場合には、先輩に宣伝をお願いし、デュアル・ディグリー制度への適応に役立つような説明や講習をしてもらうこともあります。

次に我々のプログラムの課題についてお話しします。次の何点かにまとめることができると思います。

1つ目は、皆様も経験があるかもしれませんが、一方向の学生交換です。たとえば、いずれもマレーシアの学生が台湾に来る、台湾の学生が米国に行くものであり、逆はなく、双方向のものはありません。そのため、これについては不満があります。たとえば、米国の学生は台湾に来ることがないのは残念なことです。同様に、台湾の学生がマレーシアに行くこともありません。この困難な問題はずっと続いています。しかし、東アジア地域の中でのデュアル・ディ

グリー制度では、相互交流の機会が比較的多くなるかもしれません。文化や漢字など、共通の背景があるため、発展の程度がほぼ同じになったときに、学生の双方向の交流が比較的可能になるのではないかと期待しています。

2つ目の課題は、奨学金の問題です。さきほど韓国から参加されている教授からも同様のお話がありました。現在、台湾には台湾奨学金があります。これは海外の学生が台湾に来て学び、学位を取得することができるようにするための奨学金です。学生が海外に出る場合にも補助があります。そのため、現在、デュアル・ディグリー制度に参加している学生は、多かれ少なかれ政府または大学の奨学金を受けており、海外に出てデュアル・ディグリーを取得することは奨励されています。この奨学金がなければ、このような制度を継続的に続けていくことができるかどうかはわかりません。経済力の問題に関わってくるからです。

3つ目の課題ですが、幸いなことに、本学と提携している米国のミズーリ大学との双方に、これらの制度の推進に非常に熱心な教授がいます。非常に熱心な教授が非常に積極的で、主体的であるため、何かあったときにお願いと手伝ってくれ、学生を連れて提携先の大学まで行ってくれます。また、提携先の大学教授が、米国の学生を連れて台湾師範大学にやってくることもあります。1回だけでなく、ときには1~2年ごとに学生を連れてやってきます。そのため、熱心な教授の存在が必要なのです。さきほど、すでに5、6年行っているとご報告しましたが、学科主任の任期は3年間であり、学科主任が変わっても、熱心な教授がまだいれば、推進を続けることができます。そのため、これも非常に大事なことです。教員に手伝ってもらうことが必要なのです。

東北大学の、本日のシンポジウムのテーマは、国際共同学位の開発に関するものです。私は、これは素晴らしい構想であると考えており、本学としてもサポートしていきたいと願っています。これを推進するにあたり、私の感覚としては、デュアル・ディグリー制度は、いわゆる共同学位よりも容易に行うことができ、少なくとも既存の規程を変える必要はないのではないかと思います。たとえば、専門のクラスを設ける必要がなく、元々の学生が元々の授業に出るだけです。デュアル・ディグリーに参加するには、申請を行います。1人の申請でも、5人の申請でも構いません。募集定員の制限は受けないからです。そのため、事務的にも比較的単純です。双方の大学で話し合っておき、どれだけ互換可能かどうかの単位の対照表も計算しておき、各自の時間表を見て、授業対照表を双方が承認すれば、実施可能です。そして、双方の大学の学位を授与するという、非常に単純なものです。

また、語学についても、実施期間が4~5年のこの種のデュアル・ディグリー・プログラムの場合、語学を学ぶ時間が比較的長くなります。現在、台湾では、英語がやはり主な第一外国語ですので、多くの学生はやはり主に英語を勉強しています。日本語や韓国語を勉強する学生は比較的少ないです。それでも、いることはいます。そのため、午前中の本郷教授の報告にもありましたように、過渡的段階の、たとえば、交換留学生から、デュアル・ディグリー、さらには共同学位まで、このように段階的に実践していくことができるかもしれません。一步一步行っていくわけです。東北大学の共同学位の構想について私どもの学科の教員に質問したことが

あるのですが、3+2 のデュアル・ディグリー的方式の方が、比較的实现可能なのではないかと考えます。これについては、皆で議論することができます。たとえば、台湾師範大学で3年間学んだ後、たとえば、東北大学で2年間学び、修士学位を取得します。このような3+2のプロセスにおいて、デュアル・ディグリーを取得することも、1つの可能性として考えられるのではないのでしょうか。これをまだ行うことができない場合には、先ず交換留学生から行います。たとえば、私どもの学生が先ずこちらに来るか、または交換留学し、1学期学び、先ずは慣れて理解した後、学位の提携をゆっくりと推進します。一步一步行っていくわけです。

最後に、結論としていくつかの点について述べさせていただきます。高等教育のグローバル化は、1つの趨勢となっており、各地域で非常に重視されています。台湾でも非常に重視されているため、この時代の流れに応え、台湾師範大学としても推進して参ります。国際提携の方法には多くの種類があり、これまで何人かの報告者の方々から報告がありましたが、交換教授、交換留学生のほか、学術提携もあります。これらは現在、すでに行われています。これらの基盤の上に立って計画を推進していくことは、非常に良いことです。デュアル・ディグリーまたは共同学位を発展させていくには、今は非常に良いタイミングです。各国政府、または地域では、このことを重視しているため、機会を得ることも比較的容易です。学生も、奨学金や補助があれば、参加を希望する人は多いです。募集しても学生が集まらない、または募集した後に学生が挫折するようなことがあっては、非常に残念です。

東北大学のシンポジウムは入念な準備が行われており、デュアル・ディグリーと共同学位の推進に、必ず役立つことと信じております。

私からは以上とさせていただきます。もし時間が許せば、一緒に議論していきましょう。ご清聴ありがとうございました。

若き才能を引き出すための新たなチャレンジ：国立政治大学の事例分析

国立政治大学 詹志禹

[国立政治大学の紹介ビデオ]

国立政治大学は台湾の台北にあります。キャンパスは約 104 ヘクタールで、指南山麓の景美溪沿いにあり、美しくて静かな学習環境となっています。国立政治大学はプロ意識とグローバルな視野を強調した人文科学を基礎とした優れた大学です。

国立政治大学は 1927 年に中国の南京で設立されました。1954 年に台北の木柵に移転しました。大学は文学、理学、社会科学、法学、商学、外国語文学、コミュニケーション、国際関係、教育の 9 つの学部から構成されています。これらの学部が 33 の学科と 48 の大学院に分かれています。国立政治大学は人文科学と社会科学の研究で知られ、台湾の学術界をリードしてきました。学生は、積極的な学習と自主的な思考を可能にする豊富な書籍と各種学習資料のコレクションから多くの知識を得て、日々成長しています。

政治大学は、博識とイノベーションを非常に強調しており、非常に文化的な雰囲気のある大学です。このような大学でなければ、真に優れた未来社会の人材を育成することはできないと当校では考えております。こうした人材こそが、未来の重要なリーダーとなることができるのです。

近年、本学は学際研究ならびに、人文科学、社会科学、技術の間の対話に熱心に取り組み始めています。

国立政治大学は学生にプロ意識とイノベーションを植え付けようと努めています。専門分野はどこも英語のプログラムを提供しています。たとえば、商学部は台湾で最高のビジネススクールとして国内外から高い評価を受けています。また、世界的に有名な大学で博士号を取得し、中国市場についての豊かな経験を持つ 130 人を超える一流の教授を擁しています。2008 年にはイギリスの『ファイナンシャル・タイムズ』誌によって、経営学修士課程の世界ランキングで 47 位に位置づけられました。

国際関係学部も高い評価を受けています。この学部の目標は外交、国防、台湾問題、国際問題、中国本土研究の分野で高度な人材を育成することです。そのために、国立政治大学は台湾問題や東アジア研究の分野で主導的な位置にあります。

コミュニケーション学部はジャーナリズムに関して台湾で最も歴史のある機関として評価が高く、コミュニケーションの教授に関して最もよく知られた学術機関でもあります。さらに、

その卒業生は大きな成功を収め、台湾のマスコミ界に大きな影響を与えています。

現代的な学習コースと広い範囲の施設を与えられて、国立政治大学の学生はグローバル化とニューメディアのトレンドの急速な進歩にうまく対応するために、理論的知識と実際の知識の両方を習得します。社会科学部には多くの専門領域があり、高度な専門性を持った教授陣がそろっています。教育と研究における豊富な経験のために、さまざまな長所を統合し、博士、修士号の両レベルで、台湾または中国いずれかの研究を含んだ、独自の国際的なアジア太平洋プログラムを提供することができます。

台湾は、新たに発展を始めた地域のすべてを網羅するアジアの枢要な位置にあります。国立政治大学もこの優位性を活用し、教室と毎日の生活の両方で、学生がアジア太平洋の最新の潮流と動向を把握するのに役立っています。これは学生が視野を広げ、将来のキャリアにおける競争力を高めるためです。

国立政治大学へようこそ。私たちは国際的な大学を目指して大いに努力していますが、それはつまり、とても優れた国際的教育プログラムを学生に提供しなければならないということです。そのために、私たちは双方向の交流を奨励しています。一方では本校の学生が外国で学ぶことを奨励し、もう一方では世界中から学生が国立政治大学にやって来るのを歓迎しています。

近年、国立政治大学は専門能力とグローバルな視野を持った学生を育成するために、国際化の増進と海外大学との協力の推進にとっても積極的に取り組んできました。この3年間で、国立政治大学の提携大学と海外からの学生数が急速に増加しました。

国立政治大の中国語センターは、教育部によって台湾で中国語を学ぶための最高の学習環境として選ばれてきました。国立政治大学は、すべてのレベルで高度に洗練された柔軟な学習コースを提供することで、中国語学習の推進に努めています。中国語センターはまた、学生に中国の歴史、文化、芸術についての貴重な知識を与えています。そればかりか、国立政治大学は海外からの学生に奨学金と宿舎を提供しています。国立政治大学は中国語を学ぶのに最高の場所です。

国立政治大学は優れた学習環境だけではなく、生活環境も広く提供します。誰もがデジタルライフの便利さを享受できるよう、ワイヤレスネットワークがキャンパス中に設置されています。クラブ活動も素晴らしく、学生の生活がますます豊かなものになり、学生が多様な関心と才能を伸ばすのにも役立っています。

ここ国立政治大学にはスポーツをする場所がたくさんあります。私が大好きなことの1つは、早起きして、水泳か山道のジョギングで一日を始めることです。最高です。

国立政治大学 の山の風景は本当にきれいですし、空気もとても新鮮です。涼しい晴れた日

に山の上にハイキングに行くのが好きです。頂上に着くと景色が本当に見事です。

私は絵を描くのが好きです。国立政治大学ではたくさんの展覧会やいろいろなタイプの公演があって、私の芸術的なニーズを満たしてくれます。

そればかりか海外からの学生のために、彼らが台湾の文化について経験を深め、現地の環境への適応が容易になるよう助けるために、キャンパス・ケアリング・グループや学生大使がさまざまな文化ワークショップや遠足を開催します。

80年にわたって、国立政治大学は台湾社会のためにおびただしい数の指導者を育成してきました。

政治大学新聞学科の訓練によって、比較的客観的な目で作品を見ることができ、人生のリズムを決定することができるようになりました。

政治大学の校風ではっきりと覚えているのは、人を管理するには、身を正し、誠意をもって接するという一文です。

大学のキャンパスは美しく、施設は最高で、教授陣は一流、そして多様な職業コースとプログラムが備わっています。

ですから、どうぞおいでください。お待ちしております。皆さんを歓迎します。

[講演]

皆様、こんにちは。今ご覧いただきましたビデオは、国立政治大学の全体的な紹介です。本日は2つのポイントについて、プレゼンテーションを行います。1つ目は、政治大学での教育について、2つ目は国際化の面についてです。

教育の面では、政治大学は現在、いわゆるコア・コンピテンスに力を注いでいます。専門的な能力、分野を超えた能力、独自で考える能力、イノベーション能力、さらには自己を省みる能力（リフレクション）、コミュニケーション能力、生涯学習能力、さらには世界的な視野、リーダーシップ、チームワーク力、文化および環境への思いやり、ならびにシチズンシップ的素養を含む12のコア・コンピテンスを重視しています。これは、政治大学の学部全学生に、最も養ってもらいたいと考えているコア・コンピテンスです。

基本的に、学部の授業は一般教養と専門教育の2つの部分に大きく分けられます。一般教養は、専門教育の基礎となります。一般教養で強調しているのは、いわゆる幅広い学びと知識の統合です。一般教養は、人文、社会科学、自然を含むいくつかの分野に分けられています。

さらに政治大学書院——「書院」は residential college と呼ばれ、宿泊設備付きの学寮のこと

で、大学1年生が生活することになります——には「書院」が目指している独自の教養があります。1年生は、学部を越えて、幅広く一般教養の単位を履修する必要があり、バランスのとれた発展が必要とされます。スライド5は「書院」の一部です。「書院」は中国の伝統的なイメージを取り入れており、政治大学の学生を、将来の知識人とすべく育成することを目標としています。

当校で用いている授業方針、学習方針は、生活圏を創造し、学生の寮生活を中心として、生活の中から学ぶことができることを目標としています。そのため、学生が概念的知識を習得するだけでなく、政治大学書院において生活の知識、さらには内在的知識（implicit knowledge）、また行動的知識（action knowledge）を習得することができることを目標としています。

また、政治大学の教員による授業の質をいかにして向上させるかについてですが、政治大学には、政治大学の教員による授業の質を向上させるための教育開発センター（教学発展中心）があります。最もよく行われている3つの方法として、授業面のワークショップ、授業で体得した知識を共有するためのニュースレターの提供のほか、授業用の多くのマニュアルを編集し、教員が参考にできるようにしています。スライド7は、教育と学習に関するブログとニュースレターです。スライド8は教師による使用状況です。2008年から現在に至るまで、ページ閲覧数は徐々に上昇しています。最近のページ閲覧数は、毎月約6,000から8,000の間です。

また、教育開発センターは、教育開発のワークショップも提供しています。このワークショップのモデルは、カナダのマギル大学のモデルを採用しており、基本的には、オンライン学習の授業に、対面式の教師グループの交流を組み合わせたものです。強調されているのは、教員が学生のニーズ、学生の学習時の長所と短所を理解し、学生に対する適切な学習評価を行うことができるよう教員を助け、適切な授業方針を発展させることです。最後に、これらのすべてを統合し、授業を実施します。

新人の教員は、経験豊富な教師による指導を受けることができます。授業の経験を伝授する一方で、共同研究チームを結成し、共同で協力し、研究することもできます。教育開発センターは、講演やフォーラムを行って、教員の仕事上のストレスを下げ、幸福感を向上させることも行っています。また、東アジアの学生は、暗記を重視しすぎる傾向がありますが、政治大学では、この問題に対処するために、主に比較的多様化した授業方法と方針を用いることを教員に奨励しており、多面的な評価方針も採用しています。これには、教員が学生の発展、自主学習を助けるという願いが込められており、事例研究の授業を用いることを教員に奨励しています。特に商学部で、教授をハーバード大学に派遣してケースメソッドを学ばせ、帰国後にケースメソッドを実施しています。

また、問題解決、問題本位の学習および教育を用いることを教師に奨励しています。同級生の間でのディベートによる授業も非常に強調しており、一部のクラス、特に一般教養のクラスでは、同級生とのディベートによる教育方法を用いる場合に、大学がTAを教員に提供し、TAが学生のリーダーとなって小グループのディベートを行うことができるようにしています。また、学生のコミュニケーション能力と問題解決能力の向上を助けるため、問題本位、問題志向

の学習を学生に奨励しています。社会行動を授業に取り込むことを教員に奨励しており、クラスに社会行動の要素をもたせ、学生が、社会行動を通じて学習することを目標としています。また、小グループでのディベートによる学習と、夏休みや冬休みを利用した合宿も奨励しており、非公式の学習を学生ができるようにしています。また、最近では、学生に反省させるための学習日誌を書かせることを一般教養で強化しています。これらの学習日誌は、ネットワークで同級生と共有することができます。

国際化の面では、現在、政治大学には212校の姉妹校、または提携校があります。スライド15は、過去約6年間の姉妹校としての協定校の伸びです。大学レベルのものと、学部レベルのもの数が含まれており、急速に伸びています。ここ数年で、約6、7年前の85校から現在の計400校以上にまで徐々に増えています。

スライド16は国際化の面です。当校の海外からの留学生の変化の状況、当校からの交換留学生、および英語の授業について簡単にご紹介します。海外からの留学生の面では、奨学金を提供しています。また、海外からの留学生には、政治大学で学位の取得を目指している学生も、交換留学生もおり、単にサマー・スクールに参加しているだけの学生もいます。

海外からの留学生に対する奨学金です。海外新入生の奨学金があり、また海外からの留学生の一般向けの奨学金もあります。これは教育部から支給されます。また、外国人向けの中国語学習の奨学金もあります。一部の交換留学生は、学費が免除されます。海外から政治大学に來ている留学生のうち、学位の取得を目指している学生は、現在、約508名前後です。これは2010年の統計の数字です。学位の取得を目指しているこれらの海外からの留学生のうち、韓国からの学生が最も多く、米国が2位、その次が日本で、第3位となっています。これは、ここ数年、約7年間に、政治大学に來て学位の取得を目指した海外からの留学生の伸びの傾向です。また、交換留学生の面では、政治大学に交換留学に來た学生は、2010年には346名で、大部分はヨーロッパ、北米からで、南米からの学生もいます。世界の各国から学生が來ています。

順位としては、交換留学生の上位10位の国は、これらの国です。政治大学に來る交換留学生が最も多い国はフランスで、その次は韓国、さらにドイツ、香港、米国、日本と続きます。日本は現在、6位となっています。これは、政治大学に來る交換留学生の、過去10年間の伸びの傾向です。非常に急速に伸びています。89人から、現在の346人まで伸びています。スライド25は政治大学が提供しているサマー・スクールです。外国人学生の中には、政治大学でこのようなコースを履修している学生もいます。スライド26の下の表は中国語の集中コースです。単位取得ができ、また、1対2(1人の教員と2人の学生)のような少人数の中国語授業も提供されています。このコースで話す内容は、主に世界という文脈における台湾の位置付けについてです。他にも、いくつかの中国語の授業があります。

政治大学の学生の海外留学については、国際提携処が非常に多くのサポートを提供しています。1つ目のサポートは、海外留学ウィークです。非常に多くの情報が提供され、どのような協定校があるか、奨学金はどのように申請すれば良いのか、どのような交換計画があるのか、海外短期留学の各種機会、および留学したことのある学生による経験の共有などについて、政

治大学の学生は知ることができます。

政治大学の学生が留学する場合の奨学金も種類が非常に多く、教育部が提供するもの、政治大学が独自に提供するもののほか、学生自身も奨学金を提供することができ、また基金などの非営利組織のものもあります。これは政治大学からの交換留学生で、2010年には348名おり、世界各国に分布しています。日本への留学が1位となっています。現在、政治大学からの交換留学は、日本、ロシア、韓国が上位3カ国となっています。政治大学からの交換留学生は、ここ10年間で急速に伸びており、ここ10年間で、25人から348人に急速に増加しています。夏のサマー・プログラムが政治大学の学生に提供されており、多くの国に留学することができます。ヨーロッパ、米国のジョージア、バーデューなど、多くの国でサマー・プログラムが提供されており、政治大学の学生が留学しています。

また、政治大学の教授自身もコースを開講し、海外で授業を行っています。政治大学の授業なのですが、学生を海外に連れて行き、短期の学習を行うものです。現時点で、すでに171人がこのようなコースに参加しています。

デュアル・ディグリーの提携を行っている大学をここスライド35にリストアップしています。米国の大学が比較的多く、政治大学はデュアル・ディグリーの協定をいくつか結んでいます。また少数ですが、オーストラリアやパリなどの学校もあります。政治大学で提供している英語授業としては、教員の約半分が語学の訓練を提供しており、学部の授業では21%前後、大学院の授業で30%前後です。

以上、政治大学の状況についてお話しさせていただきました。皆様、ご参考いただければと思います。ご清聴ありがとうございました。

討議 3

台湾の2つの報告を受けて

清水： さて、それでは残された時間はあと 25 分ほどでございます。4 時まで質疑応答を行います。ご質問ご意見のある方はどうぞ手を挙げて下さい。いかがでしょうか？ はい、華東師範大学の梁寧建教授、お願いします。

梁寧建： 1 つ質問がございます。主に台湾師範大学の林家興・学科主任にお伺いしたいのですが、先ほどご紹介くださいました内容に非常に興味を持ちました。私は、国際化は高等教育全体の中で非常に重要な発展の方向であると思っています。林先生の国立台湾師範大学は、比較的国際化が進んでいるように思います。

質問は 2 つあるのですが、1 つ目は、選択される学校は共同運営という形になるのか、それとも各自の学位カリキュラムを修了した学生にそれぞれが学位を与える形なのか、これがまず 1 つ目の質問です。

2 つ目の質問は、こういったカリキュラムは双方が協議の上で決定するのか、あるいは各自で決定し、学生がこれらのカリキュラムを履修後、一定の評価システムを通じて、修士または学士に求められるレベルにすでに達していることを認定されるのかという点です。以上の 2 点に特に関心があります。

林： 梁教授、ご質問ありがとうございます。では 1 つずつお答えします。

台湾師範大学心理カウンセリング学科について言えば、基本的に各自でカリキュラムを設置し、学位を授与しています。たとえば、我々台湾師範大学心理カウンセリング学科の修士課程で要求するレベルがあるとすると、当校の修士課程の学生はその要求レベルを満たさなければなりません。米国の修士課程の要求を満たすように求められ、それを同時に満たして初めてこちらの学位も取ることができるのです。このように基本的には各自で行っていますが、カリキュラムの一部に認定制を取り入れています。

認定制とは、こちらで開講する授業にいわゆる英語版と中国語版を作り、英語版を提携するミズーリ大学に送って、その内容で単位がどのくらい認められるかを判断してもらいます。その分を米国で履修すべきカリキュラムから差し引くことで、米国での履修科目が少なくて済むようになります。

ただしそれには制限もあり、すべてを認定制にすることはできません。いくつかの科目だけですが、先方に認定されれば、それが卒業に必要な単位に算入され、その分履修が少なくて済みます。当校も先方のいくつかの科目を認定する場合があります、その分台湾師範大学での履修が少なくて済むこととなります。こういった方式で提携しているため、基本的に当校の必修カリ

キュラムおよび学校の運営方式に変化はなく、それぞれ独自で行っています。

2 つ目の質問も実はよく似ています。つまり、基本的には学部の規程や大学の規定が共同カリキュラムによって変わることはありません。たとえば当校で論文執筆が必須であれば、当然論文執筆が要求されます。台湾の修士課程では必ず論文を書くことになっているからです。米国の修士課程では論文を書きませんので、そこはそれぞれの規定に従います。それから、カリキュラムの認定には学校の同意が必要です。たとえば、提携先のカリキュラムを認定する場合、そのカリキュラム表に署名して学校に提出し、教務課の許可が下りれば、それらの科目を受け入れることが可能となり、最終単位を計算する際にそれらを算入することができる。つまり台湾師範大ではその授業が免除されるのです。基本的には、これは双方で協議してカリキュラムを決定することと同じこととなります。この部分は協議が必要ですが、そのほかは以前と同様に各自で運営しています。

梁寧建： わかりました。ありがとうございます。

徐海寧： 私は南京師範大学の者です。続いて小さな質問をさせていただきたいのですが、これは我々の今後の共同学位の開発に大いに関わりのあることだと思います。貴校とマレーシアのニュー・エラ・カレッジが行っておられる「2+2」のプロジェクトについてですが、ニュー・エラ・カレッジの学生はどの時点で貴校の学生として登録されるのでしょうか。よろしく願いいたします。

林： 徐教授、ありがとうございます。原則として、あちらで大学2年を終えると夏休みに入りますが、当校への申請は大学2年生を終える前に、台湾師範大学心理カウンセリング学科の3年生への編入申し込みをしていただきます。通常の外国人学生の入学申請と同じ方式です。

我々は何名かの受け入れを決定し、その学生に対し入学同意書を発行します。その後、大学3年生になる9月に、台湾師範大学に来て登録を行ってもらい、台湾師範大学の正規の学生となります。ただし、これらの学生は枠外定員と呼ばれるもので、従来の大学生の定員枠の一部を占めるものではありません。通常定員の枠外です。そのため、契約で1年に最大で6名までの受け入れとしています。

ニュー・エラの学生は当校の3年生と同じクラスで授業を受けます。彼らのために別のクラスを開講することはなく、3年生と同じクラスに入り、その後4年生に上がっても授業は一緒です。基本的には当校の3、4年生と同じ扱いで、彼らのために特別な授業を行うことはありません。何か規定外のことをすることもなく、すべて台湾の学生と同じカリキュラムとなります。

ただここで少し重要なのが、我々はあちらの大学の3、4年次のいくつかの授業を認定するのですが、認定が認められず、当校の1、2年次の授業を再履修してもらわなければならない場合があります。認定によって再履修の必要がなければ比較的簡単です。そのため、少し細か

い話になりますが、たとえば 2、3 単位足りない場合や、ある科目名が少々異なるということがあった場合、まず先によく話し合い、今後そちらの学校で設置する科目名を当校で認定している名称と同じにしたり、1、2 年次で必要な単位を取れるようにしたりして、3、4 年生を当校の 3、4 年生として受け入れられるようにします。卒業時に我々師範大の必要とする単位を満たしていれば学位を授与します。当校はこういった状況です。

清水： 他にいかがでしょう？ はい、宋先生。

宋： 2つの質問があります。1つは林先生に、また1つは詹先生に質問します。

先に林先生に質問します。教育を専門的に扱う機関の立場から見た時、特に教育の問題は、教師の資格、そして教員の任用、そして公務員としての資格など、教育問題は、国家やあらゆる文化圏に非常に依存的です。他の例を挙げると、MBA や工学認証制などがかなり異なるという問題があります。そして、その問題を推し進める時、さらに困難な点があったものと思われるのですが、その部分をどのように克服されたのか、一番気になります。

次に、政治大学の詹先生に質問します。国際化のために多くの努力を払われておられると思いますが、私どもがこれらについて話す時、学生たちの交流や学生たちのディグリーに対する話をたくさんします。これは教授の部分もありますが、実際の運営においてはスタッフ、つまり、その学校の職員の能力の向上が最も重要であると思います。それで、その部分に対する努力と難題をどのように克服されたのか気になります。学校の職員に対する部分です。

林： 先に私から宋先生のご質問にお答えします。先ほどお話ししましたダブル・ディグリーのプロジェクトは、基本的には教師となるためのトレーニングとは関係ありません。ダブル・ディグリーの学生は小中学校の教師を目指しているわけではないので、通常は教職の単位を履修することはありません。履修科目が非常に多いので、教職科目を取る時間はおそらくないでしょう。彼らは基本的には海外でより高度な勉強を続けるか、あるいは台湾でいわゆるカウンセリング・サイコロジストといった専門資格を取ることを目指します。一般の学校の教員養成ではないので、話は比較的単純です。学校の教師になりたい場合は、通常はダブル・ディグリーのコースに入ることはないです。

詹： 職員の能力についてですが、政治大学では職員に英語の研修を受けるよう奨励しています。英語の研修を受けると、公務員の実務的な認証を取得することができます。

また、大学院生に翻訳などの業務を手伝ってもらうこともあります。政治大学には国際協力課という国際業務を専門に取り扱う事務部門があり、そちらで働くスタッフは、ほぼすべて英語に精通しています。

清水： ありがとうございます。他にいかがでしょうか？ 特にご質問がなければ、まだち

よっと早いですがけれども、あとの予定もございますので終りにしたいと思うのですが、いかがでしょうか？…あと質問を1つ、2つ受けることもできますが…それでは、宮腰先生。

宮腰： 国立政治大学でダブル・ディグリー取得は171名と先ほどご説明いただきましたが、そのダブル・ディグリーを取る人たちの目的、メリットをどう捉えているのか。そして、そういう人達は主にどのような職業を目指しているのか、あるいは実際にどのような職業に就いているのか。国内の様々な大学の教師、あるいは公務員もあるかもしれませんが、そうであれば、そのダブル・ディグリーを取る目的は半減しますね。あるいは国際的ないろいろな企業で働くことを狙いとして取ろうとしているのか。その辺りを教えていただきたいと思います。

詹： ご質問ありがとうございます。

ダブル・ディグリー取得を希望する学生の主な動機は、将来的に世界で活躍する能力を身につけることです。彼らは将来海外で仕事をしたいと望んでいます。こちらの統計データは教育学部だけでなく、政治大学全体を統計母体としたものですので、この中でダブル・ディグリー取得を目指す学生は商学部やメディア学部などに多くいます。彼らは将来、国際的な企業で働く可能性があります。彼らがダブル・ディグリー取得を目指すのは、それがあれば2つの国のどちらでも仕事ができるからであり、それが動機となっているのです。

目指す職業として可能性が高いのは貿易や企業関係であり、教職ではありません。教育学部では今現在ダブル・ディグリーを目指している学生はいません。現在教育学部に多いのは交換留学生です。つまり、教師になりたいという場合で、ダブル・ディグリーを取得したいという学生は今のところおらず、大部分が交換留学生です。交換留学生の動機は一般的に、国際的な視野やさまざまな文化体験の獲得、それに語学の習得です。ありがとうございました。

清水： はい、宮腰先生よろしいでしょうか？ それでは、まだ若干の時間が残っていますが、だいたいご質問も出尽くしたようですので、本日のシンポジウムを終了させていただきます。

どうも先生方、またフロアの方々、本日はお忙しい中、このシンポジウムにご参加いただきまして、本当にありがとうございました。

第三部

講演 8

EUにおける共同学位の取り組みについて

総合討論

ロンドン大学の報告を受けて

全体討議

EUにおける共同学位の取り組みについて

ロンドン大学 Edward Vickers

皆さんはエラスムス・ムンドゥス・プログラムについて、多少なりとも、すでにお聞き及びのことと思います。東北大学や東アジアのその他の大学が、この地域でのこの種のプログラムの開設に関心を持つ場合、プログラムのモデルとして話題に上ることが多いからです。しかしながら、当然、エラスムス・ムンドゥス・プログラムと皆さんが開設されようとしているようなプログラムとの間には重要な違いがあります。

こうした違いは、主にヨーロッパには欧州連合（以下、EU）の存在に由来します。エラスムス・ムンドゥスに資金を提供しているのはEUであり、そのEUはエラスムス・ムンドゥス・プログラムに関していくつかの独自の目的を持っています。その目的とは「ヨーロッパの高等教育」です。イギリスの高等教育でも、ドイツの高等教育でも、イタリアの高等教育でもありません。それは、ヨーロッパの高等教育の振興に関連したものです。その点において、EUの関心は、ヨーロッパの、いずれか特定の国の関心ともびつたりと一致することはありません。

スライド2をご覧ください。EUの基本的な目的は、特にアメリカの高等教育と競って、ヨーロッパの高等教育を振興することです。たとえば、EUはヨーロッパに海外の学生の最大の供給源であるインドや中国の学生を引き付けたいと考えています。こうした学生の大部分が現在留学しているアメリカにではなく、ヨーロッパに引き付けたいと思っています。

同時に、ヨーロッパ域内の高等教育機関を、その多くが今ある状態からさらに国際的にしたいとも考えています。この目的は実際には、イギリスよりはヨーロッパ大陸の高等教育機関にあてはまります。この点に関してイギリスは、その高等教育システムがすでに大いに国際化されていて、海外の学生を多く引き付けているという点で多少違いがあるからです。ですがドイツ、フランス、その他のヨーロッパ諸国などでは、非常に歴史があり、非常に名声のある大学はあっても、そうした大学は海外の学生を大勢引き付けてはいません。同時に、EUのとても重要な目的の1つは、ヨーロッパのいくつもの高等教育システムの調和を図ることで、つまり、EUはヨーロッパ域内の高等教育分野での協力を推進したいと考えていますが、それはEUがエラスムス・ムンドゥス・プログラムによって推進しようと考えていることとは別の話です。

次はスライド3です。このプログラムに参加したいと考える大学にEUが求めるのは、少なくとも3つの国の3つの大学でコンソーシアム、つまりグループを作ることです。昨年からのコンソーシアムに非ヨーロッパの大学を含めることもできるようになりましたが、基本的にはコンソーシアムはヨーロッパの大学で作られます。次にこうしたコンソーシアムが、ブリュッセルの欧州委員会に奨学金の資金提供の応募または申請をします。これらのプログラムの対象となる学生に渡る奨学金の資金提供が、欧州委員会が用いるインセンティブなのです。最初は、こうした奨学金はすべて非ヨーロッパの学生に渡されました。

このように、エラスムス・ムンドゥス・プログラムの性格は、私たちが今ここで議論している東北大学提案のプログラムの性格とは大きく異なっています。そうした性格の違いが生じるのは、EU がヨーロッパの外からヨーロッパへ留学生を引き付けようとしているのに対し、私たちが考案しているプログラムは、基本的には、どのようにして学生がヨーロッパやアメリカへ行くのを止めさせ、東アジアに留まらせるか、この点に主たる関心があるように思われるからです。

資金提供、それもかなりの額の資金提供が客員教授にも与えられますが、この場合も基本的にはヨーロッパの外からヨーロッパに招聘するためです。プログラムの目的が、イギリスでもフランスでもドイツでもなく、ヨーロッパの高等教育を振興することであるために、学生にはヨーロッパでの経験を積むことが期待され、そのため、学生はヨーロッパの複数の国で、つまり2年間のプログラム期間に少なくとも2カ国で、一定の期間以上を過ごし、一定の単位数以上の単位を取得しなければなりません。昨年、欧州委員会は博士課程のプログラムにも奨学金の資金提供を始めました。

さて、スライド4です。これが私の運営に関わっていたエラスムス・ムンドゥス・プログラムです。私たちがパートナー機関を最低限の数に、わずか3機関にすることを選んだことがお分かりいただけるでしょう。エラスムス・ムンドゥス・プログラムの中には6つから8つの機関といったパートナー機関があるプログラムもありますが、私たちはプログラムを極力単純にしておきたいと思い、3という数字にこだわりました。

これらの機関について短時間でもう少しお話ししましょう。私たちは2005年に最初にこのプログラムの資金提供を申請し、そのときには5年間の資金提供を獲得しました。次に昨年、EUからの資金提供の延長を申請し、このときも5年間の資金提供を獲得しました。ですが、EUのこれらのプログラムへの資金提供のやり方の意味するところは、EUが資金提供する奨学生の数が時間とともに減っていくということです。いずれ別の資金源を見つけることが、エラスムス・ムンドゥス・プログラムに期待されているのです。今年から私たちのコンソーシアムにも非ヨーロッパの機関として、メルボルン大学大学院教育学部が加わりました。お気付きのように、私たちはまず2005年に資金提供の申請をしました。そして2005年末に申請が認められたという連絡をもらいました。私たちは翌年の9月にプログラムの運営をスタートさせなければならず、ということは、2006年の秋に最初の学生が到着して、この修士課程プログラムがスタートするということでした。ということで、実際にプログラムを立ち上げるための時間は非常に短いものでした。

スライド5にあるMALLL（生涯教育学修士）のようなコースは基本的には比較教育のコースで、そこに生涯教育の味つけがされています。つまり、コースは主に比較教育のモジュールからなっていますが、職業教育、職場やインフォーマルな場面での学習、成人教育などを研究するコースも提供されるということです。ですが基本的には非常に幅広い比較教育のプログラムです。私たちが「生涯教育」という名前を使った理由の1つはEUにアピールしたいと思ったからで、EUはこの「生涯教育」というコンセプトに対して非常に熱心です。ということで、

この言葉を使うというのはいわば戦略的判断でした。プログラムに関する言語はすべての機関で英語とするよう指示されていますが、学生がスペインに行けばスペイン語でのコースを取るよう勧められます。ですが、こうしたコースを取っても単位は与えられず、その費用は自費となります。そうはいつでも奨励されています。

これは2年間のフルタイムのプログラムで（スライド6）、そこが私たちロンドン大学教育研究院（以下 IOE）で運営しているすべてが1年間のプログラムであるところと違うところです。どのモジュールを取るかについて、学生には実際のところほとんど選択の自由はありません。モジュールが与えられ、学生はそれを学ばなければなりません。私たちはここでもプログラムを単純なものにしていくためにこういう判断をしましたが、それはこのような性格の国際的なプログラムの運営にはとても多くの厄介な問題が絡んでくるからです。可能な場面では、プログラムの仕組みをできる限り単純にしようとしたのです。ということで、パートナーがわずか3機関、すべてのモジュールが必修というわけです。

プログラムの運営方法ですが、学生全員がデンマークかロンドンでスタートします。半分の学生がロンドンで、半分の学生がデンマークでスタートするのです。学生はそこで1年目を過ごします。そして第3学期、つまり2年目の初めに全員がスペインに行き、1学期間は全員が一緒にスペインにいて、最終学期には、学位論文に向けた研究のために、3つのパートナー機関のどこにでも行くことができます。

評価はこんなふうに行われます。修士課程については合計で120単位が与えられ、単位のシステムはヨーロッパの単位システムを使っています。受講した各モジュールについて15単位が与えられ、モジュールは6つあって、それぞれ5,000語の小論文によって評価されますから、学生は5,000語の小論文を6つ書かなければなりません。それから、最終学期の学位論文が30単位に相当し、それは20,000語の学位論文に基づいて与えられます。

プログラムの最後には、学生はダブル学位を与えられ、3機関すべてで学んだ場合には、トリプル学位を与えられます。それも可能なのです。共同学位については、もともとは国の規制のためにその授与について考えることさえできませんでしたが、最近、デンマークとスペインで法改正があり、そのために今は理論的には共同学位を与えることができますし、近い将来にはそれが実現するかもしれません。

スライド7は学生が受講するモジュールです。すでにお話したように、1つが比較教育における一般的なもの、そして生涯教育の理論と展望を研究するもので、それが「生涯教育とは何を意味するのか」です。それから比較教育のモジュールで特にヨーロッパに焦点が当てられたもの、職場での学習に関する問題を研究するモジュールと、インフォーマルな場面で行われる学習を評価・認定する方法を扱うスペインで学ぶ2つのモジュールです。来年からは、一部の学生はメルボルンに行き、これらのモジュールの代わりに1つのモジュールを受講することができるようになります。ですが、メルボルンに行くことができるのはヨーロッパの学生だけで、それは、欧州委員会がこれらのプログラムにバランスの要素を導入するために、短期間ヨーロッパの外に行くヨーロッパの学生の費用を負担しようとしたため、以前はヨーロッ

パに来る非ヨーロッパの学生だけがプログラムの対象になっていました。ヨーロッパの学生も短期間ヨーロッパの外に出ることを伴う要素を導入したいと考えたのです。

プログラムはこのように運営されます（スライド8）。関係機関のうちの1つが調整機関に指名され、私たちのプログラムではデンマークのオールフス大学が調整機関になっています。デンマークの大学を調整役にしたのは、基本的には、より多くの経費があり、調整を行うためのより多くの時間を持つ管理者がより多くいて、それを行う意欲があったためです。

デンマークの大学は調整機関ではありますが、重要な意思決定は3つの主要パートナー機関すべてが加わって行わなければならない、決定は運営委員会によって行われます。運営委員会は各機関のコースリーダーともう1人ずつの大学教師からなっています。ということで、メンバーは6人、メルボルン大学が加わったので7人ですが、基本的には6人の運営委員会メンバーが重要な決定を行います。

運営委員会の仕事にはさまざまな任務がありますが、重要なものの1つが奨学金を申請する学生からの申請を評価することです。この評価は毎年コペンハーゲンでの、約2日間続く委員が顔をそろえての会議で行われます。当初は、デンマーク、スペインまたはロンドンでこのような会議を毎年3、4回開いていましたが、最近、実際に委員が集まる会議の回数を減らして、会議の回数を増やすためにビデオ会議を使い、スカイプを使おうとしてきました。その方が安上がりだからです。運営委員会ではプログラムの運営に関わるすべての手続きが議論され、問題や危機が起こればそれも扱われますが、さまざまな問題が生じました。

ということで運営委員会は、プログラム運営の最初の2、3年は確かに非常に多忙でした。日常的にも、プログラム運営のための責任の大部分をコースリーダーが負うことになります。コースリーダーは各機関に1人います。私はロンドンのコースリーダーでしたが、他の機関のコースリーダーに電子メールを書いたり、返信したりするために多くの時間を費やさなければなりません。

エラスムス・ムンドゥス・プログラムに関するEUの目的については、すでにお話しました。EUの目的は、このプログラムに関わる個々の機関の目的と必ずしも一致しません（スライド9）。実はこのプログラムの運営に関して最も強い動機を持つ機関はオールフス大学で、この大学が調整役を引き受けることに合意し、実際にEUに対する当初の応募をとりまとめた、とても優れた管理者がいたのもそのためです。オールフス大学教育学部——かつてはコペンハーゲンのデンマーク教育大学——は、教育分野の研究と教育に特化したスカンジナビア最大の機関です。スカンジナビアではとても大きいのですが、スカンジナビア以外の人たちの大部分はこの大学について聞いたことがありません。そこでこのプログラム運営に関しての大学の動機は、スカンジナビアの外でもっと知名度を上げることでした。それが第一の動機で、それを行うための1つの方法が海外の学生を入学させることでした。オールフス大学にはこのプログラムを始める前、スカンジナビアの外からの学生が誰もいないか、もしくはごく僅かしかいなかったのです。客員教授についても、同じ理由で招聘したいと考えていました。

スペインのデウスト大学の目的もその多くはデンマークの機関とよく似たものでした。この

大学の場合も同じで、デウスト大学は基本的にはスペインとラテンアメリカの、ですが世界のその他の一部地域も含んだ、カソリック系の大学のネットワークに属していました。ですがそれらの地域の外では、大学の国際的なつながりは限られたものでした。そこでやはり、国際的にもっと注目されるようになりたいと考えました。ヨーロッパの域内で、そしてブリュッセルの欧州委員会に対しても名を上げたいとも考えました。そこでやはり、この大学にもかなり強い動機がありました。大学が私的機関だったために財政的な動機もかなり大きく関係しました。

ロンドンの IOE では状況は違いました。IOE はこのプログラムをそれほど権威のあるものとは見ていませんでした。権威のあるプログラムだと言うことはあるかもしれませんが、実際にそう思っていたわけではなく、それは教育機関であるロンドン大学は、基本的に名声ならずで十分にありとわけていたからです。ロンドン大学の動機は海外の学生を確実に入学させることでしたが、海外の学生もすでに大勢いました。ですが、EU からの奨学金があれば、非常に裕福で授業料を払う余裕のある、海外から来たというだけの学生ではなく、本当に優秀な海外からの学生を大学に入学させる可能性が出てきます。奨学金を用いて、オールフス大学教育学部やメルボルン大学といった重要な海外のパートナーとのつながりを強化することもできました。

このプログラムの成果は何だったのでしょうか（スライド 10）。実は、このプログラムの成果を EU の視点から述べることは私にはできません。EU の目的はかなり長期的なものだからです。ですが私が関係する範囲、もろもろの機関が関係する範囲で言えば、IOE では普通であれば学生を受け入れることのなかった国から、非常に素晴らしい学生を何人か受け入れることができました。アルメニア、ケニア、ブータン、イランなどの国です。IOE にはこれまでこうした国からの学生はごくわずかしかなかったのですが、このプログラムのおかげでこうした国の学生の入学が可能になり、中にはとても優秀な学生がいました。全員というわけではありませんが、ほとんどがそうでした。こうした学生自身も極めて強いネットワークを作りました。

イギリスの修士課程は1年間しかなく、そのために非常に集中的な教育が行われ、実のところ学生にはこのような2年間のプログラムの場合のように相互のネットワーク作りをする時間や余暇がありませんでした。エラスムス・ムンドゥス・プログラムの学生がいろいろな機関と一緒に旅行し、そのことも学生同士の極めて強い絆を作るのに役立ちました。プログラム修了後も多くの学生がとても素晴らしい取り組みを続けてきました。かなり多くの学生がヨーロッパと、アメリカ、オーストラリア、香港といったヨーロッパの外の両方で博士課程に進んでいます。政府、大学に職を得た者もあり、民間部門に就職した学生も少なくありません。このプログラムによって結局のところ、プログラムを運営する機関のあいだのつながりも強化されたと思いますし、もちろんそれがこうした類のプログラムについての EU の目的の1つです。非常に素晴らしい海外からの客員教授も招聘しました。

良いことづくめですが、このプログラムの運営は簡単だったわけではありません（スライド 11）。そんなことはまったくありませんでした。運営はいくつもの理由から難しく、そうした理由の一部は機関によって目的が異なることから生じました。そうした理由のうちのいくつかは

についてはすでに述べましたが、機関によって、特に海外からの学生の扱いに関する経験の相違も理由の1つでした。IOEのような機関では、海外からの学生をいやというほど大勢扱ってきて、海外からの学生の扱いについてははっきりとした手順がとてもしっかりと確立していました。IOEの国際的な交流関係全体から見れば、このプログラムは非常に小さなプログラムでしかありません。そのために、IOEはこのプログラムの対象となる学生に、海外からの学生についてのIOEの既存の規定に従うことを期待します。しかし、オールフス大学教育学部には以前は海外からの学生は在籍したことがなく、海外の学生にぜひとも来てほしいと思っていました。そこで大学では初めから、海外からの学生を受け入れるために基本的に必要なことはどんなことでもする覚悟でいました。ですがもちろん、学生たちはデンマークだけに行くわけではありません。プログラムの性格上学生が機関の間を移動するため、デンマークでスタートした学生が最終的にロンドンに落ち着く可能性があります。最終的にロンドンに落ち着く場合には、彼らはIOEの入学要件を満たさなければなりません。

さて、私たちはこのことをプログラムの開始の際に議論し、入学要件をどうするかについて合意しましたが、プログラムの開始から2、3年たって、私はこのデンマークのパートナーが入学要件の一部を無視していることを発見しました。学生はそれぞれの機関に別々に登録しなければならず、私たちが資料を検討すると彼らが私たちの語学の要件を満たしていないことが明らかになりました。そのために私は、修士論文執筆のためにロンドンに移りたいという申請書類を提出した学生を困らせることになりました。

さて、IOEが経験したことは、そして大勢の海外からの学生を抱える機関はどこもそうだと思いますが、語学が鍵となる要件だということです。そこで、学生の成績を見る前に、成績を考慮する以前に、コースが運営される言語で彼らが間違いなく活動できるようにしなければなりません。それが基本です。そこで、学生の中に私たちの語学要件を満たさないものがあることを見つければ、私は「申し訳ないが受け入れられない」と言わなければなりません。デンマークのパートナーにこのことを言わなければならず、そのために大変な議論になりましたが、私にはどうすることもできませんでした。

プログラムの初期には他の問題もみられました。それは完全に避けることは困難なのですが、この種のプログラムにとっては危険なものです。プログラムをパートナーの間の競争と考える傾向です。たとえば、私たちはデンマークのパートナーと、学生の半分はロンドンでスタートし、学生の半分はデンマークでスタートするとの合意に達しました。これについても、プログラムが始まって2年で、デンマークのパートナーがこの合意を忘れ、実際には大部分の学生がデンマークでスタートし、ロンドンでスタートする学生はあまり多くないという状態になりそうなことを私は発見しました。私たちがこのプログラムで毎年このような大勢の学生を受け入れることをロンドンの私の上司が期待しているのに、実際には受け入れる学生がそれほど多くはならぬそうだとすることを私が突然発見したとしたらどうでしょう。そのことで大きな困難が生じ、またもや、デンマークのパートナーとの間の大きな意見の相違が生じました。

これらは2つの例でしかありませんが、特にロンドンの私たち自身とデンマークのコーディ

ネーターとの間の信頼が重大な問題になりました。この問題で、最終的にはデンマークの機関の上級管理者がコーディネーターを交代させる必要があることを理解し、2年前に交代が行われました。それ以来、すべてが順調です。それまではとても困難な状況が続きました。

こうしたプログラムに広く影響を及ぼす、とても重要で皆さんが多分議論したいと考えるもう1つの問題は、持続可能性です。これは昨日も話題に上りました。EUはこうしたプログラムにいつまでも資金提供をしようとは考えていません。プログラムが新たな資金源を見つけることを期待しています。どこかの大手企業のところへ援助を求めに行くことのできるエンジニアリングのプログラムや、やはり助成を求めて企業に行くことのできる薬学のプログラムの場合には、これも比較的容易かもしれませんが、教育プログラムはどこに行っても助成を求めたら良いのでしょうか。

これらはコンソーシアム全体の問題ですが、特定の機関の中で起こった問題にはさまざまな種類のものがありました。IOE内部では、まず第一に、プログラムの運営について実際に最終的な責任を負うのが誰かが明確になっていませんでした。最初から私がコースリーダーに指名されていましたが、私がコースリーダーになったのは、そもそも、なってもいいと考えた人が他に誰もいなかったからでした。実は当初私はプログラムの申請には関わっていませんでした。このプログラムへのIOEの参加について署名したのは、ある先任教授でした。彼は自分が署名したことを、私を含めた多くの人に話さずにいたのです。

ある日、彼が私のドアをノックして、「エド、君にデンマークから来た人たちに会ってみたい」と言うのです。その時まで、私はこのプログラムについて何も知りませんでした。私が彼の研究室に入るとデンマークから来た3人の人々がいました。「ああ、この新しいプログラムがEUから承認された。それで、来年から君のコースにさらに15人の学生が加わることになる。私は君を紹介するだけにさせてほしい。ああ、もう他の会議に行かなくては。ではよろしく」。

私はデンマークのパートナーと一緒に残され、オフィスの中で互いに見つめ合い、「さて、何をすればいいのでしょうか」と言うことしかできませんでした。そんなわけで、結果的に私がコースリーダーになりましたが、その教授は自分が応募書類に署名したので、当然、自分が「ボス」であると考えていました。2、3年後に私がデンマークのパートナーとのトラブルを抱えていたときに、このデンマークの男性が「これこれしかじかの件について、私とエドとは意見が合わない、何とかしてもらわなくては」と、私の「ボス」に電話していることを私は知りました。そのために、私は教授からの「どうなっているんだ」という怒りの電話を受けるようになりましたが、彼は実際にはプログラムの運営には関わっていませんでした。実際にプログラムを運営していたのは私でした。最終的にはこのことがとても大きな問題になったので、私はパートナーのデンマーク人のところへ行って、「何とかしてください。私には教授に黙れとは言えません。あなたが言ってくれなくては」と言わなければなりません。それはそれは難しい状況でした。

ですから、透明なコミュニケーションはプログラムの運営に関わっている人々自身のために

も重要ですが、パートナーとの関係のためにも重要です。パートナーが、「この人がプログラムの運営の責任者で、この人と話をしてもらいたい」という、非常に明確なメッセージを受けられるようにしなければなりません。

また、このことと関連する問題ですが、こうした類のプログラムについては、最初から、できる限り多数の同僚を議論に巻き込むか、こうしたプログラムが唐突に始まったときに、私の場合のように、ある種のショックとして受け取られないように、少なくとも、こうしたプログラムが始まりそうだとすることを同僚に知らせておくことが重要です。できるだけ多くの同僚に、プログラムに関わる授業や、学生指導に関わってもいいと思ってもらえるようにするためでもあります。なぜなら、私たちのプログラムについて起こったことですが、IOE では大きな問題ではありませんでしたが、実際にデンマークとスペインでは、それらの機関で学生指導に関わってもいいと考えた教師はほとんどいなかったからです。その理由は1つには、私が聞いたところでは、デンマークの機関では多くの人々が当初のコーディネーターを好ましく思っておらず、そのために、デンマークの機関の教授の多くが立派な英語を話すことができたにもかかわらず、このコーディネーターを助けたいと思わなかったのです。問題は人間関係にあったのです。

スペインの機関では、言語が問題でした。英語で授業のできる教師がほとんどいなかったのです。英語で授業のできる人たちが酷使されました。図書館でも英語の情報資料があまり多くないために、私たちの IOE からスペインに行った学生から、「ヴィッカーズ先生、図書館に資料がありません。スペインにいる間、IOE 経由で英語の雑誌が読めるよう、IOE の図書館にオンラインでアクセスできるようにしてもらえませんか」という苦情を受けたものでした。私はそうしてやらざるを得ませんでした。ですがこうした図書などの学習のための資源は当然重要です。教師と図書館の情報資料について考慮する必要があります。

さらに、これはどちらかと言えば感情的な問題ですが、こうしたプログラムの運営では、特にコースリーダーが関わらなければならない大量の仕事が生じますから、こうしたプログラムへの参加を表明した機関によってその仕事が適切に認識される必要があります。自分の仕事は上司や機関によって高く評価されていると、コースリーダーが感じるようにする必要があります。そうでなければ、非常にやる気をそぐこととなります。

次はスライド 12 です。これらはこうした性質のプログラムの立ち上げに当たって配慮を要すると考えられる問題の一部です。機関が違えば目的も少し違ってくことを受け入れる必要があります。それらの目的が何かを理解する必要があります。可能な場合には、関係するパートナーに、こうした種類のプログラムの運営を、確実に本当に熱心にやってもらえるようにすることが必要です。1人、2人の人々が運営に携われれば良いのだということではなく、プログラムが上級管理者の支援も受けていることが必要です。調整機関とパートナー機関の責任の範囲についても最初からきわめて明確に議論されなければならず、理想的にはこれらの責任が、特にプログラムのマネジメントに必要な経費配分にも反映される必要があります。

これもまた、私のプログラムに関して起こったことの1つですが、プログラムを運営するた

めの経費のほとんどすべてがデンマークに渡されました。しかし実際にプログラムをどう運営するか議論や、海外からの学生の扱いについてのデンマークの機関への助言に関する仕事の多くが IOE によって行われたのです。それなのに、私たちはプログラムのマネジメントに必要な経費は受け取れませんでした。

重要なことは、共同学位を与えようとするなら当然のことながら、共同学位の合否判定手順について合意しておく必要があります。共通の基準について合意が必要で、それはすべてのパートナー、学位授与を共同で行うすべてのパートナーによって行われなければならないと思います。そう思うのは何よりも法的な理由からです。申請手続における語学基準の位置づけが重要だと思います。授業料もちろん問題です。マーケティングも、とてもとても重要ですが、私たちのプログラムでは初めは十分考えられていませんでした。実のところ初めは、私たちが獲得すべきだったような学生をうまく引き付けられませんでした。奨学金はとても気前の良いものでしたが、最初は、奨学金がそうした優秀な学生に渡りませんでした。とてもとても優秀な学生が申請してくるようになるのに2、3年かかりました。

最後のスライド 13 です。これは機関の内部事項に関してすでにお話したいいくつかの問題です。初期の段階からできるだけ広い範囲の人々に相談する。プログラムの運営に関して誰が主要な責任を負うのかがきちんと明確になっている、そして、そうした責任を負う人が、上級管理者から、役員から、必要なあらゆる支援を受け、さらにその人がその任務に専念するインセンティブや動機を確実に与えられるよう努める。たくさんの仕事が、実際にこうしたプログラムの運営に関わったことのない多くの人たちには想像もつかないほど多くの仕事が、その任務に関連して生じるからです。それから先ほどお話ししましたように、適切な資源が利用できるようにしておくことが重要です。英語であれ何語であれ、授業のできる教師、それから実際にプログラムの実施のために学生が必要とする図書館の情報資料が整備されていることが重要です。

以上です。

総合討議

ロンドン大学の報告を受けて（全体討議）

清水： Vickers 先生、ありがとうございました。それでは、残された時間の中で質疑と意見交換を行いたいと思います。

その前に、少しばかり私たちの内輪話をさせて下さい。実は、私たちのプログラムを作成する際、Vickers 先生からたくさんの助言をもらいました。私たちは基本的にヨーロッパの「エラスムス・ムンドゥス・プログラム」をベースにしながら、アジア型の「エラスムス・ムンドゥス・プログラム」ができないものかと考えてまいりました。ただ、現実には EU の「エラスムス・ムンドゥス」もすでに完成したプログラムではなく、さまざまな困難を抱えながら、試行錯誤を繰り返している。それが実態だと思います。私たちがダブル・ディグリーなりジョイント・ディグリーを作ろうとする時に、きっと EU と同じような経験や問題に遭遇すると思います。その意味で、私たちは EU の良いところを沢山学ばなければなりませんし、また同時に EU の問題点からも沢山のことを学ばなければなりません。

実際、ダブル・ディグリーなりジョイント・ディグリーを立ち上げるためには、解決が困難な問題もあるでしょう。異なる国々の間で、異なる大学で共同のプログラムを運営することは、大変困難な問題だと思います。しかし、私たちはこの取って困難な問題にチャレンジしてみようと思い立ちました。それは、共同プログラムを運営することによって、東アジアの諸大学と連携を取りつつ、また人的交流を通して、研究と教育の質を高めるためです。こうして、このプログラムを始めたわけでございます。

若干ですけれども、予定の時間が残っています。まず Vickers 先生のプレゼンテーションにご質問があれば、ご質問をいただきたいと思います。その後で、2 日間の討議全体についてご質問、ご意見をいただきたいと思っています。

まず、今日の Edward のプレゼンテーションに対して何かご質問のある方があれば、どうぞ挙手をお願いいたします。はい、柴山先生。

柴山： どうも、大変興味深いご報告をありがとうございます。

私は Vickers 先生から「エラスムス・ムンドゥス」の話を体系的にお聞きするのは今日が初めてです。「エラスムス・ムンドゥス」はうまく運営されていると考えていたのですが、今お聞きすると、いろいろな問題があるということですね。

それで、現在我々が東北大学として作ってこうとしているジョイント・ディグリー、あるいはダブル・ディグリーは、「エラスムス・ムンドゥス」と比較してさらに困難を抱えていると思いました。つまり、「エラスムス・ムンドゥス」は裏側に EU という組織がございませぬ。いわばそれが下支えになって「エラスムス・ムンドゥス」が運営されているかと思うのですが、

我々はそういう下支えになるようなアジア共通の組織を持っていません。その辺り、何か Vickers 先生の方から、最後のスライドでいくつかコメントをいただきましたけれども、その大きな部分での異なる点について助言を頂ければと思います。

Vickers : もちろん、EU の役割はエラスムス・ムンドゥスの鍵になるものですが、それには強みと弱みがあります。強みは奨学金の資金で、それはとても素晴らしいことです。弱みは EU が官僚的な組織として運営されていることと関連しています。そのために、特に、各大学・各機関が何をしていて、どのように資金を使っているかを説明する、とても、とても多くの文書をブリュッセルに提出しなければなりません。そのために、調整役や調整機関が必要になります。

今私が予想しているのは、東北大学が日本の文部科学省に対して、とてもよく似たやり方で同じことをしなければならなくなるということです。ですから多分、重要な違いではないでしょう。

ですが EU について私たちが気付いたことの 1 つは、EU の規則がよく変わるということです。突然、明日からこの新しい規則が適用されると発表することです。たとえば、2006 年のことになりますが、プログラムが始められたときには、私たちが獲得した 25 の奨学金のうち 5 つがインドの学生に与えられていました。特にインドから学生を誘致したいと EU が決定していたからです。

その 2 年後には、この方針が実際にはうまくいっていないと、インドからの応募者が望んだような学生ではないという判断が下されました。こうした判断がなされる直前に、私たちのコンソーシアムでは、とても多くの奨学金がインドの学生に与えられているのに、インドから望み通りの応募者が得られていないので、資金を投入してインドに行き、プログラムのマーケティングを行い、インドのいろいろな大学を回って話をすることを決めていました。

私はデンマークの機関の同僚とともにインドで 12 日間を過ごし、8 つほどの大学を訪れ、プログラムを宣伝しました。それはそれは大勢の学生に話をしました。私たちがヨーロッパに戻って約 2 週間後に、実はインド人に与えられる 5 人分の奨学金はないことが知らされました。EU がその 5 人分の奨学金を廃止しようとしていたのです。そのようなことです。

私たちは、このインドでのマーケティング・プログラムにすでに数千ユーロを支出していました。インド人に奨学金を与えるという考えは間違っていたと EU が判断するのなら、私たちに 1 年の猶予を与えることができたはずですが、来年からインド人への奨学金はなくなると言えたはずですが、そうはしませんでした。明日から、その奨学金はなくなると言ったのです。

EU がなければ、そうした類のことを処理する必要はありません。ですがもちろん、いろいろな国のパートナー大学との交渉にずっと多くの努力を注がなければいけないということです。ヨーロッパでは、私たちがエラスムス・ムンドゥス・プログラムに関わっている場合に、調整役の機関がパートナーに、「いいですか、こういうやり方でやらなければならないと欧州委

員会 (EU commission) が言っているから、こういうやり方でやらなければならないのです」と確実に言えるからです。

ですが、東アジアでは、お金を出してくれて、「お金が欲しければこういうやり方でやらなければならない」と言う東アジア連合がありません。そしてもちろん、「文科省がお金を出す。だからこういうやり方でやらなければならない」と日本が言うのは、外交的にとてもまずいことです。

柴山： それと、キースタッフへのイニシアティブですね。キースタッフが頑張っってそういう作業をするインセンティブは、たとえばどういうものでしょうか？ やっぱりマネーですか、時間ですか？

Vickers： 1つは昇進です。もう1つは…。いいでしょう、率直にお話ししましょう。

先ほどお話したように、2005年に私がコースリーダーになったのは、初めはほとんど偶然のことでした。生涯学習は決して私の専門ではありませんでした。私は生涯学習とは何なのかさえ知りませんでした。学生が比較教育コースを取るようになったので、私も関わらざるを得ず、プログラム全体に責任を持つようになりましたが、それは、プログラムの学生たちに起こることと、彼らにお世話をする中で私が手にする研究費に対して、何らかのコントロールをしたり、影響を与えたりすることができれば、と思ったからです。

ですが、6年後に私がまだこのプログラムのコースリーダーをしようとは夢にも思いませんでしたし、もし生涯学習が私の専門だったとしても、このようなプログラムのコースリーダーであることは大変な仕事ですから、このようなプログラムの運営に主に関わるスタッフにはインセンティブが与えられる必要があります、その1つは昇進の見込みだと思います。私の場合には、私が日本に来る飛行機に乗り込むその瞬間まで、このプログラムを運営にあたっていました。

清水： はい、華東師範大学の徐先生、どうぞ。

徐光興： 素晴らしい報告に非常に感謝しております。質問が2つあります。

まず1つ目に、このような仲介者、そして中間でコーディネートする学校に対して、非常に興味があります。今お聞きした中で少しはっきりしないのは、このような中間にあるコーディネーターは、自ら立候補したのか、それとも推薦されたのでしょうか。そしてコーディネーターは、指名されたものか、あるいは本人が望んだのか。それであればコーディネートする学校が決まってから、たとえばコーディネーターはプロジェクト経費の資金援助があるのかどうか。中間のコーディネーターとコーディネートする学校は、彼がプログラムの経費で指定されたことを実施するのかどうか。

2つ目は、共同する複数の大学に対して、学生の奨学金について、今お聞きしたような学費

はどのように解決するのか。よろしくお願いします。

Vickers： すみません、誰の学費ですか。

徐光興： つまり、自分の大学にやってきた学生ですが、彼らの学費はどのように徴収すべきで、学費はどうなるのか。

Vickers： 分かりました。授業料はすべてコンソーシアムの調整機関に支払われます。このケースでは授業料はすべてデンマークの大学に行き、パートナー機関が与えた単位数にもとづいて各機関に配分されます。

プログラムの授業料は単一で同額です。学生がデンマークでスタートしようがロンドンでスタートしようが関係なく、全員が同額の授業料を支払います。もし学生が払う授業料の額が違っていたら——たとえば、デンマークの授業料がロンドンの半分だったとしましょう——、学生は全員デンマークに行ってしまう、ロンドンには誰も来ないか、そうでなければロンドンに来る学生ははるかに多額の授業料を払わなければならない、大変不幸な目に会うことになります。これはとても重要です。ですから授業料は同一でなければなりません。

それから単位の役割についてお話ししました。各単位は金銭価値を与えられ、教えられた単位数にもとづいて調整機関が授業料を配分します。ですが、調整機関も最初に手数料として 1%を取ります。調整機関が管理コストのために授業料から 1%を取りますが、それが調整機関とパートナー機関との間に緊張をもたらす 1つの問題点なのです。意見の不一致とは言いませんが、調整機関がどれだけの金額を取るべきかについて交渉が行われてきました。

1つ目の問題ですが、このプロジェクトに参加する場合、大学は誰が学び、選択するか、ですよね。これは EU またはその大学が自ら参加したいと決めるのか、というような問題ですよね。

徐光興： ええ、そうです。

Vickers： 分かりました。各機関が自分で決めます。そもそも EU の役人が機関を選ぶわけではありません。EU の役人が出張してこのプログラムに参加する機関を探すわけではありません。基本的には、彼らは毎年エラスムス・ムンドゥス・プログラムの募集を発表し、「このようなプログラムについての EU の資金提供に応募したいなら、次のことをしてください。最低 3 機関でコンソーシアムを作らなければなりません。これこれの情報をすべて私たちにくれなければなりません。こういう様式に記入しなければなりません。それだけのことをやってください」と言います。

そこで機関同士が連絡を取り合ってこの資金提供に応募するかどうかを決めます。私たちの場合は、前にお話した先任教授とデンマークの機関の何人かとの間に個人的な関係があったの

で、デンマークのパートナーと一緒に応募しました。IOE との機関同士の関係もありましたが、そうした個人的関係もあったのです。そこで彼がデンマークへ行くと、デンマークの人たちは「私たちはこれに応募したい。IOE は応募するのか」と言いました。そこで彼は「ああ、分かった。心配するな。ああ、私たちも応募する」と言いました。それ以外には、自分がこれに合意してきたことを彼は IOE の他の人々にはあまり言いませんでした。ですが、こんなふうにしてプログラムが生まれたのです。

それからスペインのパートナーが加わりましたが、それは、デンマークの機関もその大学の誰かを知っていたからだと思います。このようにして私たちのコンソーシアムは作られました。人的関係や既に存在した機関の間の関係によるものです。

清水： ありがとうございます。どうぞ。

詹： 個人的な興味のためですが、質問をさせていただいてもよろしいでしょうか？ 私の知る限りでは、イギリスは EU のメンバーではなく、イギリス内の一部の人々は EU にさえ反対しています。EU メンバーを非常にひいきするようなプログラムに、そして EU 内の国さえ、たとえばドイツのある大学の中でさえ、教授や大学の学生の中にボローニャ・プロセスをあまり快く思っていない人たちがいるというのに、なぜ取り組まれたのですか。

Vickers： ボローニャ・プロセスですね。

詹： はい、それでボローニャ・プロセスを推進するようなプログラムに取り組まれたのはなぜでしょう。

Vickers： そう、つまり、私が取り組んだわけではありません。一緒にやらないかとデンマークの機関に頼まれたのです。ですがあなたの言葉をちょっと訂正させてもらいたいたいのですが、イギリス首相の今週の振る舞いにも関わらず、イギリスは実はまだ EU のメンバーです。いつまで続くかについては、私には分かりません。

ボローニャ・プロセスは、通訳者が発音するのが難しいボローニャという言葉を私のスライドに入れたくなくて、ボローニャ・プロセスには触れませんでした。ですが、ボローニャ・プロセスはもちろん、エラスムス・ムンドゥスなど EU 高等教育政策の要となっています。ヨーロッパの教育システムの調和を図ることについてお話ししましたが、それがボローニャ・プロセスの目指すところですが、ボローニャ・プロセスに伴って生じるものを考えてみると、そこから生じるのはある種のモデルとしての 3 年の学士号、つまり 3 年の基礎的学位、2 年の修士プログラム、3 年の博士プログラムを推進しようという試みです。それらは多かれ少なかれ、修士プログラムが通常は 2 年ではなく 1 年だということを除いて、イギリスではすでに実現していることです。

ですから、ボローニャ・プロセスによってイギリスの機関に大きな変化が生じ、適合が必要になることはありません。ボローニャ・プロセスを基礎にして他の機関と関わるのは、私たちにとってはかなり容易なことです。

ですが、イギリスの機関とヨーロッパの他の機関との間での文化や行動の違いの問題というようなものがあり、それはイギリス以外のヨーロッパの多くの国々では、権利としての高等教育という観念が強いためです。特に北ヨーロッパでは、学生が高等教育の授業料を支払わなければならないという考えは、ほとんど不道德な考えとみられ、私が行ったブリュッセルの会議では、私やイギリスの同僚が、高等教育を「学生からお金を奪う手段」と考える不道德な行為について、スウェーデン人やノルウェー人から、非難されたり説教されたりしてきたのです。ですがイギリス内部でも、この問題については意見の不一致がありますが、基本的にはイギリスの大学は、大学はお金をもらわなければならない、そうしなければ生き残れないという考えになじんできました。

授業料と、エラスムス・ムンドゥス・プログラムについて授業料を実際にどう決めるかという問題は、イギリスとそのヨーロッパのパートナーとの間の緊張の種になっています。私たちのプログラムでも他のプログラムでも緊張の種になってきました。しかし、これはこのプログラム内の信頼をむしばむ問題の1つになっています。それは私たちのデンマークのパートナーが、授業料について私たちと交渉しているときに、最初に「では、教える単位に基づいて授業料は配分すべきです」と言ったからです。そして私たちにはとても公平に思えました。そこで私たちは合意しました。

ところが、プログラムの3年か4年目になって、実際にはデンマークの機関がプログラムで彼らが教える学生について二重の支払いを受けていることに、私たちは気付きました。彼らはコンソーシアムが請求した授業料から支払いを受けますが、スカンジナビアでは政府がすべての学生について支払いをするために、デンマーク政府からも自動的に支払いを受けていたのです。デンマーク政府に「私たちのところにはこれだけ大勢の学生がいます」というと、政府からそれらの学生についてお金がもらえるのです。こうして彼らは二重の支払いを受けていたのです。私たちが気付いたときには、もちろん気分のいいはずがありませんでした。

宮腰： どうもありがとうございました。それで、私の伺いたいことは、「エラスムス・ムンドゥス」という、今日、テーマでお話しいただいたのですが、問題は、それに先行する「エラスムス」計画です。およそ20年前、1984年から1985年だったと思うのですが。

Vickers： 「エラスムス・ムンドゥス」じゃなくて、「エラスムス」ですか？

宮腰： はい。「エラスムス」にしても、あるいは「ムンドゥス」にしても、やはりEUの海外戦略的な、対アメリカに対する戦略が基盤にありますけれども、そういう点では同一のプログラムではありますが、「エラスムス」計画は域内での学生の交流であり、European Dimensionを強

化していくということでスタートした。それを今度さらに世界に拡大していく、そういった 2 段階を踏まえているわけですね。

ですから、私どもの進めようとしているのは、先ず前者の「エラスムス」計画の方がむしろモデルになるのではないか。もちろんその EU という基盤からすれば、我々はまだ 1950 年代から 60 年くらい遅れがあるわけです。そういう意味で、その「エラスムス」計画と「ムンドゥス」計画とのその連続性、それから、そこで、変化ですね。そこはどういうふうに考えたらいいか。もしご存じのところがあれば、教えていただきたいですが。

Vickers: はい、実は私は東北大学のプログラムが、つまり皆さんが立ち上げようとしているプログラムが、実際にはエラスムス・プログラムとエラスムス・ムンドゥス・プログラムのどちらかに似ているだろうかと考えてきました。いくつかの点で、それは 2 つを合わせたようなものです。エラスムス・プログラムは EU の最も成功したプログラムの 1 つと広く考えられています。もちろんそれは大学院レベルにだけ適用されるものではありません。学部レベルにも適用されます。

私が大学生だったとき、このプログラムのドイツの学生が突如現れ、私は彼がそこで何をしているのか不思議に思い、私には初耳だったこのエラスムス・プログラムで来ていると彼が説明してくれたのを憶えています。私が聞いたことがなかった理由が、イギリスの学生のエラスムス・プログラムへの参加レベルが非常に低いためだったことは重要です。皆さんの中にこのプログラムにあまりなじみがない方がいられるといけないので念のためですが、エラスムス・プログラムはエラスムス・ムンドゥス・プログラムより古いものです。エラスムス・プログラムはヨーロッパの中だけの交換プログラムです。いつ始まったか、私は確かなことを知りません。

宮腰: 1984 年か 1985 年です。

Vickers: ありがとうございます。では私が大学に入学する直前ですね。エラスムス・プログラムは、EU の初期のプログラムの多くと同様、ヨーロッパの中の結びつきを強めるために作られました。ヨーロッパの大学生の間に、ヨーロッパ人としてのアイデンティティの感覚を構築しようとする意味合いが強く、他のヨーロッパの国で学ぶ経験を与えるものでした。実際には、ヨーロッパの高等教育を調和させるものではありませんでした。たとえば、そのプログラムでとても多くの学生がイギリスに来ました。ですがお話したように、イギリスからヨーロッパに行った学生はあまり多くはありませんでした。

エラスムス・ムンドゥス・プログラムは、名前からはエラスムス・プログラムの拡大版ということになりますが、実際には最初のエラスムス・プログラムに比べてずっと複雑で、ずっと野心的なものです。エラスムス・プログラムから継承されたのは、単位の相互認証だけだったからです。エラスムス・プログラムに参加する学生は自分の大学を通して申請し、学生は、彼らが別のヨーロッパの大学で学ぶことになる期間について、自分の大学がどれだけの単位をくれ

るかを知らされることになりましたが、その大学では他には運営上の厄介な問題は何も生じないと思います。

たとえば、IOE がある学生をエラスムスの学生としてデンマークに送るとしたら、私たちの委員会がデンマークのモジュールを評価する必要はないでしょう——デンマークのモジュールがどれだけの単位に相当し、エラスムス・プログラムで学生が他の大学で取得できる単位数には限度があることを受け入れる必要がありました。今、私にはそれが何単位だったか思い出すことができません。

申し訳ありません、質問への答えになっているかどうか分かりませんが…。

清水： はい、ソウル国立大学の宋先生、どうぞ。

宋： とても率直で役に立つプレゼンテーションをありがとうございました。短い質問が2つあります。最初の質問は、生涯学習モジュールというコースの題目についてのものです。たまたまそういう特定の主題になったのでしょうか、それともあなたの関わったプログラムに関して生涯学習がなぜ適切か、何か特別な理由があったのでしょうか。

Vickers： とてもいい質問です。私たちがなぜ生涯学習を選んだかについて私はそれとなく伝えようとしたのですが、多分もっとはっきり説明しなければなりませんね。

私は思うのですが…いや確かに、デンマークの人たちは申請時、EU のエラスムス・ムンドゥス・プログラムの教育分野での資金提供はごくごくわずかなものでしかないことを承知していました。資金が提供されたプログラムはほとんどが科学分野のもので、エンジニアリング、環境科学と、圧倒的に科学分野のものでした。また、社会科学分野のもの、人文分野のものもありましたが、EU が教育プログラムに経費を提供するとすれば、たぶん1つか2つのプログラムだけで、また1年では1つだけだろう、と私たちは承知していました。

そこで、私たちが申請した年に、経費を獲得できる唯一の教育分野プログラムになるとするのなら、プログラムがブリュッセルの役人の興味を即座に、確実にそそるための方法を見つけなければなりませんでした。「生涯学習」は教育分野におけるEUのスローガンです。理由は簡単には説明できません。ですが、いくつかの理由から「生涯学習」がスローガンとなっています。そこで私たちは、EU が「素晴らしい！ このプログラムは教育に関する私たちEUの政策を推進するもので、そればかりか…」と考えるように、プログラムを「生涯学習」と名付けることにしました。

宋： 分かりました、ありがとうございます。もう1つのとても短い質問は、イギリスの学生の場合、修士プログラムは普通1年だと話されましたね。このプログラムの場合、学生は2年間学ばなければならず、さらに必要なら違う言葉も学ばなければなりません。つまり、そのことはイギリスの学生やイギリスの機関にとってある種の負担もしくは困難になりかねません。

応募してきたイギリスの学生から最終的には何人を採用できたのでしょうか？

Vickers : そうですね、はっきりさせなくてははいけませんね。エラスムス・プログラムは、ヨーロッパの交換プログラムでしかない。エラスムス・プログラムは、比較的少数のイギリス人学生しか引き付けることが来ませんでした。それは主に、言葉の問題からでした。

ですがエラスムス・ムンドゥス・プログラムは、国境を超えたヨーロッパの大学によって共同で運営されているために、大部分のエラスムス・ムンドゥス・プログラムは英語で提供されています。イギリスやアイルランドの大学が関わっていないプログラムでも、コースは英語で提供されます。そのために、ドイツ、スウェーデン、イタリアの大学をエラスムス・ムンドゥスのコンソーシアムに参加させることができ、そうした大学は、海外の学生を得るために互いに争っているため、英語のコースを提供します。

そして実のところ、こうしたコンソーシアムはイギリスやアメリカの大学と競っているのです。私はこのことを、エラスムス・ムンドゥス・プログラムがなぜ重要かを説明するために、IOEで言おうとしました。エラスムス・ムンドゥス・プログラムがヨーロッパの大学にとって何の役に立っているかといえば、その1つが英語での新しいコースを開発することで、次にはそのことによって、大学が海外の学生を誘致することが可能になり、国際的な学生市場で大学を際立たせ、そのために私たちと競うことができるようになるからです。

私が言ったのは、私たちがこのプログラムに加わらなければ、そしてプログラムが成功すれば、私たちは、エラスムス・ムンドゥスを通してだけでなく、次第に英語のコースの提供を増やしている、こうしたヨーロッパの他の大学に遅れをとることになるだろうということです。ドイツの多くの大学が、特に北ヨーロッパで、多くの大学が今は英語のプログラムを、特に大学院レベルで提供しています。

清水 : はい、ソウル国立大学の李先生、どうぞ。

李炳政 : はい、プレゼンテーションをありがとうございました。

1つ質問があります。こうした国際的なプログラムを運営するために着目しなければならない点は、どのようにしてふさわしい学生を、優秀な学生を実際にプログラムに引き付けるかだと思います。

そこで、あなたの経験にもとづいて、いろいろな国から、いろいろな機関から、こうした優れた学生を誘致するために、私たちは何を考えなければならないのでしょうか。

Vickers : はい、とてもいい質問ですね。実際、本当に優秀な学生を引き付けるに当たって私たちが抱えた1つの問題は、「生涯学習」というプログラムの名前でした。私たちがその名前を選んだのは、それがEUにアピールする名前で、そのために、そもそも奨学金の資金提供を得るのに役立つからです。

ですがプログラムのマーケティングとなると、中国の学生、インドの学生など私たちが呼び込もうとした学生は、「生涯学習」が何かを知らませんでした。プログラムの名前が「比較教育」だったら、多くの学生はそれが何であるかを理解できたでしょうし、多くの学生が「ググ」って、その言葉を見つけ、応募していたことでしょう。

ですが「生涯学習」という言葉だったために、学生には、確かにヨーロッパの外では、多くの学生には非常に狭いと思われ、それが私たちにとってプログラムのマーケティングに当たっての問題になりました。

つまり、まず第一に、プログラムのマーケティングとトップの学生を引き付けることについては、プログラムへの名付け方が、基本的には、プログラムのタイトル、プログラムの分野が、できるだけ多くの学生にとって認識されやすく、魅力的であることが必要です。その点からいえば、私たちの状況は理想的とは言えませんでした。

奨学金についてですが、奨学金があることもトップの学生を引き付けるための重要なポイントです。奨学金が全額給与でなくとも、授業料免除だけだったとしても構いません。それを「奨学金」と言って、こうした奨学金のための競争がとて、とても激しくなりそうで、それでもこのプログラムに応募して奨学金を得さえすれば、それだけであなたがトップの学生だということになり、競争に勝ったことになる、と暗に伝えるのです。ある種の組織的なマーケティング・プログラムで奨学金を使うことはとても重要です。この点でも、私たちは当初はあまり効果的にはできませんでした。このようなプログラムの効果的なマーケティングのためにも、マーケティングのためのかかなりの予算が必要だと思います。

李柄政： 分かりました。それから、簡単な質問がもう1つあります。言葉の問題に関してですが、この種のプログラムを学ぶに当たっての言葉の問題についていくつか簡単にお話いただきました。ですが、ヨーロッパの場合には英語がヨーロッパ全体に広く普及していて、そのために、教授の手段として基本的に英語を使うこの種のプログラムの運営は比較的容易ではないかと思えます。

しかしアジアでは、特に中国、韓国、日本、台湾といった極東アジアの国々では、これらの機関ではどこでも英語が共通の外国語のようなものになっているとはいえ、学術的なプログラムを学ぶことについては、まだまだ後れを取っている状況です。機関によっても様々ですが…。

そこで、この地域でこの種のプログラムを適切に実施するために、どのような助言をされたいと思われますか？ 特に言葉についてどんな要件が考えられ、このようなプログラムの運営には、どのような共通言語がより適切でしょうか。何か考えはありますか。

Vickers： 率直に言って、共通の言語については2つの選択があると思います。1つは英語で、1つは中国語です。それは最高の学生、皆さんが求めているような最高の学生にとって、どちらが最も魅力的かという問題です。また同時に、関連の機関や政府にとって、どちらが政治的に受け入れやすいかという問題でもあります。多分、修士を取るのにわざわざヨーロッパやア

アメリカやオーストラリアに行かないようにと、トップの学生を皆さんが説得しようとしているのなら、多分英語のコースを提供しなければならないでしょう。

ですが、もちろん、文化的問題があつてこれもとても重要で、これはヨーロッパにも当てはまります。EU は独立した主権国家のコミュニティで、ヨーロッパの多くの国、多くの大学、多くの政治家が、英語が高等教育システムを占拠するという考えを喜んでいません。その理由もよく理解できます。そこで EU は教授の基本的言語は英語であっても、学生にヨーロッパを経験させることをこうしたプログラムの重点の一部とするよう、エラスムス・ムンドゥス・プログラムに働きかけています。学生が学ぶ国の言語が英語でない場合、その言葉を学ぶ機会を学生に提供するよう、プログラムに対して確かに働きかけがありますが、それは必ずしもコースの中で単位として認められていません。

理論的には、たとえば東アジアの言語を学ぶことを、理論上は、教育における修士プログラムの単位とすることが可能です。学生に「では、このプログラムの基本モジュールを英語で提供します」と言うことはできますが、プログラムの目的の一部が他の東アジアの国についての東アジアの学生の間での理解の増進することなので、私たちはやはりこのプログラムの一部として、他のもう1つの東アジア言語の適切なレベルの語学コースを取り、それについても評価されることも学生に求めます。どのように行うのか、どのレベルの語学コースを提供するのか、私には分かりません。ですが理論的には、多分それは可能でしょう。

清水： それでは他に？ 柴山先生、どうぞ。

柴山： よろしいですか。今、言葉の問題が出たのですが、昨日、南京師範大学の傅先生が”Our education is best on our traditional culture...”という言葉をおっしゃっていましたね。私はまさにそのとおりと、傅先生のご意見に全面的に賛成するものです。しかしながら、文化は言語に依存しています。その点で、英語化を強力に進めておられる韓国の2つの大学、これは東北大学もお手本にしないといけないというふうに思っております。高麗大学の韓先生、それからソウル国立大学の宋先生にお尋ねしたいのですが、英語化を強力に進めていらっしゃる中で、自国のその文化をどのようにカリキュラムの中に取り入れる工夫をされているのか、あるいはもう英語でやるのだから、そういうふうな自国の文化はあまり重視されないとか…。その辺りのご判断と工夫についてお聞かせいただければと思います。

清水： それではまず高麗大学の韓先生からお願いします。続いてソウル国立大学の宋先生にお願いします。

韓： 大学院あるいは大学で行われる授業の場合、自国の文化を教える授業は特に提供されません。結局、自分の専攻と関連して学習する場合、今は教育学科の中で韓国教育史を教えているので、韓国や東アジアの教育と関連して話す機会はありますが、他の専攻の人には自国の文

化を教えることができる機会が殆どありません。

サークル活動や教養科目の中に少し関連した科目がありますが、既に大学に入ってきた人に対して自国の文化を学習する機会は、それこそ自分の専攻がその分野の者以外にはほとんど提供されていません。

宋： はい、私も韓先生の意見に同意します。

大学において、英語で授業を行うことには、大きく2つの理由があるようです。1つは私たちの韓国の学生たちの英語の実力が低いため、その部分を向上させるために英語を聞いて話す機会を提供して、英語で話すことに対する恐れを取り除くことがその最初の目的です。

2つ目は、韓国の文化が最も効果的な学習のための前提条件であるとは考えられていないため、英語を授業の言語として使う場合です。この場合、付随的に期待されることは、教師と学生間のより水平的な関係、学生たちの積極的な参加、討論、などのような自由な雰囲気を作られることが期待されますが、もちろん英語であるため、それがなされないことも考えられます。このような点が、私どもが感じる大きな問題点です。

柴山： ありがとうございます。

清水： ありがとうございました。他に質問はございますか…。

このジョイント・ディグリー・プログラムを実際に進めていく上では、今の質問にありましたように、言葉の問題、それから、それぞれの国が持っている文化、またそれぞれの大学が持っている文化、こういったものを尊重していかなければならないと思っています。

そして、実際ここに集まっていた大学は、東アジアでやはり最も著明な大学であると思います。そういった伝統と文化を相互に尊重していかなければならない。その上で、何よりも一番私が強調したいのは、アジアの教育研究のレベルは決して低くないということでありませう。私たちは、アジアの歴史や文化を共有してきました。そして私たちは今、優れた研究や教育を共有できる段階に達しているのではないかと思います。

ところが、実際にはアジアのエリート達が出会う場所はアジアではなくて、ヨーロッパの大学であったり、アメリカの大学であったりする。これからはアジアの時代と言われておりますけれども、次の世代の人々がもっとお互いに直接出会うような場と機会を、この東アジアで設けたい。それがこのプログラムを考える時のひとつの願いでありました。

ただ、実際には、このプログラムを進めていく上では、たとえばそのマーケットリサーチ、先ほど議論されておりました言葉の問題、文化の問題、様々越えなければならない問題があると思っております。

他に、Vickers先生のプレゼンテーションに関してでも結構ですし、昨日からの議論に関してでも結構です。ご意見等があれば、どうぞご自由にご発言ください。いかがでしょうか？ それでは、林先生。

林： エラスムス・ムンドゥス・プログラムではどの機関が学位を与えることになるのかについてお聞きしたいと思います。

私たちの機関では海外の学生から授業料を徴収します。そこで私たちはコースの手配の責任を負い、彼らに学位を発行しますが、そちらのシステムではそうはなっていません。そこで考えるのですが、この地域で、アジア地域でこうした考え方をどう実施したらいいのかと、それがどうなのかと思うところです。

別の質問ですが、私たちはプログラムを支えるために十分な授業料を徴収する必要があります。そこで、毎年の、各履修集団の学生を何人にしたらいいと思われますか。そして、やはりそちらのプログラムについての関連の質問ですが、モジュールが固定されていて、学位のタイトルも「比較教育」といった非常に限定的なものになっています。私たちが異なった専攻のために異なったモジュールを作るとしたら、ややこしいことになるでしょう。多分、私たちには「高等教育」といったような固定されたモジュールと、「教育心理学」などのためのもう 1 つのモジュールが必要でしょう。そうするとますますややこしくなります。

Vickers： はい、いい質問です。授業料の問題ですが、このプログラムで授業料を徴収するすべての機関が、特に、私たちのプログラムのメンバーとしてメルボルン大学が加わった今では、すべて学位を提供するわけではありません。メルボルンは少数の学生に 1 つのモジュールを提供するだけです。その役割は交換のパートナーといったところです。その他の大学は学生がメルボルンのモジュールから取った単位を認定しますが、学生はメルボルン大学の学位は取りません。メルボルンが与えるのが 120 単位のうちの 15 単位だけだからです。しかし、EU が要求するのは、エラスムス・ムンドゥス・プログラムの学生は少なくともダブル・ディグリーをとることで、つまり私たちのプログラムで 120 単位のうちの 30 単位を提供するだけの機関も、それを基礎に自校の学位を与えることに合意しなければならないということです。学生が全体プログラムのうちの 4 分の 1 だけを、たとえばスペインで履修したとしても、スペインの機関はスペインの学位を与えることに合意しなければなりません。たとえば、ロンドンで、この問題が試験委員会に最初に持ち上がったとき、コースリーダーである私は、学位論文を IOE で終わらせただけのこの学生は、それでも IOE の学位を受ける資格があることを説明しなければなりませんでした。試験委員会の委員長は私を見やって、「本当ですか？ そんなことがあり得るのですか？ そんなことが受け入れられますか？」と言いました。そこで私は、それがこのプログラムに私たちが関わる条件だと言わざるを得ませんでした。ですから、私たちがその基礎のもとで学位を提供することができなければ、私たちはプログラムから撤退しなければなりません。

さて、履修集団の人数の問題はとても重要です。皆さんのやっていることがまったく新しいモジュールを持った、まったく新しいプログラムを実際に立ちあげることであれば、そのことは重要です。大学のケースで、このプログラムが英語で提供され、あなたの大学に既存のモジュール、つまり英語で提供される既存の適切なモジュールがないとすれば、そうなれば新しい

モジュールを、つまり英語のモジュールをまるごと用意しなければなりません。それは大変な投資になりますから、それなりの数の学生を獲得することを予想する必要があります。何人の学生がいいのか、私には分かりません。ですがこれは私たちのプログラムに影響を与えてきた問題です。そのことは IOE には影響がありません。すでに私たちのモジュールはすべて英語で行われていて、エラスムス・ムンドゥス・プログラムの一環として私たちが提供するモジュールはすべて、他の修士課程を履修する学生も取っているからです。私たちはエラスムス・ムンドゥスの学生をすでにそのモジュールを履修している学生に加え、そのために学生数が増えるだけで、入って来る授業料が増え、IOE も喜びます。しかし、でデンマークやスペインでは、彼らのモジュールを履修するのはエラスムス・ムンドゥスの学生だけです。

スペインでは、このプログラムの学生すべてがスペインに行くのでそれは問題にはなりません。このプログラムの学生は、全員が同時に、第三セメスターにスペインに行きます。そうですね、今年は履修集団全体で約 20 人の学生が、多分実際にはそれよりわずかに少なく多分 18 人がいたと思います。ですがそれでもスペインにとっては問題がありません。しかし、それらの学生を 2 つに分けて、9 人がデンマーク、9 人がイギリスということにしたら、それでは実際には十分ではなく、デンマークの機関は、お話ししたように私たちに問題ではありませんが、デンマークでは問題になります。デンマークではそのモジュールを取るのがエラスムス・ムンドゥスの学生だけだからです。

今年、デンマークの機関の上級管理者はこういいました。「そうか、9 人の学生か。それでは足りない。では、今年は学生全員がロンドンでプログラムをスタートするようにしよう。来年は学生全員にデンマークでプログラムをスタートさせ、その間に私たちが精力的にプログラムのマーケティングを行い、もっと奨学金を、よそからもっと多くの奨学金の資金提供が獲得できるようにし、うまくいけば 2 年の間に最初のモデルに戻ることができる」。ですが EU が私たちに新しい資金源を探すことを期待しているために、そこからの奨学金が減らされていて、それがデンマークの機関にとっての問題になっています。彼らはもう当初のモデルではうまくかないという判断をしました。

もう 1 つのご質問は学位のタイトルでした。この学位の正式なタイトルは「生涯学習：政策とマネジメントのヨーロッパ修士」というもので、各大学がそれを学位のタイトルにしています。ですから。学生がダブル学位やトリプル学位を取ったとしても、それぞれの証書に書かれたタイトルは同じもので、皆さんがダブル学位を提供しようとしているのなら、そのことが重要だと思います。

清水： ありがとうございます。そのほかに質問はありますか？ 高麗大学の李蓮淑先生、どうぞ。

李蓮淑： 本日のプレゼンテーションは非常に具体的で実際的な経験を例に挙げて頂き、プログラムを行う上でも、とても有益だったと思います。

先ほど、ソウル国立大学校の李先生が優秀な学生の誘致に対する話をされましたが、とても良い質問だと思います。発表者が、プログラム名を魅力的なものにしたり、奨学金を確保したりするというお話しは、重要な戦略になるものと考えております。

今から申し上げることは、質問というよりは私の意見です。このような共同学位を通じて育まれたその人材たちが、どんな仕事につくことができるのか、言い換えれば、どんな職業に繋がりに、どの位のサラリーを得ることができるか。そういう部分が提示できれば、もう少し多くの学生たちが興味を持つものと考えられます。もしも、この課程を我が校で開設する時、学生たちを誘致する戦略をどのように立てるべきかを考えてみました。学生たちがこの課程を履修することによって、今後どのようなことができ、どんな展望があるのかに対する提示を具体的に行えば、多くの学生たちが関心を持つだろうと思いました。

私どもが、このような共同学位を開発する時、ただ漠然とプログラムだけをもって職業は自分で探せという形よりは、できるだけ職業に対する部分も私たちが提示すべきだと思います。それだけでなく、実際に需要、すなわち職業を少し創出しなければならぬとも思います。質問というよりは、私の個人的な意見でした。

清水： ありがとうございます。それでは、ソウル国立大学の李炳玟先生、どうぞ。

李炳玟： 先ほどの質問と似たような内容で恐縮ですが、私ももう一度申し上げます。

私は個人的には次のように思います。果たして、学生たちが修士レベルや博士レベル、または学部のレベルにおいて、米国やヨーロッパに行かずに、この地域に来るのかという問題です。個人的に私は、韓国で英語教育を専攻しました。さっき私どもの宋教授も仰いましたが、大学で英語の講義を行うべきかどうかに対しての問題は多いですが、これには、韓国の内部的な様々な教育 이슈が数多くあります。

その問題を解決するにあたり、韓国社会だけを見るのではなく、他国を参考にすることができます。米国やヨーロッパは制度や文化が明確に異なりますが、周辺国の日本や中国のように文化的・歴史的背景を共有する国の場合、どのように教育問題を克服して行くかを調査すれば、問題に対する解答を得るために多くの役に立つものと思われま。

たとえば、韓国では今最も大きな 이슈となっていることが、私教育問題と英語教育問題です。

ところが、最も近くにある日本を手本にすると、このような問題に対して全く異なる姿が見えてきます。このような場合、比較研究または日本社会について、より深く理解すると同時に、韓国社会の教育に対しても詳しい者が必要です。したがって、そのようなプログラムを、エラスムスのようなものはヨーロッパ内のユニオンのファンドを受けるため制約が多いようですが、東北大学でももう少し自由に、本当にこの地域に来て勉強しなければならない必要があるプログラムを開発できれば、教授や学生たちがさらに関心を持つことができるという気がします。

清水： ありがとうございます。北京師範大学の李家永先生お願いいたします。

李家永： 昨日全員での相互説明や今日午前中のエラスムス・プログラムの紹介にも啓発を受け、非常に多くの情報を得ました。私としては、我々全員がここにいる目的はつまり次の段階はどのように提携するかということだと思います。

私がこの問題について北京師範大学を代表して思うのは、当大学は教育学部であり、自分の考えをお話したいと思います。いくつかありますが、1 つは提携方法の問題です。皆さんご存じのように、我々の共同の目標は共同学位、ジョイントディグリーです。では先ほどのエドワード氏が説明したエラスムスというプログラムは、典型的な共同学位、ジョイントディグリーのプログラムですよね。これは比較的代表的なものです。将来我々はエラスムスのようなプログラムを構築しなければなりません。ではこれを最低限として、中国側としてこのプロジェクトに参加する私としては、昨日皆様に北京師範大学を代表してご説明したときに、時間の都合でご説明できなかったので、ここで簡単に申し上げます。

先ほどエドワードさんが説明された、2010 年以前のエラスムス・プログラムでは申請するコンサルティングは絶対に欧州の大学でした。2010 年以降は欧州以外の大学も可能になりました。そのため 2010 年から北京師範大学教育学部もこのようなプログラムに参加しております。ドイツ・オーストリア・フィンランドそして当大学によるものです。ご存じのように、これは非常に激しい競争です。

我々が理解したことをお伝えすると、まず 4 大学が共同で申請します。申請は EU で最終的に承認を受けるのですが、良く分からないのは、先ほどお話しになった争いの大体の、最終的な認可の確率です。我々が得た情報では確率は 10:1 以上であり、100 件の申請に対して最終的には大体 10 件前後になります。こうして当大学もエラスムス・プログラムを獲得しました。今年受けたばかりで、来年 2012 年の 2 月、あと 2 ヶ月後にも、当大学はこの件でオーストリアに共同で参加し、全大学で会議して、学生を募集しますが、申請者の情報では、全大学が会議に参加して、どの学生を採用するか決定します。ただしこれまでこのプログラムには当大学も大体 1 年強準備をしてきており、この間我々は北京師範大学の関係者として非常に多くの問題に直面しました。このため我々が直面したこうした問題について、ここで議論したいと思います。

我々の共同学位の際にも直面したことなので、皆さんと簡単な共有意見として、我々が将来共同学位までこぎつけることを検討するのであれば、中国側として参加する以上、ある問題に直面する可能性があります。お考えになっているのは生涯学習であり、我々が申請しているのは高等教育だということは、重要な問題ではありません。重要なのは、北京師範大学の教育学部では、参加者として、どのような方式で参加するのか、EU のプログラムに基づけば、最終的には共同学位です。ではこれは学生が将来的に学位を取得する際には、学位証書には、4 大学の印章が必要になり、学生が取得した学位証書の文面にはドイツ・オーストリア・フィンランド・北京の 4 大学の名称を表示するということになります。この点で、最も重要な問題は、

中国では政策的な困難に直面することです。これは中国の高等教育の学位制度に対する管理面では、高等教育内の学校運営の提携にあたります。学校運営の提携は非常に厳格なものであり、非常に官僚化した審査手続きがあります。現在、我々が理解しているのは基本的に政府当局である教育部は承認しないということです。つまり承認する可能性はないということです。承認することがあってもごくまれです。

中国政府当局側の論理は、品質をコントロールする必要があり、権利を引き渡してしまうと、秩序が乱れるというものです。このため我々はちょっとばかげている、全く理屈が立たないと思っています。まるで、どこかの国の法律体系で言えば、子どもの教育は自分の両親の責任であり、両親が責任を取りきれないのであれば、法的に問題があるということです。法律では、中国政府は監護権を剥奪することができます。ただしまずは両親を信用しようとしています。政府は両親が自分の子どもをしっかり管理すると信じます。ただし我々の政府の論理では、大学は各自の事情を管理できない、自身の学位を管理できない、政府のみが管理して品質を保証することができると考えています。当然不満を抱くことも、批判することもできますが、現在の制度では、制度を変えるまでは、遵守する必要があるというのが我々の論理です。

そこで当大学はエラスムス・プログラムを申請するにあたり、直面した最大の障害は、中国政府の承認を受ける方法がないということでした。将来学生が取得した学位には、北京師範大学の印があり、その学生が参加したプログラムで取得した証書には「北京師範大学」と記載されるべきです。当大学は中国政府の承認を受けられませんでした。中国政府はこのようなことは許可しませんでした。特別に承認を受けられませんでした。このプログラムにはやはり引き続き参加します。

このプログラムへの参加には2種類の方式があります。1つ目は、現在もそうなのですが、いわゆる非正式なソーシャルメンバーであり、フォーマルメンバーではないというものです。この両者の違いは、主に学位証書に機関の名称を記載するかどうかであり、実際に北京師範大学が参加するプログラムでは、実施する内容にはなんの違いもないのです。

このプログラムは10年がかりのプログラムで、実際に去年の丸1年で申請書だけの非常に多くの資料だのを準備し、またプログラムの第1段階の準備をしました。しかし、最終的には教育部の承認を受けることができませんでした。そこで我々はドイツ・オーストリア・フィンランドの3つの機関を訪問し、当大学がこのプログラムの学位を正式には授与できないこと、EUに申請書を提出する前に、共同学位の1つとして教育部の承認を受けられなかったことを謝りました。結局、当大学はまずは非正式な、ソーシャルメンバーになることしかできず、その立場で参加しましたが、当大学ですべきことは全部行いました。基本的にEUの履修単位である1学期約30単位のカリキュラムを受け持つことになりました。

当大学ですべきことは全部やりましたが、このプログラムは2010年—2011年に申請し、最終的に2012年秋期に学生が入学するまでには、あと1年あります。学生はまずオーストリアまたはドイツに向かうことになります。そして学生が実際に北京師範大学に来るのは2013年です。それまでにあと2年あります。学生が中国に来るまでの2年間、当大学は教育部と渡り

合い、特別な承認を受けることができれば、フォーカルメンバーになります。しかし、受けられなければソーシャルメンバーになる、というのが現在の当大学の提携方式です。

私は我々中国の大学は現在すべて同様の問題に直面する可能性があると思います。そこで当大学が参加するエラスムス・プログラムではこうした我々のやり方が正しいのか分かりませんが、将来的にアジアという範囲で、この共同プログラムを実施しようとするのであれば、全大学にとって発見があるでしょう。どのように次の一歩に進むのか、何かご意見はありますか。

Vickers : はい、私が言いたいのは、あなたが提起されたのはとても興味深い問題で、正式なパートナーシップ機関と準会員の違いは、東北大学のプログラムについても役に立つかもしれないということです。ですが、あなたがお気付きかどうかははっきり分かりませんが、ヨーロッパでは、EUのエラスムス・ムンドゥスに関する規則のために準会員が提供できるものが限られています。学生が準会員機関で学んで得ることのできる単位数に制限があると思います。15ではないかと思いますが。

李家永 : 約 20 か 30、多分そうだと思うのですが、忘れました。

Vickers : そうかも知れません。毎年変わりますから。規則は少し変わりますが、私が調べたときには…。

李家永 : 私たちが承知しているところでは、私たちは約 20 か 30 ですが、私たちは2年以内に、多分私たちは中華人民共和国教育部から特別許可をとることができればと思っています、できればですが。誰にも分かりません。許可をとるのに2年間あります。

Vickers : 頑張ってください。

李家永 : では北京師範大学が EU のプログラムに参加する上で、当大学はプログラムについて以降はどのように提携するか、特に中国の場合は可能性があれば、比較的現実的で比較的可能性のあるどのような方式で参加すべきか、そしてたとえばこのような方式で可能なのかは、たとえばいわゆるフォーカルメンバーとソーシャルメンバーですが、重要な違いとしては、フォーカルメンバーであれば全大学共同で学生を募集し、最終的に共同で学位を受け持つことを承諾します。もしも単にソーシャルメンバーであれば、たとえば中国の大学、北京師範大学はもちろんそれ以外の華東師範大学や南京師範大学やその他の学校でもすべて問題ありません。ソーシャルメンバーは一種の非正式なメンバーであり、たとえば東北大学の学生であれ、高麗大学の学生であれ、学生を募集して、最終的に皆さんは学位を授与しますが、中国側は教育のみ参加し、受け持つべきカリキュラムの講義は受け持ちますが、学位は共同で出せないという話であり、最終的に任意の大学、または日本の大学が学位を授与します。

日本や韓国の大学にこうした問題がなければ。皆さんは大学に自主権があるから説明すれば済むことでしょう。ならば、最終的に韓国または日本の大学の学位を取得することができ、中国の大学は参加者として、カリキュラムの教育を受け持ち、受け持つことは可能で、問題ありません。このような提携方式をほぼ提供することができると思いますし、検討することができます。

2つ目の問題は言語です。実際にエドワードさんもこの問題に言及しましたが、エラスムス・プログラムの言語については、ヨーロッパの国々でも多くの、およそ数十種類の公用語が存在し、各国でそれぞれの公用語があります。申し訳ないのですが、エラスムス・プログラムに参加する場合、すべてのプログラムのカリキュラムの教育は、英語を使用する必要があります。ただし東アジアでのプログラムについては、この点で検討に値するのは、英語以外に全員が共同で認可できる言語を探せるかでしょう。現在は非常に困難に思われますし、簡単に言えば、中国の状況から言うと中国の学生には日本語やハングル語のルーツを持つ学生もいますが、人数は極めて少なく、中国の学生の第一外国語は英語です。大部分の学生は英語を話し、講義の聴講・閲読の能力などもほぼ問題ありません。しかし日本語やハングル語では基本的に学生を募集しても集まらないでしょう。

日本でも同様の問題に直面しようと思います。日本の学生の第一外国語は中国語でもハングル語でもないはずで、やはり英語でしょう。韓国でも同じような問題があり、韓国の学生にとっての第一外国語も中国語や日本語ではありません。やはり英語です。そこでこの点も検討すべき問題になるでしょうし、このように、東アジアには検討する必要がある非常に大きな問題があります。このシンポジウムに参加なされている大学には、十分な英語のカリキュラムを始める能力があるでしょうか。今日1日会議をしましたが、将来プログラムの統括者や指導者さらには受講者となる可能性がある我々は、ほぼ1日半の会議で、多くのハイレベルな通訳の方達の助けが必要であり、全員が自動的に議論できるような通訳の必要のない共同の言語を見いだすことができなかつたと思います。難しいことですが、こうしたわけで教授や指導者が手助けする必要があります。将来、我々は共同で学生を募集することはできますが、講義を受けるにあたり、誰かが講義をする場合、学生には4人の通訳を手配する必要があります、コストが高すぎて実行できない可能性があることも、検討すべき問題の1つです。

最後に、もう1つ検討すべき問題は、専門をどうするかであり、たとえばIOEのコンソーシアムでは生涯学習を申請しましたが、当大学が申請したのは高等教育であり、何を選んで、うちはそれに対して何をすべきなのかです。私は北京師範大学のみを代表してお話することになりますが、たとえば英語を使って講義をすることができれば比較的良い条件で皆様に提案することが可能であり、英語で講義する専攻はいくつかの提携に参加できます。そのうちの1つが現在実施中で、すべての講義が英語で行われるプログラムである比較教育修士コースです。「比較教育」というコース名自体は実際の中味を指し示すものではありません。たとえば、生涯学習とか、政策とマネジメントとか、内容を具体的にする必要があります。

Vickers : 政策とマネジメントです。

李家永 : はい。我々の比較教育コースも同じで「政策とリーダーシップ」ですが、教育マネジメントにやや重点を置いているため、たとえば教育の政策・マネジメント・リーダーシップでは、当大学の専攻ではアジアまたは日中韓間の様々な国の教育制度に重点を置いています。当大学は、教育の制度・リーダーシップ・マネジメントシステムの比較という部門ではやや優位にあります。

その他の高等教育などでは、当大学はすでにエラスムス・プログラムに参加しており、英語のカリキュラムを提示可能であることをお約束しますし、高等教育では問題ないでしょう。その他のカリキュラムの研究などは、一部英語のカリキュラムを提示可能な実力をもっているほうだと言えます。その他の心理学面に重点を置く場合は、正直に申し上げれば、心理学・教育心理学・学校のコンサルティングに重点を置くと、英語で直接カリキュラムを開設可能という点ではやや弱いという側面があり、大体このような状況です。将来提携に参加するかという当大学の可能性という点では、北京師範大学を代表して、以上のようなアイデアを提供することができると思います。

清水 : ありがとうございます。予定した時間になってしまったのですけれども...、はい、南京師範大学の胡先生。

胡建華 : はい。1日半参加してみて、まとめると2点あります。さきほどの北京師範大学李家永教授のご意見に同意したいと思います。2日間参加してみて特に日本と韓国のデータの一部から見ると、実際に中国については出国する留学生は、どこの国へも非常に多いです。現在の実際の学生の流れが非常に大きいという状態では、このようなプログラムを展開する目的は実際には共同学位にあると言えます。学生自身がこのような国外に留学に出るというプログラムを使わなくても、米国や日韓に行く学生がおり、共同学位という点で我々から言えば、アジア、東アジアの共同学位はエラスムス・ムンドゥスと違い、やはり3カ国に比重を置くこととなり、異なる国の学生が自分の参加するコースの相手国の文化を理解する、我々のアジア、東アジアに対する本プログラムの意味もこの点にあるでしょう。

たとえば技術的なことに異議があるのではないですし、英国や米国や欧州に行っても学ぶことができますが、我々がなぜ本プログラムを展開するのかは、この東アジア地区で異なる国や地域の文化に対する学生の理解を促進すべきだからだと思います。それが学位であるべきで、付与する学位の最も重要な面です。英国・欧州のようなエラスムス・ムンドゥス・プログラムは、長期間展開しており、本プログラムがいきなり同じレベルに達するとは思いません。先ほど李家永教授がおっしゃったように中国政府にはあれやこれやと制限があり、一步ずつ進むことしかできませんが、目標はアジア版のエラスムス・ムンドゥスとすることができるでしょうし、その方向で発展するとしても、やはり現在は最初の交流からでしょうし、学位の互換やダブル・

ディグリーと一歩ずつ進むことをお知らせします。時間の都合で、簡単に意見を述べさせていただきます。

清水： ありがとうございます。では、北京師範大学の高益民先生、お願いします。

高益民： 先生お二方のご意見に引き続き、何を学ぶかという問題について、個人的な意見を少し補足します。

私としては、先ほどエドワード先生もおっしゃったように、欧州は生涯学習というテーマで実施しており、EU のスローガンに合わせるべきということのほかに、テーマもやや広くすることができるので、学生の募集であれ、教師が提供する講義であれ、かならず良い面があると思います。このため将来我々がジョイント・ディグリーを設定しても、ダブル・ディグリーまたはその他のこのような提携でも、この分野で適切に幅を広げると、学生の募集に対して、我々アジアの言語を理解する学生自体が少ないために、幅を広げれば、今日のように東北大学は主に臨床心理を中心としていますが、パンフレットを見ると、実際には臨床心理というものも各分野に浸透していて、たとえば幼児教育や、成人教育や、さらにカリキュラム内容にも関わっています。このため将来は学習領域の設定は、やや広くすると提携により有利になるので、このような意見を補足したいと思います。

Vickers： ごく簡単にお話させていただければ、そのコメントには同意見です。プログラムをかなり幅広いものにする非常に適切な理由は、各機関内部で、獲得した学生を実際に指導する教師をどうやって探すかを考えなければならないということで、プログラムをあまりに狭いものにし、そのためにかなり狭い範囲の教師に依存しなければならないことになれば、そこから困難が生じます。ですからプログラムを幅広くすればするほど、そこから生じる仕事を分散させられる可能性がそれだけ広がります。

清水： ありがとうございます。予定していた時間が過ぎてしまいましたので、まだまだたくさん意見もあるかと思いますが、この続きは多分、また先生方をお招きする機会があるかと思います。その時にまた1つひとつ具体的に、どのような内容で、たとえば言語・カリキュラム・教育方法について継続して議論していかなければならないと思います。

最後に、このプロジェクトのリーダーである本郷よりご挨拶申し上げます。

本郷： 先生方、2日間のプレゼンテーションと、それからディスカッション、ありがとうございます。各国、各大学の先進的な取り組みをお聞きして、我々が進むべき方向と課題の両面が見えてきたと考えます。進むべき方向としては、やはりジョイント・ディグリーを目指してプログラムを考えていくことだと思います。確かに、現実にはダブル・ディグリー、あるいはデュアル・ディグリーが実現の可能性は高いと思います。ただ、ジョイント・ディグリーとい

う新しい可能性を探ることによって、より質の高い大学院の教育、あるいは高等教育を目指していくというのも1つ大事な方向であろうと思います。

この場合のジョイント・ディグリーとは、ここに参加したすべての大学がそこに参加すると言うよりも、たとえば、1つの分野について2つ、あるいは3つぐらいの大学でジョイント・ディグリーを開発する、それをいくつか作っていく可能性があると思います。そのようなものを目指して、まずはプログラムの開発をしていきたいと思います。

一方で、この2日間、今日のディスカッションでもそうですが、多くの課題が挙げられたと思います。

1つは、このジョイント・ディグリー、あるいはダブル・ディグリー、デュアル・ディグリーというところで、目指す大学院の教育の質とは何かと、それはどのように測られるのか。質にもいろいろな側面がありまして、学生の論文数から考えれば、必ずしもジョイント・ディグリーとかダブル・ディグリーはメリットがないかもしれませんが、今日も出ていました、それぞれの文化を理解した **Internationally Minded** な **Educational Professionals** を考えれば、その大学院の質という点ではジョイント・ディグリーは重要な手段であると考えております。その質というものをもう少し追究していくということです。

2番目は、学生のための宿舎、奨学金も含めた、経済的な基盤をこれからどのように作っていくか。それは、今日の **Vickers** 先生の報告にもあった継続性 **sustainability** にも関わって、その経済的な基盤がないと、一時的にはプログラムが実行できても、それが続かないということです。

3番目は、今日の指摘にもありましたけれども、我々の創設するジョイント・ディグリーを取った学生がどういうところに就職できるのか。それは現在のそれぞれの国の社会的なニーズにどう合うのか。あるいは、場合によっては新しい社会的なニーズをこのプログラムを通じて作り出していくという、そういった必要性もあろうかと考えます。

4番目として、プログラムの運営を各大学でどのように分担をしていくかという点も大きな問題だということが、今日わかりました。

それから、後半のディスカッションで度々出ていましたし、昨日もありました言語の問題です。一番現実的に可能性が高いのは英語だろうと思います。ただ、英語であれば、必ずしも東アジアではなくて、アメリカに行けばいいとか、あるいはヨーロッパに行けばいいという可能性も逆に増すことになる。この点をどう考えながら、英語とそれぞれの国の言葉を学んでいくかということです。

最後に、こういったプログラムを実行することには、メリットとデメリットと両方あると考えています。デメリットとしては、ヨーロッパの方のボローニャ・プロセスの中に対する批判として、たとえばドイツで行われたアンケート、学生向けのアンケートの中では、それぞれの大学の独自性が失われる、プログラムを共通化し、カリキュラムを共通化することによって、大学の独自性が失われるのではないかと、文化的な独自性が失われるのではないかと、大学の伝統が失われるのではないかと、こういった危惧も上がってきています。その指摘は大事な指摘だと

思いますので、それぞれの文化的な背景、大学の伝統を大事にしながらも、それでも我々が進む方向は国際化の方向だろうと、それによって得られるメリットをもう少し追究していきたいと考えております。

この2日間、終ってみるとあっという間の2日間でしたけれども、今後とも、来年あるいはそれ以降も、このような形のディスカッションを通じて、それぞれの協力関係あるいは役割分担、それぞれの大学における質の向上を目指した会議を開催していきたいと考えております。

2日間、先生方、どうもありがとうございました。

清水： 以上をもちまして、2日間のシンポジウムを閉会とさせていただきます。皆様のご協力に感謝します。どうもありがとうございました。

資 料 編

資料 1

シンポジウム招へい者一覧

資料 2

報告資料 (パワーポイント)

資料 2-1	基調講演
資料 2-2	講演 1
資料 2-3	講演 2
資料 2-4	講演 3
資料 2-5	講演 4
資料 2-6	講演 5
資料 2-7	講演 6
資料 2-8	講演 7
資料 2-9	講演 8

資料 3

写 真 集

シンポジウム招へい者一覧

1	李家永	中国	北京師範大学
2	高益民		北京師範大学
3	黄欣		北京師範大学
4	梁寧建		華東師範大学
5	徐光興		華東師範大学
6	汪杰		華東師範大学
7	胡建華		南京師範大学
8	傅宏		南京師範大学
9	徐海寧		南京師範大学
10	李蓮淑	韓国	高麗大学校
11	韓龍震		高麗大学校
12	宋眞雄		ソウル国立大学校
13	李炳玟		ソウル国立大学校
14	林家興	台湾	国立台湾師範大学
15	姜逸群		国立台湾師範大学
16	詹志禹		国立政治大学
17	馮朝霖		国立政治大学
18	Edward Vickers	英国	ロンドン大学

国際シンポジウム 2011.12.09
国際的共同学位による新たな人材育成の可能性

アジア共同学位開発プロジェクト Asia Joint-degree Project

（東アジアにおける国際的教育指導者共同学位プログラムの開発研究）

東北大学大学院教育学研究科

プロジェクト・リーダー 教授：本郷一夫

1

共同学位開発の構想

国際水準のアウトカムの質保証

連携大学との協議を通して、大学院教育の質を保証し、質の高い教育指導者を養成する

- 単位認定基準の明確化
- タームペーパー・修士論文の質の共同管理・質保証
- ポートフォリオによる学習歴の管理

研究・教育交流の深化

研究者交流: 研究上の交流に加えて、教育上の交流

- 共同学位プログラムの共同開発により研究者のネットワークが深化する

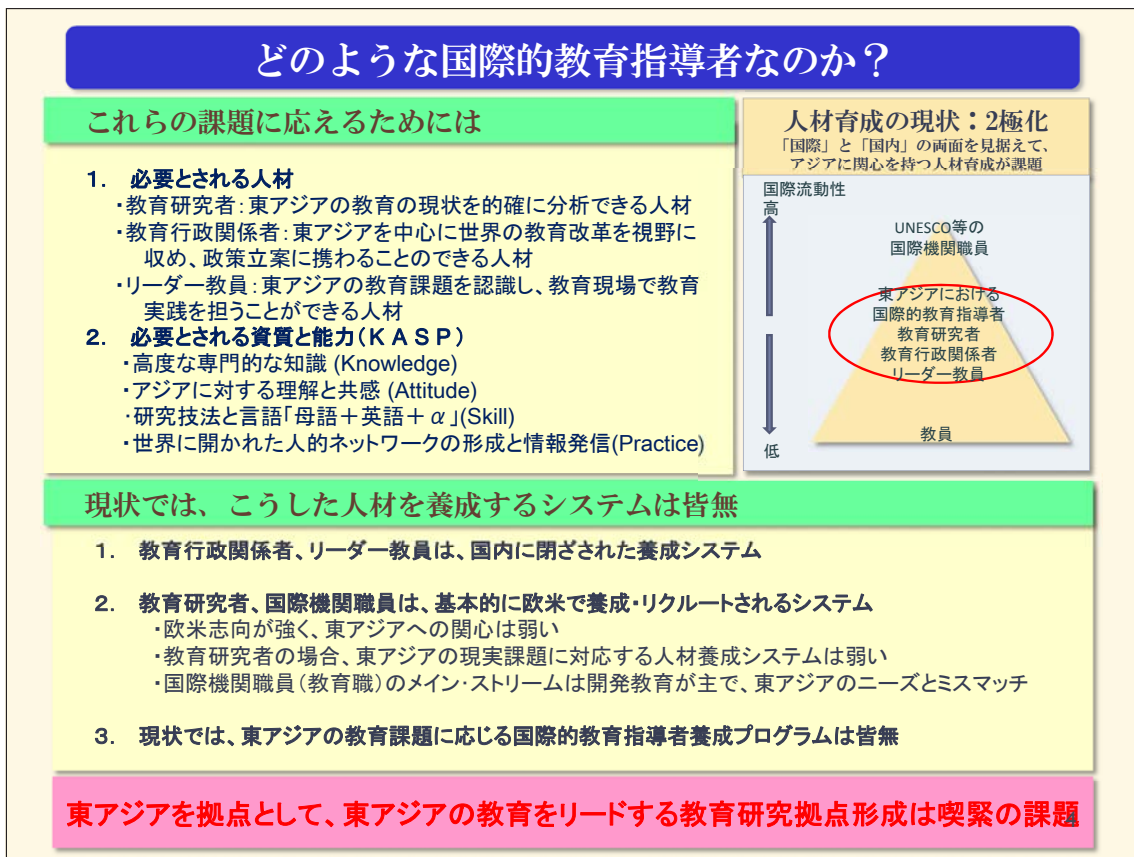
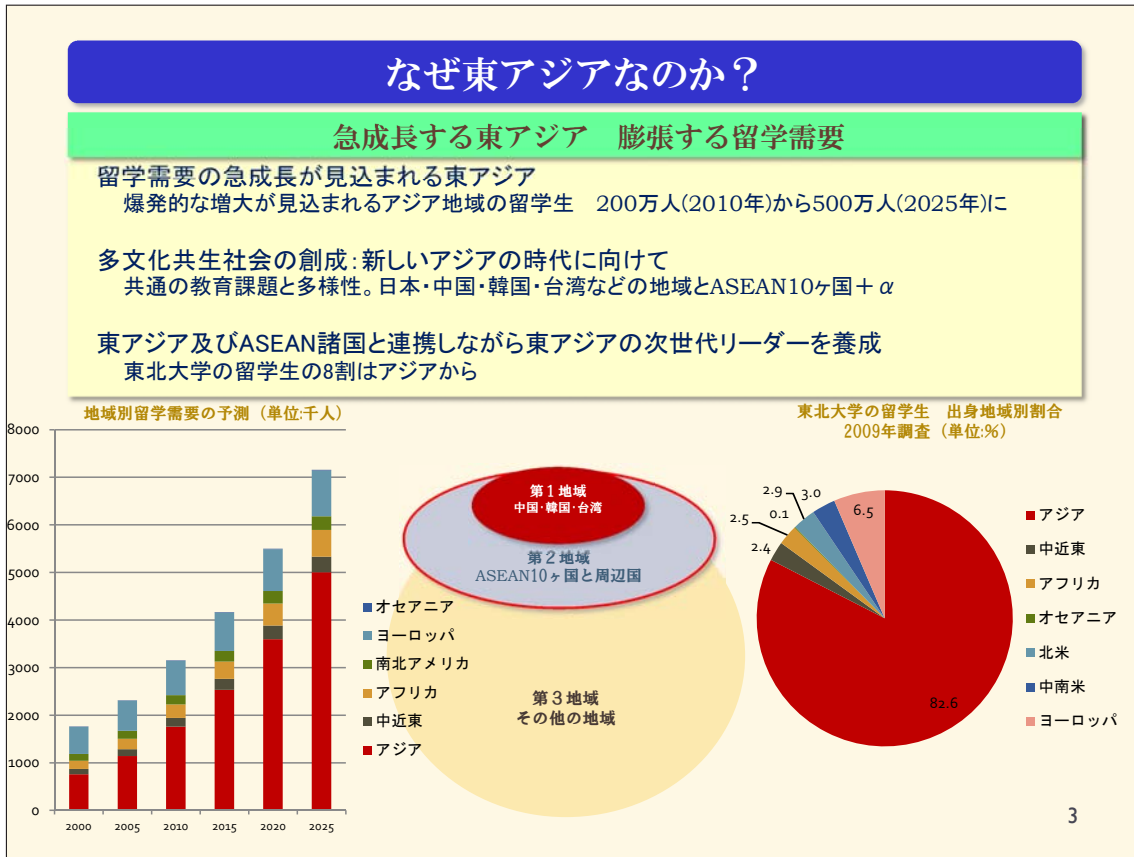
学生交流: 日本人学生の意識変革

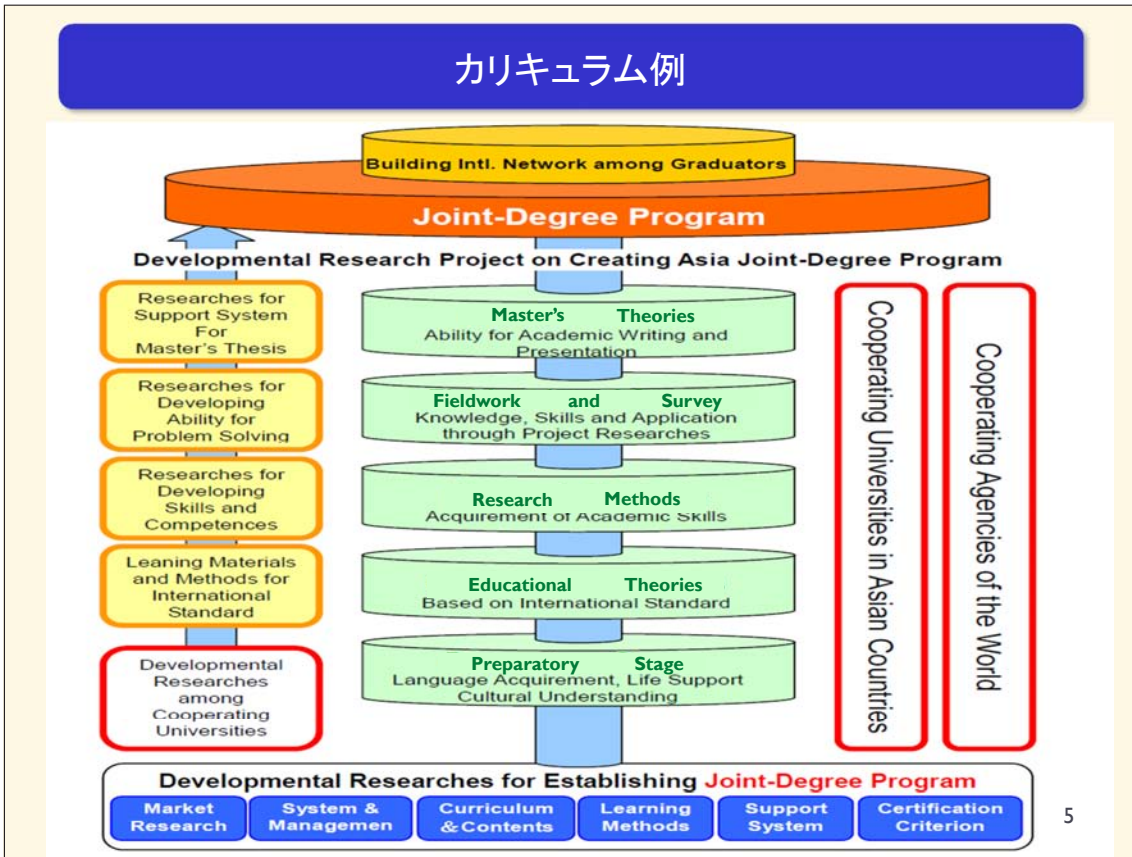
- アジア諸国の学生との共同の学びを通して、世界に目を向ける次世代リーダーを育てる

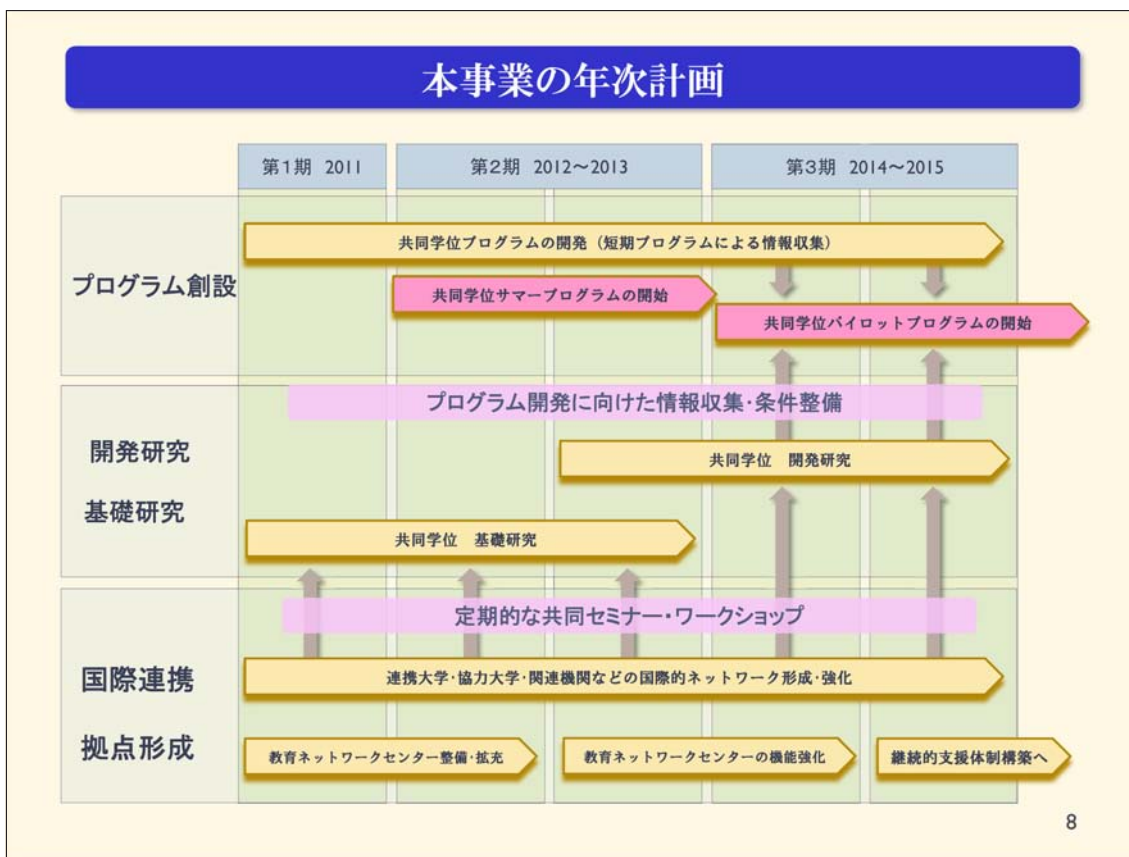
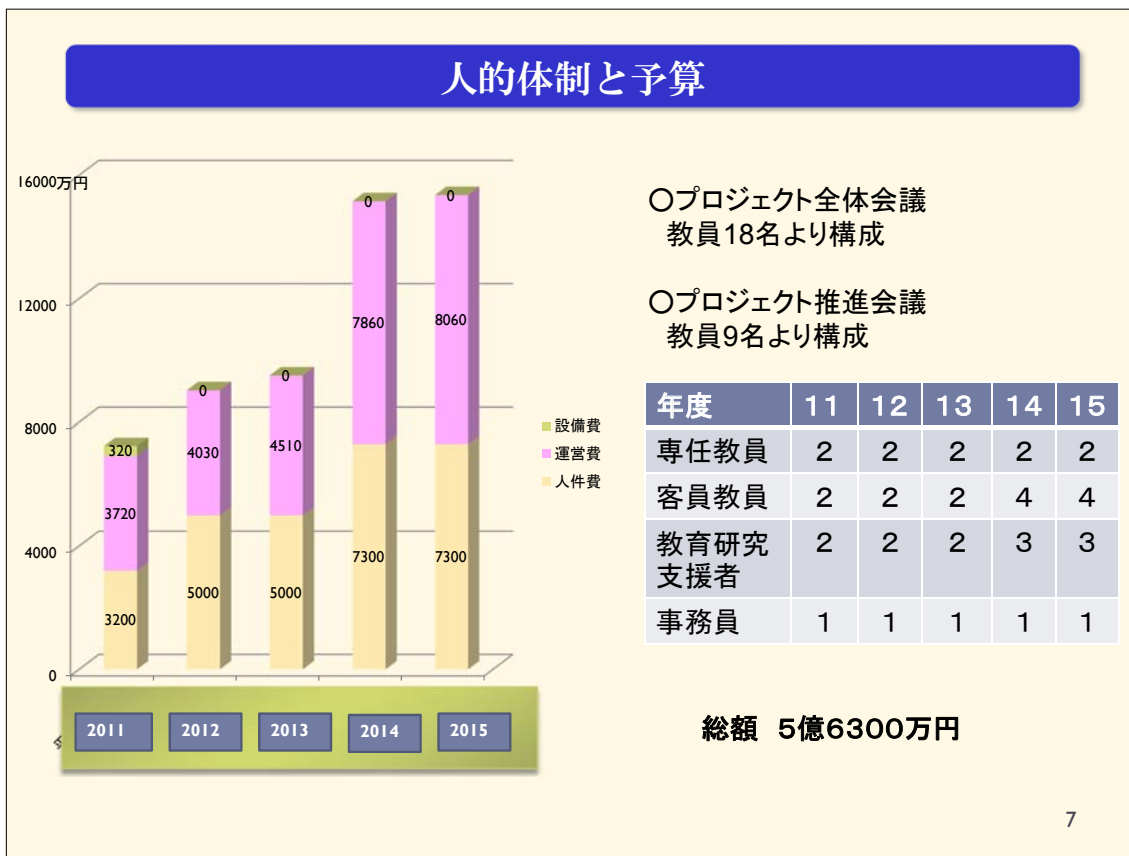
ネットワーク形成: 国境を越えた人的ネットワークの構築

- 人的ネットワークを形成するには、単位互換や短期留学よりも、共同学位が有効

2







予想される研究成果の波及効果

共同学位プログラム開発研究拠点形成による
人的交流の促進・深化・ネットワーク形成

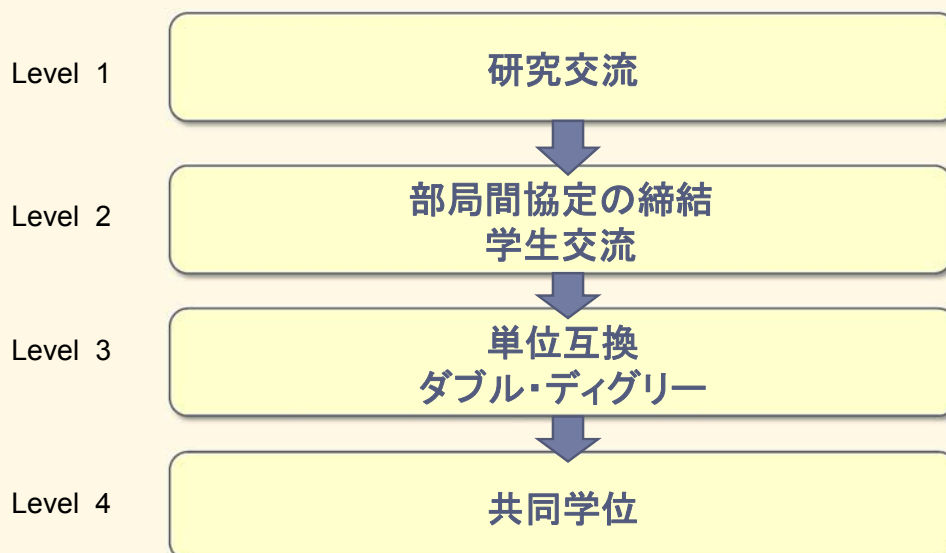
共同学位プログラムによる国際的教育指導者の組織的養成の開始
日本発の東アジア型エラスムス・ムンドゥス計画の実行

日本の高等教育機関の国際的魅力的向上

共同学位創設・運営のノウハウの他研究領域への転移

9

各大学との連携の水準



10



Internationalization Development at BNU and the Faculty of Education

Dr. Li Jiayong
Vice-Dean of BNU Faculty of Education
December 2011



1



- (1) BNU Overview**
- (2) Internationalization at BNU**
- (3) Faculty of Education (FOE) Overview**
- (4) New Strategies at FOE**



2



BNU Overview



3

BNU's Features



- ❖ One of the oldest Chinese universities (1902)
- ❖ Education Science and Teacher Education
- ❖ Research-intensive
- ❖ Comprehensive



4

BNU's Placement



❄ BNU is among:

- 701 Chinese universities (4-years and more)
- 105 State-Project-211 universities
- 72 universities supervised by MOE
- 38 State-Project-985 universities



5

BNU's Placement



Notable Rankings

- from 8th – 20th across different university rankings
- 1st in Education, Psychology, Chinese Language and Literature (2009 MOE ranking)
- 15 disciplines among top 10 (2009 MOE ranking)



6

BNU's Academic Institutions



- ❖ 1 Faculty
- ❖ 24 Colleges and Schools
- ❖ 3 Departments
- ❖ 17 Research institutes and centers



7

BNU's Students



•Full-time: 19543

•Undergraduate: 8611

•Graduate: 9900

•Part-time students:31649

•International: Long-term:1776



www.bnu.edu.cn

8

BNU's Faculty and Staff



- ❖ **Faculties: 1681**
- ❖ **170 faculties received PhD degree from foreign universities**
- ❖ **Professors: 602, Associate Professors: 610**
- ❖ **Academicians of Science and Engineering: 19**

www.bnu.edu.cn

9

BNU's Academic Programs



- ❖ **100 Doctoral Programs**
- ❖ **162 Master Programs**
- ❖ **55 Bachelor Programs**
- ❖ **18 Post-doctoral Programs**



10

BNU's Academic Strength



Chinese
History
Education
Psychology
Mathematics
Geography
Biology
Environmental studies



11

Internationalization at BNU



12

BNU's Internationalization



International sister universities:

300 plus in 34 countries and regions.

International visiting scholars:

400-450/year

Faculties going abroad:

1000/year



13

Confucious Institutes

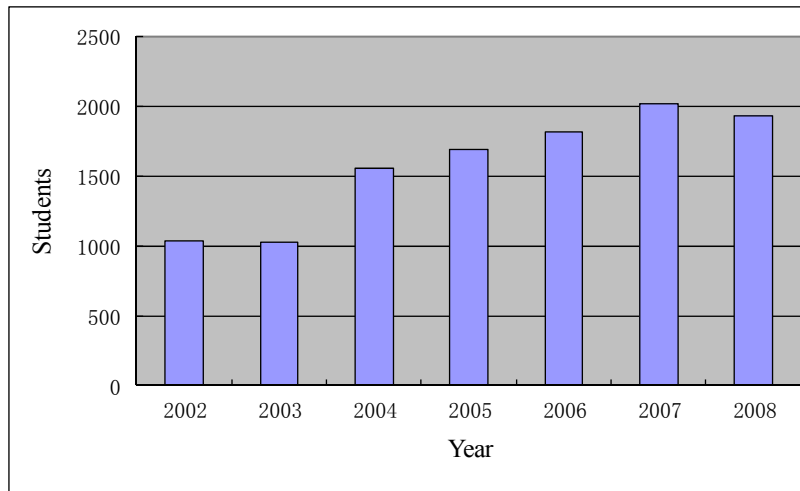


- ❖ The University of Manchester, UK
- ❖ San Francisco State University, USA
- ❖ The University of Oklahoma, USA
- ❖ University de Sherbrooke & Dawson College, Canada
- ❖ Aalborg University, Denmark
- ❖ Università di Macerata, Italy (planning)
- ❖ College of William and Mary, USA (planning)



14

BNU's International Students



Since 2002, BNU's International Students population has a substantial increases. Now it is stabled around 2000.



15

English-Taught Master Programs



Educational Management and Leadership

Faculty of Education

Environment Science and Technology

School of Environment

World Economy and China

School of Economic and Business Administration



16

English-Taught Master Programs



Contemporary Development of China

All courses are taught in English by top Chinese and foreign scholars of development studies, and by high-level Chinese policymakers in their relevant fields.

This program aims at fulfilling the educational goal of training future policymakers, scholars and practitioners of social development and public policy.

We want to end the poverty
We want more social justice
We want economic growth focus on improving
human well- being
We want...

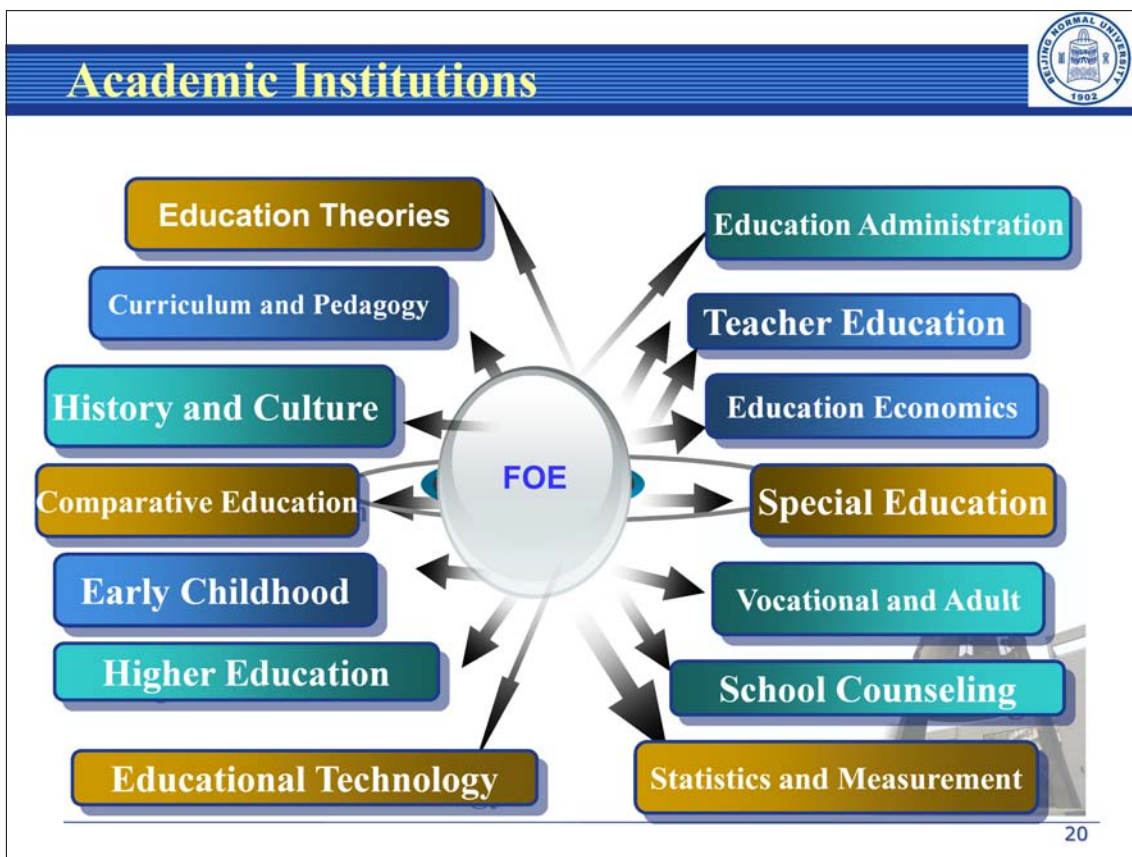
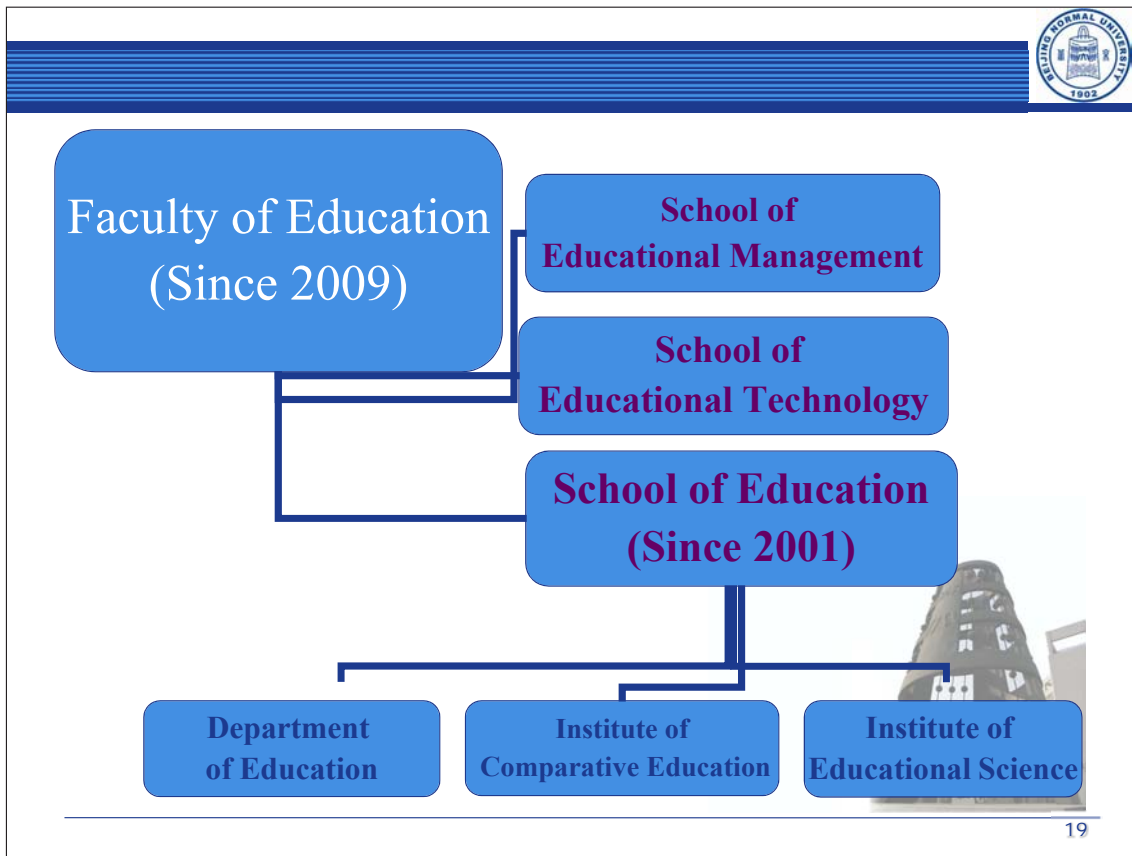


17

Faculty of Education (FOE) Overview



18



FOE Data



- ◆ 220 Teachers
- ◆ 50 Administrators
- ◆ 601 Undergraduates Students
- ◆ 1531 Master Degree Students
- ◆ 245 Doctoral Students
- ◆ 92 International Students



21

Undergraduate Programs



- 1 Education Science
- 2 Education Leadership
- 3 Early Childhood Education
- 4 Special Education
- 5 Education Technology



22



Master Programs (16)

- ◆ Principles of Education
- ◆ Curriculum and Pedagogy
- ◆ History of Education
- ◆ Comparative Education
- ◆ Early Childhood Education
- ◆ Higher Education
- ◆ Adult Education
- ◆ Vocational and Technological Education
- ◆ Special Education
- ◆ Educational Economy and Management
- ◆ Education Technology
- ◆ School Counseling
- ◆ Teacher Education
- ◆ Media Education
- ◆ Distance Education
- ◆ Computer Software and Theories



23



Doctor Programs (13)

- ◆ Principles of Education
- ◆ Curriculum and Pedagogy
- ◆ History of Education
- ◆ Comparative Education
- ◆ Special Education
- ◆ Early Childhood Education
- ◆ Higher Education
- ◆ Vocational and Technological Education
- ◆ Educational Economy and Management
- ◆ Education Technology
- ◆ Education Policy Studies and Education Law
- ◆ Teacher Education
- ◆ Rural Education



24

Professional periodicals



- ★ **Comparative Education Review**
- ★ **Journal of Education Studies**
- ★ **Teacher Education Research**
- ★ **Chinese Teacher**



25

New Strategies at FOE



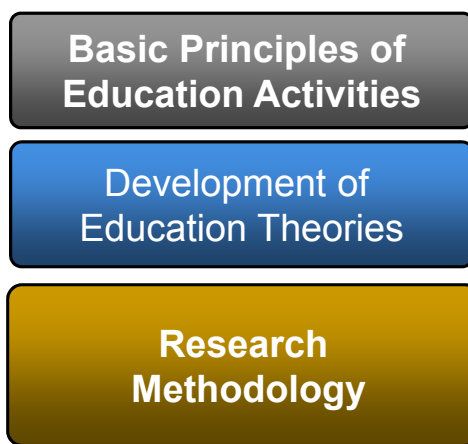
26



APIC Model



27



28



- Legal and Ethical Requirement
- Professional Expertise
- Reflections and Actions
- Cooperation and Leadership



- Sensitivity
- Rational and Critical
- Truth Pursuit





International Awareness

Appreciation of Other Cultures

Communication And Dialogue



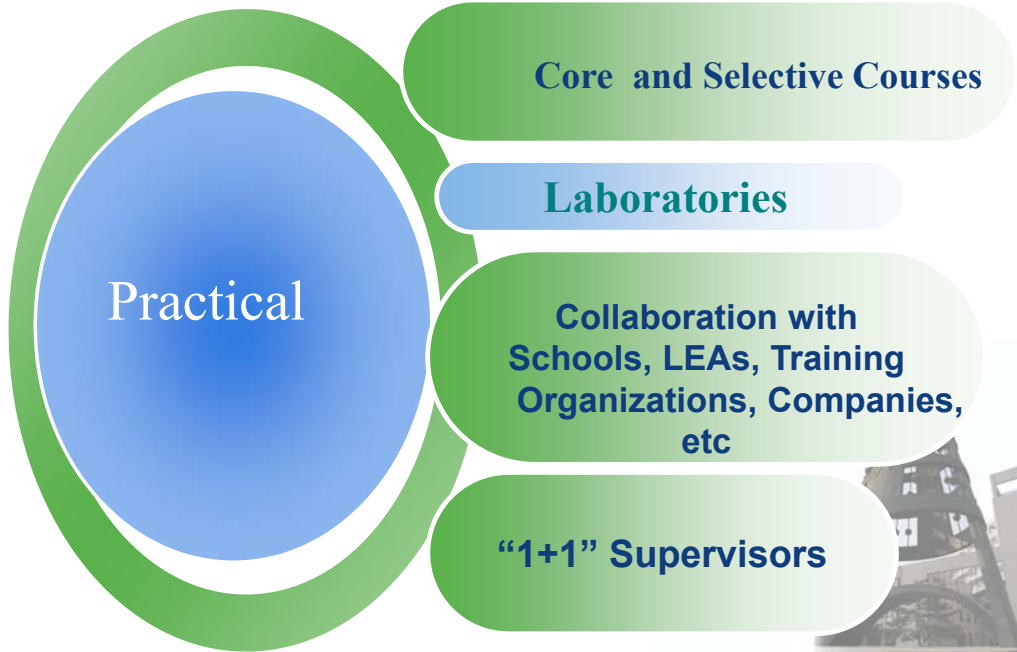
A Indicator for admission

Core Academic Courses

“Must Read” List

Academic Seminars and salons







Thank you !



国际化进程中 培养具有共同学位新人才的探究

—— 以华东师范大学研究生教育为实例



华东师范大学心理与认知科学学院

徐光兴
梁宁建
刘永芳

1



中国的大学院研究生教育

特征一： 国家、地方，学位授予单位（大学）
实行多层次管理与调控

特征二： 高速发展与质量并举的教育趋势

国际化教育的标志：

1988年以来，中国与世界上15个国家签订了
政府间相互承认学历、文凭和学位的协议。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

2





华东师范大学的研究生教育



留学生楼



丽娃河

研究生的培养机制：

学科发展，知识创新，文化传承，社会服务，
资源增生（知识与人才的新生）。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

3



培养具有共同学位的新人才



浦东陆家嘴·金融中心地

华东师范大学与美国的纽约大学在上海浦东，
合作建立一所国际型的大学。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

4



培养机制与教育模式的新发展

主要模式

- 1、本科生和研究生教学管理的一体化（优秀本科生免试，直升研究生学习；本硕博打通的培养模式）
- 2、减少学术型人才培养规模，加强应用型、专业型人才的培养
- 3、加强对研究生科研资金和奖学金发放的投入
- 4、积极招收世界各国的留学生，选派本校优秀研究生去国外大学进修深造



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

5



从“精英教育”到“专业人才”的教育



研究生听讲座

华东师范大学心理与认知科学学院第一届MAP心理学研究生在听课学习中。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

6



研究生教育的“双向交流”



校园里的外国留学生

华东师范大学校园里的外国留学生



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

7



研究生教育的国际“双向交流”



中国留学生在国外

华东师范大学的优秀研究生在国外一流的大学中学习、深造。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

8





心理健康专业的教育硕士培养

特点

以多样化取代单一化

以个性化取代统一化

以弹性化取代一体化



分层次、渐进式、全方位的教育培养



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

9



课程建设与设置的基本原则

- 1、体现基本性：**是心理学科中最基本的，不可或缺的重要内容。
- 2、体现整合性：**有利不同学科领域知识的融汇贯通。
- 3、体现时代性：**具备时代特色，反映学科新成果、新发展趋势。
- 4、体现特色性：**课程反映我校心理学院学科专业特色和优势。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

10





培养“社区中心型”的教育人才



社区心理咨询

在社区开设“科学商店”进行咨询，学以致用。



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

11



案例教育 与 实验教学

培养国际性共同学位的新人才



跨文化、多元文化的学习、交流、合作



文化适应

案例教育

实验教学



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

12





国际教育的合作与交流： 与早稻田大学的案例研讨



与日本早稻田大学师生交流研讨



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

13



未来的课题 与 挑战

培养持有 **国际** **共同** 学位新人才



- 1、**课程建设**与**课程设置**
(各国的文化发展与社会需求)
- 2、使用什么样的教材？
(“双语”或“三语”的可能性)
- 3、最重要的资源 —— 教师的培养和力量



华东师范大学研究生院
GRADUATE SCHOOL OF EAST CHINA NORMAL UNIVERSITY

www.yjsy.ecnu.edu.cn

14





**感谢各位专家、学者的
聆听与支持！**

完



南京师范大学教育学科 专业学位研究生培养现状与国际化思考

Current Condition of Education for Professional Degrees at Nanjing
Normal University and Its Implication for Internationalization

December, 2011

2011年 12月

1



培养现状

Current Condition of Our Ed.M (Master of Education)
Education

愿景与国际化思考

Our Vision for the Future and Internationalization

2

培养现状

1、 Our Current Ed. M Education



南京师范大学坐落在中国的六朝古都南京，是江苏省属重点大学。它的主源可追溯到1902年创办的三江师范学堂，1984年改办成南京师范大学。1996年进入国家“211工程”重点建设高校行列。目前，学校正在积极创建“综合性强，办学特色鲜明，中国一流的教学研究型大学”，并为今后建成具有一定国际影响的中国高水平大学奠定坚实基础。



 **NNU · 南京师范大学**
NANJING NORMAL UNIVERSITY

学校专业学位教育总体情况

General Information about Our Education for Professional Degrees

南京师范大学是中国高等师范教育的发祥地之一。百年历史，大师辈出，文化浓郁。

					
李瑞清	郭秉文	陈鹤琴	陶行知	吴贻芳	唐圭璋
					
李旭旦	陈邦杰	高觉敷	傅抱石	张大千	徐悲鸿

5

 **NNU · 南京师范大学**
NANJING NORMAL UNIVERSITY

相关学科建设情况 A List of Related Disciplines

国家重点学科 6 个 (含教育学原理、学前教育学) Six National Key Disciplines (including Pedagogic Principles and Preschool Pedagogy)

国家重点 (培育) 学科 3 个 (含课程与教学论) Three Key Disciplines Under National Support (including Curriculum and Teaching Methodology)

江苏省一级学科重点学科 7 个 (含教育学、心理学) Seven Jiangsu Provincial First Rank Disciplines (including pedagogy, Psychology)

江苏省重点学科 21 个 Twenty-one Jiangsu Provincial Key Disciplines

博士学位授权一级学科 22 个 Twentytwo First Rank Disciplines that Authorizing Doctor Degrees

博士后科研流动站 10 个 Ten Centers for Postdoctoral Studies

----It is one of the best among the local colleges and universities in China

6



专业学位教育发展历程 Timeline for the Evolution of Our Education for Professional Degrees

- 1996年成为教育硕士培养单位，是中国首批试办教育硕士专业学位教育的16所高校之一。
- 2003年成为法律硕士培养单位。
- 2005年成为艺术硕士培养单位，是中国首批举办艺术硕士专业学位教育的试点单位之一。
- 2007年成为汉语国际教育硕士培养单位，是中国首批举办汉语国际教育硕士专业学位教育的试点单位之一。
- 2009年成为全国首批举办教育博士专业学位教育的15所高校之一，同时成为体育硕士、翻译硕士、工商管理硕士培养单位
- 2010年开始招收2年制应用心理学硕士
- 现有7个专业学位授权，累计招收专业学位研究生 5788名。

7



研究生专业学位情况一览 A List of Professional Degrees Under Our Graduate Education

已有专业学位名称	获得授权时间	2009年招生数		2009年授予学位数
		单证	双证	
教育博士 Ed. D.	2010年			
教育硕士 Ed. M.	1996年	400	249	865
法律硕士 M. L.	2003年	135	143	202
艺术硕士 MFA	2005年	55	0	46
汉语国际教育硕士	2007年	27	66	0
体育硕士 MFA	2009年			
翻译硕士 MTI	2009年			
工商管理硕士 MBA	2009年			
应用心理学硕士 M Psy.	2010年			

8



教师队伍构成 Faculty

专业方向	教授	副教授	讲师	其中博士	合计
教育管理、小学教育、科学技术教育	18	7	6	26	31
课程与教学(含11个学科方向)	19	14	12	25	45
心理健康教育/应用心理学	12	13	6	18	31
现代教育技术	6	9	11	8	29
合计	55	43	35	76	133

10

近三年招生及授予学位情况

Admission of Students and Degrees Awarded in Recent Three Years

Year	招生数 Admission		授予学位数 Degrees Awarded
	单证 Single Degree	双证 Double Degrees	
2007	598		218
2008	500		453
2009	400	249	865

11

核心专业课程设置情况

Core Courses

课程 Courses	
思想政治教育原理研究	教育学原理
英语教学设计与案例分析	教育科研方法
历史课程研究	教育心理学
中学数学教学行动研究	现代教育技术
现代物理与中学物理	教育管理学
化学教学实验设计与研究	小学课程与教学原理
生物实验教学进展	信息技术与课程整合
现代地理教育技术	技术教育原理
后现代音乐教育	科学课程与教学原理
体育科学理论与方法	儿童心理咨询与治疗
美术课程与教学论	语文教学论研究

12

实习实践课程基本情况

Internship Programs

实习实践基地类别	基地数	参加学生人数	占同届学生比例	学时数	指导教师数
政府部门(教育局)	2	114	6.5%	80学时/年	12人/年
事业单位(学校)	21	1605	91.9%	80学时/年	39人/年
自建基地	2	180	10.3%	80学时/年	8人/年

*表中数据根据2007-2009年教育硕士招生人数统计

13

学生参加实习实践项目分类统计

Specific Types of Internship Programs

(参加人数占总人数的百分比 Percentage of Students That Involved)

实习实践类型	参加人数	所占比例
参与科研或工程项目	717	41%
技术岗位锻炼(专业教学)	1605	91.9%
管理岗位锻炼	114	6.5%
案例模拟训练	1050	60.1%
其他实践形式	265	15.2%

*表中数据根据2007-2009年教育硕士招生人数统计

14

十多年来，我校已先后培养教育硕士近 3000 人，他们已经成为江苏省以及部分邻近省教育的骨干力量，不少人已经成为名师、名校长，还有许多人也已成为名师、名校长的后备人选。

Over the recent ten years, there have been approximately 3000 postgraduate students graduated from our university. Most of them are now playing an important part in the provincial education system as well as those of the nearby provinces. Quite a few of them have become famous teachers and headmaster and more are going to be.

15

教育硕士教学获奖

National Awards for Our Faculty、Students and Staffs

- 全国首届教育硕士优秀教师 3人 Three teachers entitled as excellent teachers for Ed.M Education in the first national election
- 全国首届教育硕士优秀学位论文 3篇 Three essays entitled as excellent papers for Ed.M Education in the first national election
- 全国首届教育硕士优秀学员 5人 Five students entitled as excellent graduates for Ed.M Education in the first national election
- 全国首届教育硕士优秀管理工作 1人 One staff entitled as an excellent administrator for Ed.M Education in the first national election
- 全国首届教育硕士优秀教学管理工作 1人 One staff entitled as an excellent member for Ed.M Education Management in the first national election

16



NNU · 南京师范大学
NANJING NORMAL UNIVERSITY

2、愿景与国际化思考

2、 Our Vision for the Future and Internationalization

18



(1) 整体构想 (1) Our Overall Conception

立足本土、面向世界、培养一批适应社会发展需要的高水平的未来教师和教育管理者。

Our education is based on our traditional culture as well as opening to the world so as to cultivate qualified graduates for future teachers and administrators that contribute to the society.

19



(2) 培养模式构想 (2) Our Conception for Graduate Training

教育硕士学位是针对“特定教育职业背景”、主要培养面向基础教育的“应用型高层次人才”的专业性学位。其核心在于目标定位，重点在于培养模式创新，难点在于质量保证。

20

- 以结构性为特征的目标体系
A Structured Education System
- 以多元化为特征的培养机制
Diversification in Graduate Training
- 以适应性为特征的课程结构
Courses that Adapt to the Market and Society
- 以应用性为特征的实践教学
Practical Training that Aims at Skills of Application
- 以应用性为特征的实践教学
Multiple Approaches for Graduate Thesis

21

培养目标 Goals For the Outcome of Our Education

Top in the field: 一线优秀教师、业务骨干、高层管理人员

High-qualityies: 良好理论素养、优秀创新品质、强劲探究能力

High-level skills: 充满智慧的教育教学及管理实践问题解决技能

High-level personalities: 健全的人格、积极的心态、对事业的追求

22



培养方案 Training Programs

以实际应用为导向，以职业需求为目标，创立教育硕士的多元培养机制，突出专业学位研究生教育的特色：

- 探索实施对两年制全日制教育硕士根据专业方向特点和学生原有基础采取“1+1”“1.5+0.5”两种不同培养模式，以强化现场学习或教育实习与实践，增长实际工作经验。
- 在确保学生在本校学习时间不得少于一年的前提下，探索实施国际交换学生，和双学位制度。

23



课程结构 Course Structure

根据各培养方向的特点和培养规律，从真正提高学生的实际教学水平出发，在调整课程体系内减少必修课的比重，增加方向特色课和选修课程，增设案例分析、教改前沿介绍、经典名著导读、优秀教师经验研讨、特色技能学习等微型课程，同时在多数课程中增设实践环节，强化观摩教学和案例教学。

同时，在条件成熟的情况下，通过与不同国家和地区交换导师，开设其它国家教育、文化相关课程等方式，拓宽研究生的视野。

24

教育硕士课程模块 Curriculum Modules for Ed.M

- **Basic Courses:** 拓展理论基础，把握学科前沿；
- **Methodology:** 谙熟研究规范、生成研究主题；
- **Research Projects:** 透析教育问题、更新教育理念；
- **Internships and Practices:** 开拓国际视野，反思教育行为。

25

教学方式 Teaching Approaches

- **Study Groups :** 加强对话研讨，分享教育智慧。
- **Seminars:** 追踪重大问题，服务政府决策。
- **Field Study:** 聚焦教育热点，把握发展动向。
- **Case Study:** 剖析经典事例，提升理论思维。
- **Action Research:** 反思教育理念，推动学校变革。
- **Cross-cultural Comparison:** 相互借鉴，开拓视野，共同发展。

26



培养方式 Supervisors

根据一定程序和一定要求，面向教育实践领域遴选部分优秀的教师、校长等作为教育硕士的指导教师，每位教育硕士均同时配备一位来自大学的指导教师和一位来自实践第一线的指导教师，并将其两方面的指导教师组成一个指导小组对教育硕士实施指导。

对全日制教育硕士，如在心理健康教育、科学技术教育等专业方向试行岗位特色技能的证书培养尝试，如“心理咨询师”“CAD设计”“数控技能”证书等，努力提高其相关专业技能。

27



论文答辩 Graduate Thesis

在论文环节方面，进一步改变学术性论文取向，在坚持基本的学术道德、学术规范的同时，倡导案例分析、调查报告、实验设计、项目规划、产品开发、教学反思、技能展示等多种形式。

同时在条件允许的情况下，适度创新答辩形式，可以通过电视、电话会议形式，邀请多个国家的教授共同参与（或相互观摩）论文答辩或学生的实践展示等活动。

28



协作制度 Committees and Collaborations

- (1) 建立联席会议制度。建立由相关国家和地区教育行政部门领导及大学教师代表组成的教育硕士学位教育联席会议制度，定期研究和讨论教育硕士学位教育相关的理论与方法、问题与对策，有效推动教育硕士培养的国际化发展。
- (2) 通过相互交流、访问，发现差异，寻求合作。可以对包括教育硕士生培养、教育实践活动及其管理制度等各方面进行交流。
- (3) 从具体的交换课程开始，逐步发展到共同培养和共同学位制度。

29



南京师范大学作为一所师范历史悠久、教育学科优势突出的百年老校，**愿为、能为、也应为**这一探索性的工作做出应有贡献！

Nanjing Normal University is an old school with a long history which specializing in education. It is our duty to try our best in contributing to the field of education for professional degrees. We are willing to as well as capable to undertake this task.

30



NNU · 南京师范大学
NANJING NORMAL UNIVERSITY

感谢大家 Thank you!



31

International Symposium Tohoku University

Exchange and Study Abroad at Korea University



International Symposium Tohoku University

Contents

- 1 Student Mobility: Outgoing & Incoming
- 2 Introduction of Korea University
- 3 Internationalization of Korea University
- 4 Fostering Global Leaders of Education

1-1. Student Mobility: Outgoing

Outgoing Exchange	2006	2007	2008	2009	2010
Graduate School	36,220 ↑	41,993 ↑	36,969 ↓	37,468 ↑	40,579 ↑
Undergraduate	77,515 ↑	81,972 ↑	90,361 ↑	107,112 ↑	112,273 ↑
Language Course	76,629 ↑	93,994 ↑	89,867 ↓	98,644 ↑	99,035 ↑
Total	190,364 ↑	217,959 ↑	216,867 ↓	243,224 ↑	251,887

Countries	USA	China	Japan	Australia	U.K.	Total
2006	57,940 ↑ 30.4% ↑	29,102 ↑ 15.3% ↑	15,158 ↓ 8.0% ↓	16,858 ↑ 8.9% ↑	18,845 ↓ 9.9% ↓	190,364 100%
2010	75,065 ↑ 29.8% ↓	64,232 ↑ 25.5% ↑	27,965 ↑ 11.1% ↑	17,829 ↑ 7.1% ↓	17,275 ↓ 6.9% ↓	251,887 100%

3

1-2. Student Mobility: Incoming

Incoming Exchange	2007	2008	2009	2010
China	33,650 (68.3%)	44,746 (70.0%)	53,461 (70.5%)	57,783 (68.9%)
Japan	3,854 (7.8%)	3,324 (5.2%)	3,931 (5.2%)	3,876 (4.6%)
Mongolia	1,309 (2.7%)	2,022 (3.2%)	2,724 (3.6%)	3,333 (4.0%)
USA	1,388 (2.8%)	1,481 (2.3%)	1,898 (2.5%)	2,193 (2.6%)
Vietnam	2,242 (4.6%)	1,817 (2.8%)	1,787 (2.4%)	1,914 (2.3%)
Taiwan	1,047 (2.1%)	1,158 (1.8%)	1,256 (1.7%)	1,419 (1.7%)
The others	5,780 (11.7%)	9,404 (14.7%)	10,793 (14.2%)	13,324 (15.9%)
Total	49,270 (100%)	63,952 (100%)	75,850 (100%)	83,842 (100%)

4

1-3. Student Mobility: National Plan

Plan for Attracting Inflow	Target Year	Number of foreign Students
Study in China (2010)	2020	500,000
Study in Taiwan (2010)	2020	430,000
300,000 International Students Plan/ 留学生30万人計画 (2008)	2020	300,000
Study in Korea (2010)	2012	100,000

5

1-4. Student Mobility: International MOU

- **CAMPUS Asia** (Collective Action for Mobility Program of University Students in Asia: 2011.4.) : contribute to strengthening the competitiveness of universities and nurturing the next generation
- **Asia-Pacific Regional Convention on the Recognition of Qualifications in Higher Education** (1983, Revised 2011.11.) : found the NIC (National Information Center) to promote the students mobility, Assessment for Recognition

6

2-1. Introduction of KU: History



- **1905 Bosung College(普成專門學校) founded** : the belief of “Education Saves the Nation (教育救国)”
- **1946 Established as a University & Renamed as Korea Univ.(高麗大学)**
- **2005 Celebrated its Centennial in May 5th (民族高大百年)**
- **2011 present: Global KU towards the New Millennium (世界高大千年)**

2-2. Introduction of KU: Brief Facts

- **# of Students (about 39,000)**
 - 24,845 (Undergraduate)
 - 9,509 (Graduate)
 - about 4,000 (Multicultural Students)
- **# of Faculty : 3,043 persons**
 - including 1500 full-time members
- **# of Admin Staff : 483 persons**
- **# of Educational Institution**
 - Departments : 81
 - College & Division: 20
 - Graduate School: 22
 - Research Institution: 120
- **Courses in English: 35%**



2-3. Introduction of KU: Infrastructure

• Exceptional campus facilities :

- * Main Library, Centennial Digital Library (CDL), Graduate School Library etc.,
- * Centennial Memorial Hall, * KU Museum * LG-POSCO Hall
- * Korean Studies Hall * CJ-International House * Hana Square
- * Hwajeong Tiger Dome (Gym.) * Ice Rink (Olympic-sized)

• Support Center for Handicapped Students

- University Life Assistant, Learning Supporters, Scholarship
- Underground Parking Lot (Except shuttle bus on ground)
- Braille Name Card (点字名刺)

• Wireless Lan Campus (WiFi Zone)

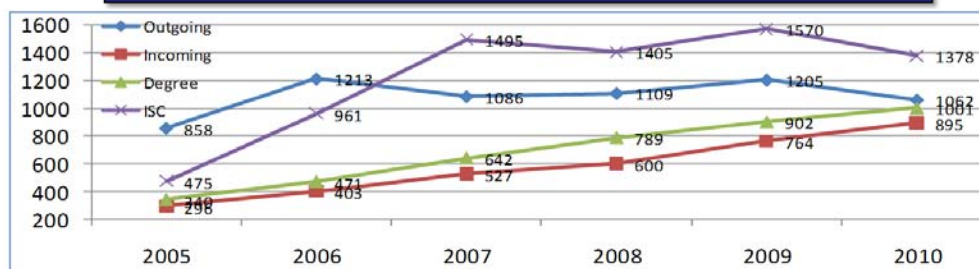


9

2-4. Introduction of KU: Student Mobility

	2005	2006	2007	2008	2009	2010
Outgoing Exchange	858	1,213	1,086	1,109	1,205	1,062
Incoming Exchange	296	403	527	600	764	895
Degree Seeking	340	471	642	789	902	1,001
Int'l Summer Campus	475	961	1,495	1,405	1,570	1,378

Student Mobility at Korea University (2005 ~ 2010)

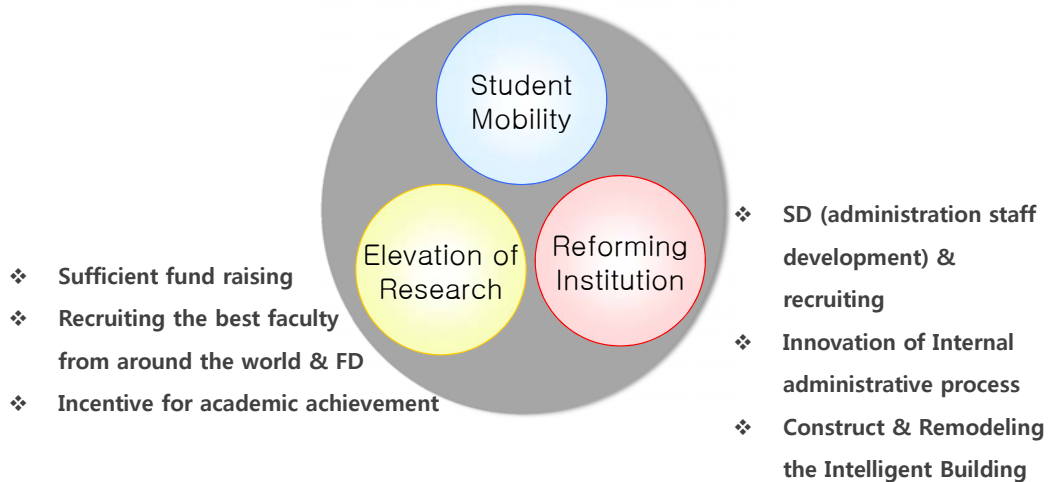


10

3-1. Internationalization of KU

Strategies

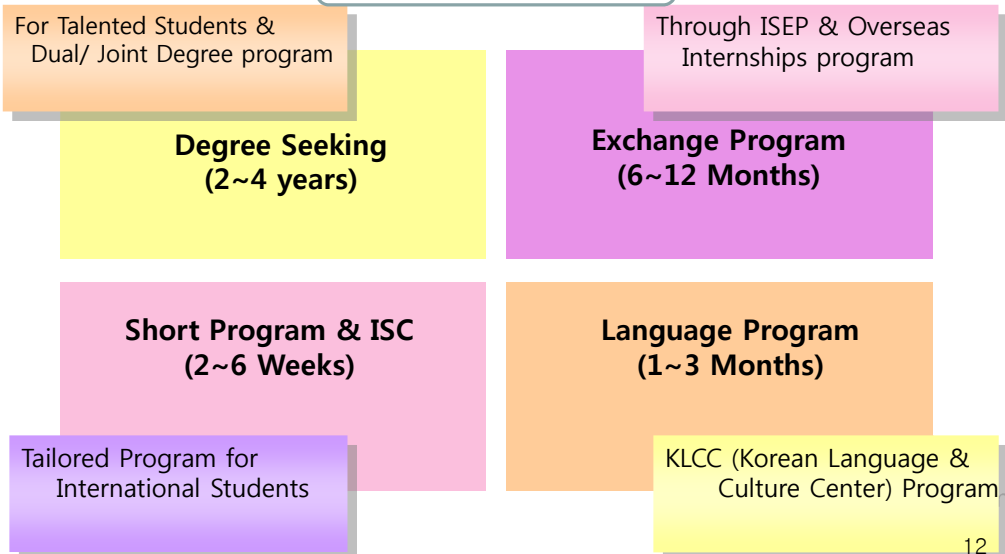
- ❖ Enhancing & promoting the student exchange
- ❖ Attracting quality degree-seeking int'l students
- ❖ Offering the Scholarship & Mentorship system



11

3-2. Internationalization of KU

Student Mobility



12

3-3. Internationalization of KU

Degree Seeking: Research & Education

- **Dual Degree (複数学位制)**

-S3 ASIA MBA : Fudan U. (Shanghai) + KU (Seoul) + Singapore National University (3 semester course) / KU MBA & OSU Business School (2009)

-CAMPUS Asia Program: Waseda Univ., Korea Unive., Beijing Univ., Thammasat Univ(Thailand), Nanyang Technological University(南洋理工大学: Singapore)

- **APRU (Association of Pacific Rim Universities: 環太平洋大学協會)**

-Consortium of 42 leading universities from 16 economies in the Pacific Rim

- **U21 (Universitas 21 Global : 2001) : for E-Learning esp. E-MBA**

-Graduate School Consortium of 23 leading universities from 15 countries

- **BK21 (Brain Korea 21), WCU (World Class University) Program:**

Korea University now focuses on investing in the general graduate school to make it a fully research-centered institute through the Global Project.

- **KU Open CourseWare** is different from Distance Education in that it does not offer credits or interaction with professors. - <http://ocw.korea.ac.kr/>

List of University Consortium

APRU (42 leading Universities)

Australia: Australian National U., U. of Melbourne, U. of Sydney / **Canada:** U. of British Columbia / **Chile:** U. of Chile / **China:** Fudan U., Hong Kong U. of Science and Technology, Nanjing U., Peking U., Tsinghua U., U. of Hong Kong, U. of Science and Technology of China, Zhejiang U. / **Chinese Taipei:** National Taiwan U. / **Indonesia:** U. of Indonesia / **Japan:** Keio U., Kyoto U., Osaka U., Tohoku U., U. of Tokyo, Waseda U. / **Korea:** Korea U., Seoul National U. / **Malaysia:** U. of Malaya / **Mexico:** National Autonomous U. of Mexico, Tecnológico de Monterrey / **New Zealand:** U. of Auckland / **Philippines:** U. of Philippines / **Russia:** Far Eastern National U. / **Singapore:** National U. of Singapore / **Thailand:** Chulalongkorn U. / **USA:** California Institute of Technology, Stanford U., U.C. Berkeley, U.C. Davis, U.C. Irvine, U.C. Los Angeles, U.C. San Diego, U.C. Santa Barbara, U. of Oregon, U. of Southern California, U. of Washington

U21 (23 Universities)

Australia: U. of Melbourne, U. of New South Wales, U. of Queensland
Canada: U. of British Columbia, McGill U.
China: Fudan U. Shanghai Jiao Tong U.
Hong Kong: U. of Hong Kong
India: Delhi University
Ireland: University College Dublin
Japan: Waseda University
Mexico: Tecnológico de Monterrey
The Netherlands: Univ. of Amsterdam
New Zealand: University of Auckland
Singapore: National Univ. of Singapore
South Korea: Korea University
Sweden: Lund University
UK: U. of Birmingham, U. of Edinburgh, U. of Glasgow, U. of Nottingham
USA: U. of Connecticut, U. of Virginia

3-4. Internationalization of KU

Exchange & Short Program

- **Student Exchange Programs (SEP)**
 - ISEP (International Student Exchange Program) includes 292 member institutions,
 - Overseas Internships Open Only to KU Students, Foreign Language 7+1 program
- **International Summer Campus (ISC)** : provides an excellent opportunity for students to learn about Korea through academic and cultural immersion during the summer months. – <http://isc.korea.ac.kr/>



* <http://oia.korea.ac.kr/>⁵

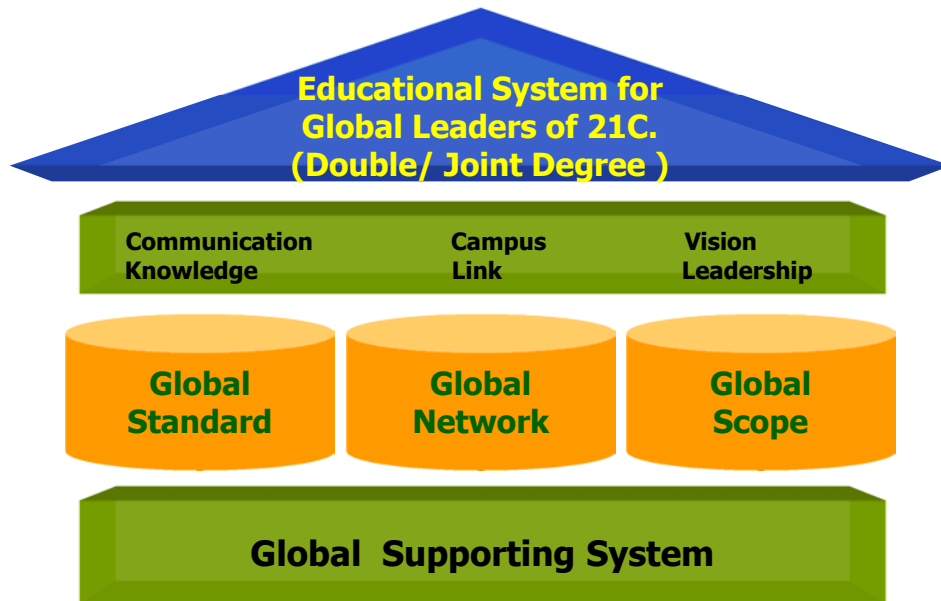
3-5. Internationalization of KU

Language & Supporting Program

- **Korean Language & Culture Center of KU (KLCC)** was established on March 1, 1986. Currently KLCC is receiving some 3,000 students every year
- **KUBA (Korea University Buddy Assistant)** : a One-on-One Buddy Program Between International and KU Students (no credits)
- **IOSSC (International One Stop Service Center)**
 - Administrative Support for International Students



4-1. Fostering Global Leaders of Edu.



4-2. Fostering Global Leaders of Edu.

Global Standard: English authentication

College/Department	TOEIC	PBT	CBT	IBT
International Studies	-	-	237	93
Business Administration	800	560	230	88
Law, Political Science & Economics, Medicine, Media	750	560	220	83
Liberal Arts, Science, Education	650	530	197	71
Dept. of English, Education	870	570	230	88
Art&Design, Dept. of Physical Edu.	600	500	173	62
Life Science	700	530	200	74
Engineering, Information&Communication	700	550	213	80

4-3. Fostering Global Leaders of Edu.

Global Network: Dormitory

	UBC	Griffith	RHUL	UC Davis	U Penn	Waseda 早稲田	Remin 人民大
Country	Canada	Australia	U.K.	USA	USA	Japan	China
Since	2001.9	2004.3	2004.9	2004.9	2006.9	2005.3	2010
duration	1 year	1 year	1 year	1 year	1 year	1 year	1 year
Capacity	100	100	35	100	25	23	50
Building	KU-UBC House	-	KU-SI LEE Hall	-	-	-	KU Hall

Global Network

UBC: Univ. of British Columbia →

Renmin Univ. of China ↓



RHUL: Royal Holloway, Univ. of London →



KU-UBC House



KU-Sang-II Lee Hall

Global Network: Life & Club Activities

- Annual KoYonJeon (高延戦: Korea-Yonsei Univ. Games)
– Competition and Friendship that Lead Korea
- Granite Tower Festival (石殿祭)
– Festival of Resurgent Youth
- Club-House (学生会館) :
– more than 165 clubs



21

4-4. Fostering Global Leaders of Edu.

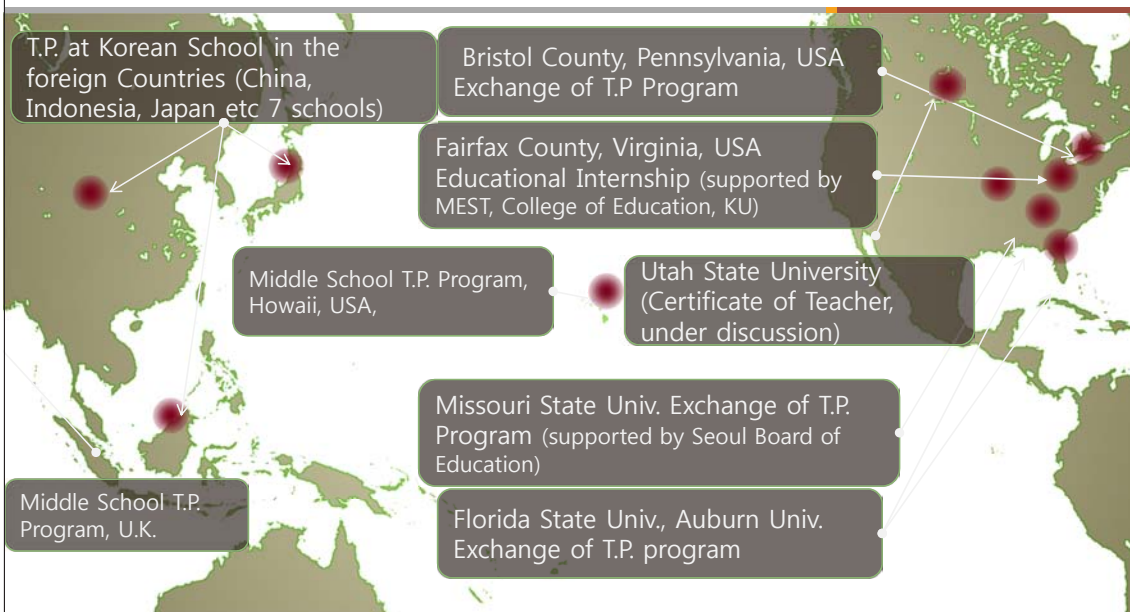
Global Scope: Internship

Program	人員	期間	時期	場所	主管
Engineering Internship	80	6週以上	放學中	産業體	工科大
International Internship	150	4週	夏季放學	海外支社	經營大
University Bench Marking	40	1週	冬季放學	全世界	學生處
U21 Summer School	5	2週	夏季放學	英國	國際處
KASC	5	4週	夏季放學	美國	國際處
Teaching Practice & Into the World	48(2011)	4週以上 1學期	學期中	全世界	師範大

Global Scope: Nobel Laureate Lecture Series



Global Scope: Teaching Practice in the World



• cf. Curriculum of Teacher Training Course: educational volunteers (60hours/2credits)



~Thank You~

主 題： 「国際的共同学位による新たな人材育成の可能性」

日 時： 2011年12月9日（金）10日（土）

Towards Global Education Competence: Current Practice and Visions of SNU College of Education



Jinwoong SONG (jwsong@snu.ac.kr)

*Professor, Dept. of Physics Education, Seoul National University, Korea
Chair, SNU Global Teachers University(GTU) Initiative
Former President, EASE (East-Asian Association for Science Education)*

1

Tohoku University 2011



Contents of Presentation

- about Korea
- Korean Education
- Seoul National University (SNU)
- SNU College of Education: Practice
- SNU College of Education: Visions
- Korea's Global Teachers University (GTU)
- Conclusions




Tohoku University, December 9-10, 2011


2


General Backgrounds (2009)

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- Divided from North Korea since 1945
- Population : 49 million
- Area : 99,700 km²
- **Ration of Mountain Area : 70%**
- **Population Density : 483 / km²**
- PPP GDP per capita : USD 27,658
- Weather : Four Seasons, Rain 1, 245 mm/yr
- Industry : IT, Electronics, Heavy Industry
- **Birth Rate : 1.15 babies, world lowest**
- Ratio of R&D Expenditure to GDP : 3.21%







Tohoku University, December 9-10, 2011


3


Constraints of Korea

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- WITHOUT Natural Resources
- WITHOUT Inherited Science, Industry, Wealth
- WITHOUT English advantage

- WITH Japanese occupation (1st half of 20th C)
- WITH Korean War (1950-53), nothing but People!
- WITH 4 Super Powers (China, Russia, Japan, US)
- WITH the separation from the North (Korea)





Tohoku University, December 9-10, 2011

4

Shared Cultures of Korea & E. Asia



about Korea

Korean Ed.

SNU

SNUCE Practice

SNUCE Visions

GTU Project

Conclusions

君師父一體

→ King-Master-Father Trinity

學而時習之 不亦說乎

→ Learn and practice from time to time...
Isn't it a wonderful life? (by Confucius)

先公後私

→ Put public first!



Tohoku University, December 9-10, 2011

5

Education in Korea



about Korea

Korean Ed.

SNU

SNUCE Practice

SNUCE Visions

GTU Project

Conclusions

- ❖ According to the *Newsweek's the World's Best Countries in 2010*, S. Korea ranked as the 15th in the world, with the 2nd in Education (only after Finland).



Tohoku University, December 9-10, 2011

6

Barak Obama's Praises of Korean Ed.



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

“Our children spend over a month less in school than children in South Korea. That is no way to prepare them for a 21st century economy. That is why I’m calling for us not only to expand effective after-school programs, but to rethink the school day to incorporate more time ... If they can do that in South Korea, we can do it right here in the United States of America.” ([March 10, 2009, Education Speech](#))



“In South Korea, teachers are known as ‘nation builders.’ Here in America, it’s time we treated the people who educate our children with the same level of respect.” (*The Korea Herald*, 26 Jan. 2011)



Korean Minister's View on Korean Ed.



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

"Although the pain of memorizing is unavoidable for young students to acquire new knowledge, they should also be motivated by the pleasure of creative expression. ... However, we force the students to memorize so much that they experience pain rather than [the] pleasure [of] acquiring knowledge through the learning process." ...



Mr. B.M. Ahn, on March 25, 2011 at the annual meeting of the Association for Education Finance and Policy in the US

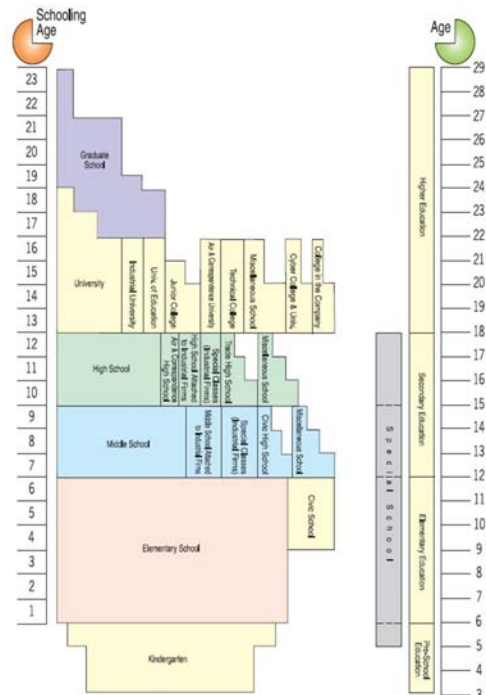
"Extreme parental pressure is not something to be envied... The Korean case illustrates it is possible to have too much of a good thing." (Cavanagh, 2011).



Korean Ed. System

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- (3) **6-3-3-4** (2-3) system
- Sch. Year : March → Feb.
- Compulsory : 9 years
- **87% entering Higher Ed.**
- Univ. (173), Junior Col. (158)
- Teachers through **College of Ed. & Univ. of Ed.**
- Very Tough Competition for Good Universities
- Public Education Expenditure to GDP : 4.2%



Administrative Aspects of Korean Ed.

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

	Features	Data
Government	Ministry	MEST (Ministry of Ed., Science and Technology) Minister + 2 Vice Ministers (Ed. + Science & Tech.)
	Advisor to the President	Senior Secretary for Education and Culture
	Administration	MEST + 16 Regional Education Offices
School	Administration	Principal → Vice Principal → Subject Head Teacher
	Departments	Academic, Students, Grade (1, 2, 3), Subjects
	Assessment Time	Mid. & Final term exams, Formative assessment
	Assessment Type	Mixture of essay, multiple choice, and practical work
	School Hour (minutes)	40 for Elementary, 45 for Middle, 50 for High schools

Administrative Aspects of Korean Ed.



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

Educational Statistics (2009)

Category	Features	Data
Educational Background	Total Public Expenditure on Education	4.2%
	Pupil-Teacher Ratio (Primary School)	26.7
	Pupil-Teacher Ratio (Secondary School)	18.0
	Secondary School Enrollment	96.0%
	Higher Education Achievement (25-34 yrs)	53.0%
	Quality of Educational System (1 - 7)	4.38

PISA Ranks (15yrs) in Reading, Mathematics and Science Literacy

	2000	PLUS	2003	2006	2009
Reading	6	6	2	1	1
Mathematics	2	3	3	1	2
Science	1	1	4	7	4
Problem Solving	-	-	1	-	-
Participating Countries	31	41	40	57	34 +



Achievements vs. Engagements in E. Asia



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- ❖ Very High Performances in Reading, Math & Science
- ❖ Quite Low Science Engagement Scores (esp. Self-concept)
- ❖ Korea & Japan : among the lowest in Engagements

Table 5 2006 PISA Results in East Asia

2006 PISA Rank (out of 57)		China Mainland	Hong Kong	Japan	Korea	Taiwan	Av.
Performance Rank (Score)	Reading	-	3 (536)	11-21 (498)	1 (556)	12-22 (496)	(478)
	Mathematics	-	1-4 (549)	7 (523)	1-4 (547)	1-4 (547)	(485)
	Science	-	2 (542)	5 (531)	7-13 (522)	4 (532)	(488)
Science Engagement Scores	Self-efficacy	-	531	391	455	543	507
	Self-concept	-	266	134	159	223	329
	Enjoyment	-	362	224	245	313	286
	Future-oriented Motivation	-	149	83	79	123	116



Teacher Qualifications in Korea

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

Area		Sub-areas	Details
Pre-service Teacher Education Institutions		Primary Teachers	National Universities of Education
		Secondary Teachers	Colleges of Education in Univ. / Teacher Certificate Course in Undergraduate / Graduate Course of Education
Requirements for Teacher Certificate	Pedagogy Courses (Minimum Of 22 units)	Theories of Education	Minimum of 14 units covering at least 7 courses for education (Introductory Education, Philosophy & History, Curriculum, Assessment, Theory & technology, Psychology, Sociology, Administration & Management, others)
		Basics for Teaching Profession	Minimum of 4 units covering Understanding Students of Special Care (at least 2 units) and Practicum of Teaching Profession (at least 2 units)
		Teaching Practice	Minimum of 4 units covering School Practicum (at least 2 units) and Educational Volunteer Work (up to 2 units)
	Major Courses (Minimum Of 50 units)	Subject Knowledge	Minimum of 21 units covering at least 7 Basic Courses of the subject
		Subject Education	Minimum of 8 units covering at least 3 subject education courses (inc. Subject Logic and Essay)



Teacher Recruitment Processes in Korea



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

Recruitment Method	Public Schools	3 Stage Recruitment Tests (Candidates apply to one of Local Education Offices, but the Tests are organized together by all Local Education Offices.)
	Private Schools	Each school's own process, but recently through a common process for teacher recruitment.
Public School Recruitment Process	1 st Stage	Multiple Choice type questions for educational theories, subject knowledge, & subject education
	2 nd Stage	Essay type questions for advanced knowledge of subject knowledge and subject education
	3 rd Stage	In-depth Interview and Demonstration of Teaching Skills



General Features of Korean Education



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- Very high zeal for education by parents
- Very high competition for Best Universities (e.g. SKY Unis)
- Education determined by Univ. Entrance Exams.
- Parents' Heavy Reliance on Private Education
- Excellency vs. Equity (e.g. Special Sch. Vs. Ordinary Sch.)
- "Education is more political than politics itself in Korea."
- High Performance, LOW Enjoy & Satisfaction
- HIGH level of Pre-service Teachers' potential (top 5~10%)
- LACK of Diversity and Creative approaches



Seoul National University (SNU)



Statistics of SNU (2011)



about Korea
Korean Ed.
SNU
SNUCE Practice
SNUCE Visions
GTU Project
Conclusions

- Established in 1946, by integrating existing Colleges
- (Schools) 16 Colleges + 1 Grad. Sch. + 9 Special G. Sch.
- (Faculty) 1,870 full members + 3,681 other kinds members
- (Staff) 1,012 administrative staff members
- (Students) 16,325 UG + 7,712 Master + 2,904 Doctoral
- (International) 242 faculty members + 2,694 students
- (Research) Papers in SCI Journals 2010: 20th
- (Ranking) QS World University Ranking 2011: 42nd
- (MOU) 220 at Uni., 353 at College, 241 Institution Levels



Recent Emphases of SNU



about Korea
Korean Ed.
SNU
SNUCE Practice
SNUCE Visions
GTU Project
Conclusions

- a World Class Research-Oriented University
- National University → Corporative University (in 2012)
- Down-sizing student numbers (UD & PG)
- Diversifying students' abilities and recruitment areas
- Priority to recruiting new International Faculty members
- Dual degrees with foreign institutions
- Students' Exchanges (Inbound as well as Outbound)
- Quality, rather than Quantity, in research
- Increase of Courses taught in English



SNU College of Ed. (SNUCE)

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice**
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

Features of SNUCE

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice**
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- 4 years' pre-service teacher education (BA/BSc)
- a Balance between contents & pedagogy (E. Asian type)
- Students of highest potential (esp. UG educational studies)
- Research-oriented (2yrs' Master & 3 yrs' Doctor courses)
- a wide range of disciplines (15 Dept & 7 programs)
- 4 experimental schools (1 Ele., 2 Middle, 1 High Schools)
- Strong R&D Links (Res. Institutions and Training Centers)
- Internationally recognized academic activities (esp. two BK21)
- Links with overseas institutions (MOUs, Dual degree, Alliance)
- Influence over national policies (PMs, Ministers, Nat'l Curri.)

Tohoku University, December 9-10, 2011

20

Dept. & Degree Programs in SNUCE



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

15 Departments (BA/BSc, M.Ed., Ph.D)

- Education
- Korean & KFL Education
- French Education
- Social Studies Education
- Geography Education
- Mathematics Education
- Physics Education
- Biology Education
- Physical Education
- English Education
- German Education
- History Education
- Ethics Education
- Chemistry Education
- Earth Science Education

7 Interdisciplinary Programs (M.Ed., Ph.D)

- Home Economics Education
- Music Education
- Fine Art Education
- Global Education Cooperation
- Early childhood Education
- Special Education
- Environment Education



SNUCE: Practice (research)



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

❖ Educational Journals (English) from SNUCE

- *Asia Pacific Education Review* (SSCI)
- *The SNU Journal of Education Research*



❖ Regular International Conferences

- SNU ERI Int'l Conf. on Education Research
- Int'l Conf. of Science Education for Next Society




SNUCE: Practice (research) BK21 group

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice**
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

SENS(Sci. Ed. for the Next Society) <http://sens.snu.ac.kr/>

- ❖ **Aims :** (Education) Improving capacities & environment for education
(Research) Making research outcomes of the world level
- ❖ 17 professors + about 50 PG students + 5 postdocs + 2 staffs
- ❖ **5 Research Teams :**
 - Professionalism of science teachers
 - High-tech media-based science education
 - Highly advanced science education
 - Customized science education
 - Science & culture education
- ❖ **Supports for Students' Research :**
 - monthly living allowance
 - participation to international conferences
 - paper publication charges
 - incentives for best research performance
 - monthly seminars by invited speakers
 - Invitations of international scholars



-10, 2011 23

SNUCE: Practice (research) BK21 group

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice**
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- ❖ **Foreign Faculty Members**
 - Junhua Yu (China) - Nanobio Science
 - Sonya Martin (USA) - Socio Cultural Education in Science
- ❖ **Foreign Students**
 - 1 master student (USA)
 - 1 ph.d. student (USA)
- ❖ **International Conferences (co-hosted)**
 - The 4th NICE (Network for Inter-Asian Chemistry Educators) Symposium
 - 2011 EASE (East-Asian Association for Science Education) Conference
 - 2011 NTNU-HU-SNU Joint Symposium on Science Education
- ❖ **Overseas Working former Postdocs**
 - Dr. Mijung Kim (University of Alberta, Canada)
 - Dr. Minkee Kim (Bilkent University, Turkey)
- ❖ **Visiting Speakers for SENS Seminars**
 - 9 speakers from USA
 - 1 speaker from UK
 - 1 speaker from Turkey
 - 2 speakers from Australia
 - 1 speaker from Japan



Tohoku University, December 9-10, 2011 24

International Links of SNUCE



- about Korea - Wisconsin-Madison, Northern Iowa, USC (US)
- Korean Ed. - IOE, KCL, Aston, Edge Hill (UK)
- SNU - National Institute of Education (Singapore)
- SNUCE Practice - Tokyo, Hiroshima, Tsukuba, Kushu Uni. (Japan)
- SNUCE Visions - Peking, Beijing Nor., Zhejiang, E. China Nor. Uni. (China)
- GTU Project - Sydney, Melbourne Uni. (Australia)
- Conclusions - Auckland Uni. (New Zealand)
- Malaya Uni. (Malaysia)
- Chulalongkorn, Srinakharinwirot Uni. (Thailand)
- Rome Uni. (Italy)
- Alberta Uni. (Canada)
- INACO, Grenoble (France) etc.



Participating in International Links



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions
- **International Alliances of Leading Education Institutes**
 - Institute of Education (IOE), UK
 - Danish School of Education, Aarhus, Denmark
 - Beijing Normal University, China
 - Faculty of Education, University of Melbourne, Australia
 - National Institute of Education, NTU, Singapore
 - College of Education, Seoul National University, Korea
 - OISE, University of Toronto, Canada
 - School of Education, University of Wisconsin-Madison, USA
- **APRU (Ass. for Pacific Rim Uni.) Ed Deans Program**

Association of Pacific Rim Universities (APRU)	
China	Fudan • Nanjing • Peking • Tsinghua • USTC • Zhejiang
Hong Kong	Hong Kong • HKUST
Japan	Keio • Kyoto • Osaka • Tohoku • Tokyo • Waseda
South Korea	Seoul National (SNU) • Korea (KU)
Russia	Far Eastern Federal (FEFU)
Canada	British Columbia (UBC)
Mexico	Monterrey Institute of Technology • UNAM
United States	Caltech • Stanford • UC Berkeley • UC Davis • UC Irvine • UCLA • UCSD • UCSB • Oregon • Southern California (USC) • Washington
Australia	Australian National (ANU) • Melbourne • Sydney
New Zealand	Auckland
Chile	Chile
Indonesia	Indonesia
Malaysia	Malaya
Philippines	University of the Philippines (UP)
Singapore	NUS
Taiwan	National Taiwan (NTU)
Thailand	Chulalongkorn



SNUCE's Dual Degree Program with U. of Alberta

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions



- **Dual Degrees**
 - MA/MSc/MEd and PhD/EdD
 - between SNUCE and Faculty of Education, U. of Alberta
- **Requirements**
 - at least 1 year for MA/MSc/MEd & 1.5 years for PhD/EdD at the home institution
 - co-advisors from the both sides
- **Registration & Payment**
 - students' responsibility for all cost for studying abroad
 - full tuition at home institution & other fees for studying abroad
- **Course Credit**
 - Up to a half of the total credits required can be transferred.
 - Must satisfy all the degree requirements of the both sides
- **Dissertation & Committee**
 - dissertation in English & a summary (abstract) in both languages
 - one joint dissertation committee (and advisors from the both)



Students' Global Education Leadership Programs of SNUCE

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

(Type 1) Mid & Long Term Visit

- Denmark, France, Italy, Spain etc.
- 1 year ~ 6 month

(Type 2) Short Term Visit (from 2009)

- 1 Week Visits to European & US Universities
- Lectures in Uni. + Observation at local schools
- (in 2012) five groups of UG students of SNUCE to US, UK, France, & Germany



Global Education Cooperation (GEC), SNUCE



about Korea

Korean Ed.

SNU

SNUCE Practice

SNUCE Visions

GTU Project

Conclusions

- Established in 2009 as an Interdisciplinary PG Program
- Degree Programs (MA & Ph.D)
- Non-Degree Programs
 - Global ODA Consultant Certification Program
 - Intensive program for foreign educational experts
- International Partners
 - ADEA (Ass. for the Development of Education in Africa, Tunis)
 - UIL (UNESCO Institute for Lifelong Learning, Hamburg)
 - UNESCO Bangkok Regional Office
 - Paulo Freire Institute-International, Sao Paulo
 - EWB (Educators without Borders, Seoul)
 - British Council in Seoul (TBC)
 - Ilga Canaan Foundation, Korea



ber 9-10, 2011



Global Education Vision of SNUCE



about Korea

Korean Ed.

SNU

SNUCE Practice

SNUCE Visions

GTU Project

Conclusions

- ❖ SNUCE's Global Education vision is to build the **GEC** (global education competence) of Korea, on the basis of its **GLOBAL LEARNING** environment.

❖ **GLOBAL:** Global Leadership with Open & Balanced Appreciation of Local Needs

❖ **LEARNING:** Literacy, Experience, Aptitude, Research, and Networking for global education



Tohoku University, December 9-10, 2011

30

Global Education Vision of SNUCE (GTU)

❖ GTU LEARNING Emphases :

Students' Emphases

- Knowledge & Theories
- Int'l Exchange & Volunteering
- Teaching Practice in English

Literacy,
Experience,
Aptitude,
Research,
Networking

Institution's Emphases

- Funding & Supports
- MOU, Dual-degree sys.
- International Degrees

Academics' Emphases

- Teaching Subjects in English
- Int'l Exchange & PD programs
- Int'l Research Collaborations

about Korea
Korean Ed.
SNU
SNUCE Practice
SNUCE Visions
GTU Project
Conclusions

Tohoku University, December 9-10, 2011

31

Korean Government's GTU (Global Teachers Uni.) Project

about Korea
Korean Ed.
SNU
SNUCE Practice
SNUCE Visions
GTU Project
Conclusions

(Vision)

❖ Building "Top Global Education Country" through World-Class Global Teacher Education

↑

(Policy Aims)

❖ Improving Global Competence of Korean Teacher Ed. & Teachers
 ❖ Widening Teacher Exchanges Based on International Local Needs

↑

(Projects)

❖ **Globalization of Teacher Ed. Institutes**
 - Selection of and Supports for **GTUs**
 - Global Teacher Programs (**GTP**) in GTU
 - Global Teacher Training Center (**GTTC**) in GTU

❖ **Supporting System for Global Exchange of Teachers**
 - Expanding Exchange and Dispatch of Teachers for Education Diplomacy
 - Developing a Supporting System for Teacher Exchange

Tohoku University, December 9-10, 2011

32

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

World map showing international connections from Korea to Europe, Asia, North America, South America, Africa, Middle East, Oceania, and India.

Teachers' Oversea Advancement

- Math & Science Teachers Oversea Advancement (in 2010, 13 to UK, 8 to Canada)
- Certificate Holders' Oversea Advancement (in 2011, 25 to US)
- Teacher Visits to Int'l Research Institutes (e.g. in 2011, 20 to CERN)

Exchanges & Joint-Teaching

- Teacher Exchanges and Collaboration (in 2011, 30 to US)
- Through NSF link, Teacher Exchange programs between Korea and US (funded by the both sides)

Tohoku University, December 9-10, 2011

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

World map showing international connections from Korea to Europe, Asia, North America, South America, Africa, Middle East, Oceania, and India.

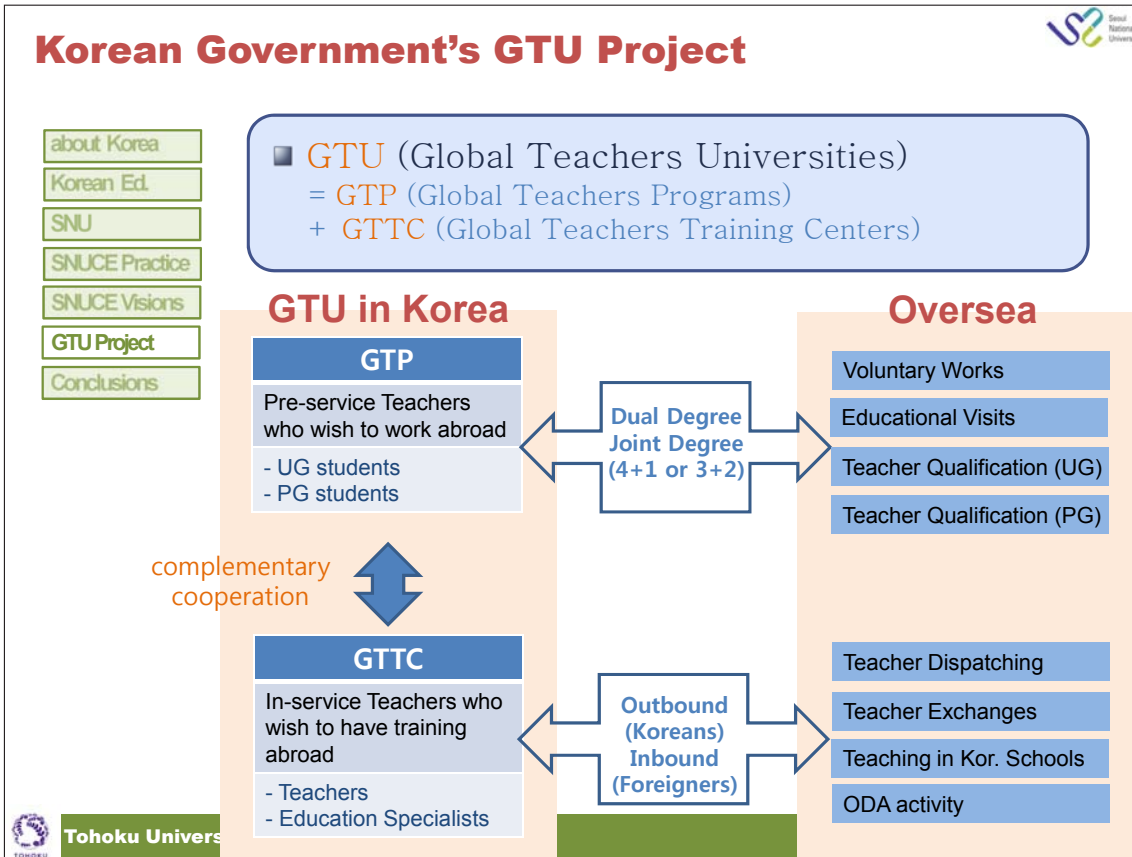
Special Courses for TIE in Uni.

- TIE (Teaching in English) for improving global teaching ability and skills
 - TEE (Teaching English in English)
 - TME (Teaching Mathematics in English)
 - TSE (Teaching Science in English)
 - TKE (Teaching Korean in English) etc.

A Portal for Teacher Oversea Advancement

- TEACH(Teacher Excellence in Action & Collective Harmony in the world)
- Integrated Oversea Service = Oversea training of in-service teachers + Oversea advancement of pre-service teachers + Local education offices' oversea teacher training

Tohoku University, December 9-10, 2011



Conclusions

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- ❖ Korea has nothing but people and education.
- ❖ Korea has been successful to catch-up.
- ❖ But, now we need more diversity & creativity.



- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- ❖ SNU is in need of a quality jump.
- ❖ SNU & SNUCE seek learning from others.
- ❖ **International collaboration is the key. (EU experience)**

- about Korea
- Korean Ed.
- SNU
- SNUCE Practice
- SNUCE Visions
- GTU Project
- Conclusions

- ❖ Education is local as well as global.
- ❖ **GLOBAL** education needs to be of **Global Leadership with Open & Balanced Appreciation of Local needs.**



Tohoku University, December 9-10, 2011

36



Thank you for your attention.

감사합니다.

ありがとうございます.

Jinwoong SONG (宋眞雄)
jwsong@snu.ac.kr





The Experiences and Challenges of Developing International Dual Degree programs

Chia Hsin Lin, Ph.D.
Professor and Chair
Department of Educational Psychology and Counseling

1

Modes of International Collaboration

- Study abroad
- Student exchange
- Off - campus program
- Distance education
- Dual degrees
- Joint degrees



2

Dual Degree Programs

After completing all requirements for both programs (usually in four to five years) the student is awarded two degrees in one of the following combinations:

- (1) Associate's and Bachelor's programs
- (2) Dual Bachelor's Degree programs
- (3) Dual Bachelor's Master's Degree programs
- (4) Dual Graduate Degree programs

Our Experiences at NTNU

- NTNU – MU Dual master's degree programs
- NTNU – MU Dual bachelor's master's degree programs
- NTNU – NEC Associate's and bachelor's degree programs

MU=University of Missouri, USA

NEC=New Era College, Malaysia

Our Experiences at NTNU

The dual degree program agreement may be signed between two universities, two colleges, or two departments

We signed the agreements with the Department of Educational, School, and Counseling Psychology, University of Missouri; and with the Department of Guidance & Counseling Psychology, New Era College

Dual Master's Degree Program (1+1)

- At least One-year at each institution
- Non-resident tuition waived
- Academic advisor assigned to each student
- Credits transferred mutually based on the regulations on both sides
- Academic and cultural orientations
- Opportunities for cultural experiences
- Result: 13 NTNU master students have completed or are working on their dual degree at MU in the past 6 years

Bachelor's-Master's Degree Program (3+2)

- Students recommended by NTNU
- 3 undergraduate years at NTNU + 2 graduate years at MU
- non-resident fee waived up to 10 students each semester
- Academic advisor assigned to each student
- Opportunities for cultural experiences
- Result: 3 students currently participate in this program, no one completes the program yet

Associate's and Bachelor's Degree Program with NEC, Malaysia (2+2)

- To educate more *Chinese Malaysian* to become counseling professionals
- Up to 6 undergraduates from NEC per year could get selected and admitted to NTNU
- Two years at NEC + two years at NTNU
- Result : 7 have completed the program in the past 5 years and 1 is still studying at NTNU

Feedback from dual degree students

- Improve language skills, multi-cultural experiences, and professional training
- Expand world view, life perspectives, and way of learning
- Reflect on one's own culture
- More practicum and internship experiences are suggested
- More program promotions and orientations are suggested

The challenges we are facing

- One way student exchange, from Malaysia to Taiwan, or from Taiwan to USA
- Most of our students get scholarship or financial supports from the government
- Key faculty members from each institution are critical to the program establishment

Suggestions to the joint degree program

- We support the international collaborative degree program proposed by the Tohoku University
- A joint master's degree program would be more difficult to establish due to administrative procedure and not enough time for students to master two languages
- Based on our experience, a 3 + 2 dual degree program seems more feasible

Conclusions

- Globalization in higher education is the trend
- International collaboration through faculty exchange, student exchange, and research is now a common practice
- Developing international dual/joint degree programs to meet the needs for international human resources is in the right time
- We believe that the conference will facilitate the process of establishing dual/joint degree programs in Eastern Asia region

日本東北大學「培養持有國際性共同學位新人才的可能性」國際研討會，2011.12.9-2011.12.10

New Challenges on Educating Young Talents: A Case Analysis on National Chengchi University

Presenters : Jason C. Chan & Tsao-Lin, Fong
(College of Education, NCCU)

Information provided by: NCCU Secretariat, Center for Learning and Teaching Development, Center of General Education, Office of International Cooperation



What kind of young talents we expect to cultivate?



General Education as a Basis of Professional Education

- We uphold the spirit of liberal arts education in general education by planning “thick foundation” and “wide caliber” courses that emphasizes on interdisciplinary learning, integration of knowledge, ability- and outcome-based learning.

- 1.To implement pilot experiment of core general education courses
- 2.To develop curriculum maps
- 3.To enhance quality and quantity of general education in natural science
- 4.To start liberal arts experimental class
- 5.To drive participation of whole campus

Structure of General Education and Core Courses

	type of field	dimension	core course	faculty
General Education	Human Studies	Art and Humanistic Thinking	Appreciation and Creation of Arts	College of Communication
			Western Literary Classics and Humanistic Traditions	Depart. of English
		Value of Life and Philosophical Reflection	The Value of Life and Philosophical Reflection	Depart. of Philosophy
			Life Exploration and Religious Culture	Graduate Institute of Religious Studies
		World Civilization and Historical Thinking	Development of Civilizations and Historical Thinking	Depart. of History
			Language and World Civilization	Graduate Institute of Linguistics
	History and Figures of Modern Taiwan		Graduate Institute of Taiwan History	
	Social Science	System of law and Politics and Democratic Thinking	Introduction to Taiwan Politics	Depart. of Political Science
			Legal Science	College of Law
		Socio-Economic Fluctuation and Diverse Thinking	Economics in Everyday Life	College of Social Sciences
			Media Literacy	College of Communication
	Thinking Sociologically	Depart. of Sociology		
	Regional Development and Global Thinking	Introduction to Intellectual Property	Graduate Institute of Intellectual Property	
	Natural Science	Mathematics, Logic and Scientific Method	Mathematics, Logic and Life	Depart. of Mathematic Sciences
		Sciences of Material Universe	Rhythms of Life	Graduate Institute of Applied Physics
Life Science		Life Science in the Surroundings	Institute of Neuroscience	
Technology and Human Society		Exploring the Digital Wonderland	Depart. of Computer Science	
College General Education	Freshman Orientation	The Goal of University Education (3 credits)	Depart. of Education	
		Freshman Orientation (1 credit)	Chengchi College	
	Action Practices	Topics on Action Practices (2 credits)	Chengchi College	

Chengchi College

1. To cultivate intellectual
2. To create the circle of life learning
3. To deepen residential learning

4. To plan topics of college
5. To innovate learning field
6. To shape culture of residence



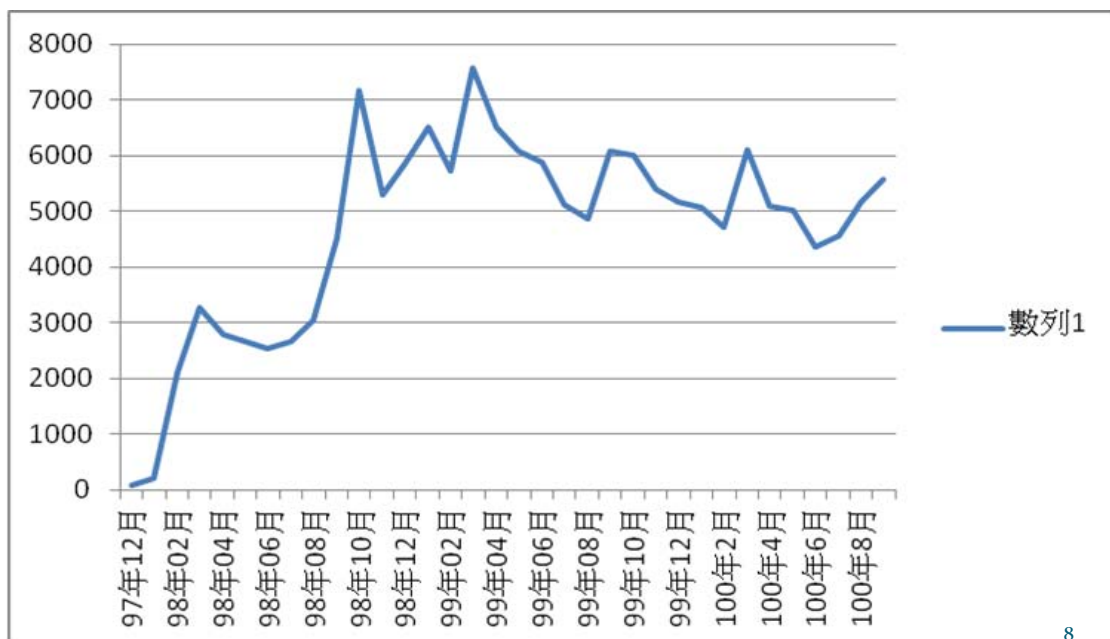
What initiatives are taken to improve teaching quality in NCCU ?



Teaching Workshop, Teaching Newsletter, Teaching Handbook

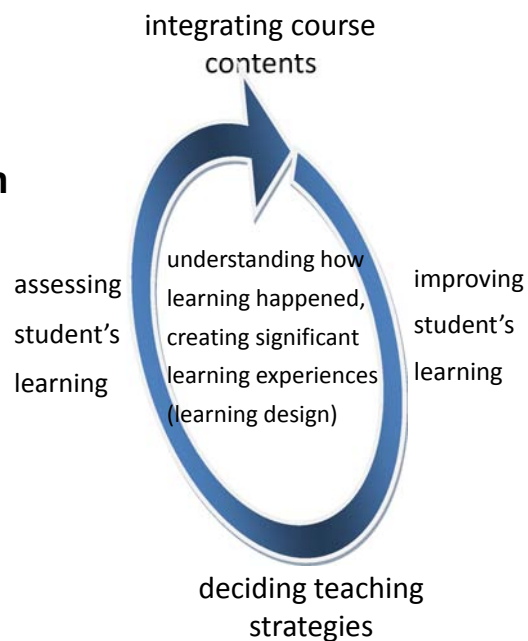


- Reading hits on “Teaching and Learning Blog” and “Newsletter”



Teaching Development workshop

- ❖ “Curriculum Design and Teaching Development Workshop”, originated from University of McGill, Canada, was introduced in 2008.
- ❖ Adopting online courses with six-time face-to-face community dialogues
- ❖ A total of 5 workshops were set up in 2008-2010, and the number of participating teachers were 48.



9

Teaching Experience Transmission System

- Encouraging novice teachers to apply for supervision from experienced and outstanding teachers and to form an action research team.



10

Organizing lectures or forums to assist faculties reducing work pressure and enhancing sense of happiness



經典書房 展示主題
有幸福的老師 才有幸福的學生
幸福系列書籍希望提醒本校師生
對生活品質的重視
進而提升幸福感受

100.11.1 - 101.7.31 中正圖書館
▲ 展示期間 ▲ ▲ 展示地點
教學發展中心
▲ 主辦單位 ▲

11

How to deal with the problem of rote-learning ?

Diverse models of teaching & multiple assessment approaches



independent-learning



case-study teaching



problem-based learning



learning by discussing

12

How to nurture communication and problem-solving ability?

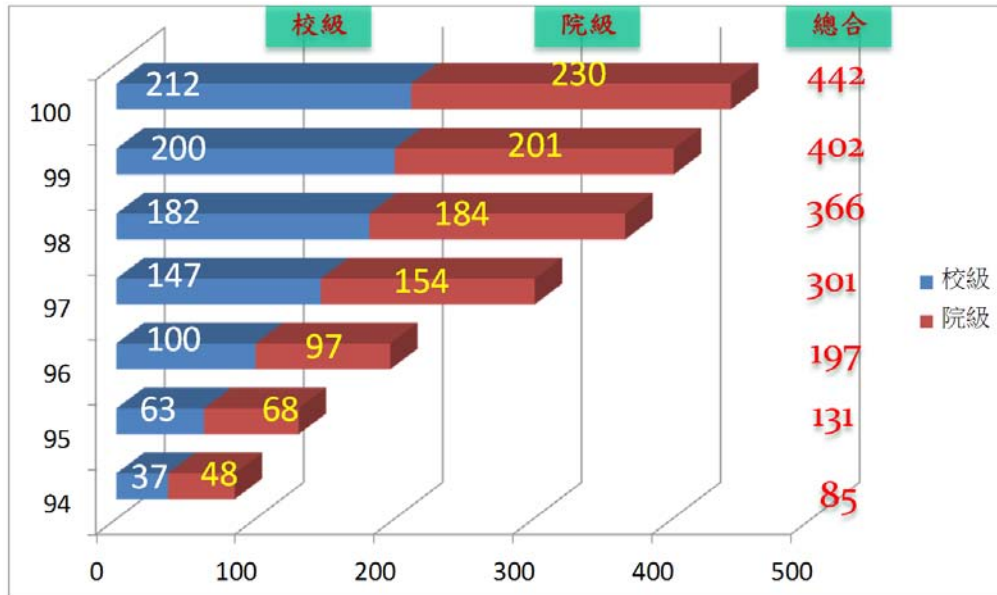
The following approaches are encouraged:

- **problem-based learning**
- **social action immersed into curriculum**
- **group discussion**
- **cooperative learning**
- **informal learning in camp**
- **writing reflective learning journey**



政大締約學校成長圖

NCCU Partner Universities – university & college level



15

政大國際化措施

Internationalization at NCCU

- ◆ International Students
- ◆ Outgoing Exchange Students
- ◆ English Taught Courses

International Students

- Scholarship for International Students
- Degree Seeking Students
- Incoming Exchange Students
- International Summer School

17

國際生獎學金

Scholarship for International Students

- 國際新生獎學金
New International Students Scholarship
- 國際生普通獎學金
MOE Common Scholarship for Foreign Students
- 華語獎學金
Mandarin Studies Scholarship (Tuition Exemption for Exchange Students)

18

National Chengchi University
國立政治大學

About NCCU

508 Degree-Seeking International Students in 2010

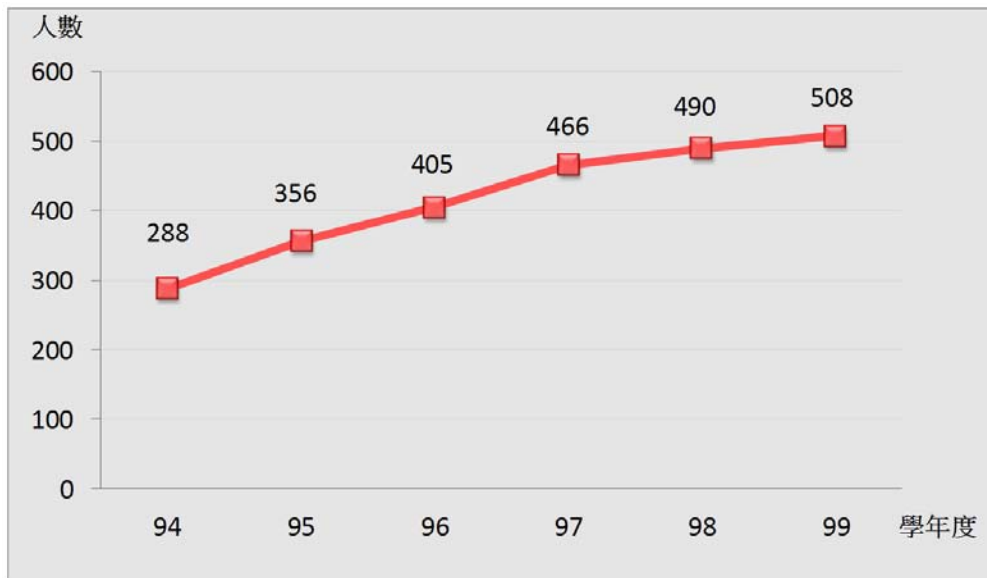
Region	Country	Number	Region	Country	Number	Region	Country	Number
America	USA	65	Oceania	Marshall Islands	1	Europe	Germany	13
	Canada	17		New Zealand	1		Czech Republic	10
	Guatemala	16		Solomon Islands	1		France	9
	Nicaragua	14		Subtotal	7		England	7
	El Salvador	13	Asia Pacific	Korea	82		Poland	6
	Honduras	10		Japan	45		Hungary	4
	Belize	7		Malaysia	29		Switzerland	4
	Panama	5		Thailand	14		Belgium	2
	Paraguay	5		Singapore	12		Estonia	2
	Peru	4		Vietnam	10		Netherlands	2
	Mexico	3		Indonesia	9		Norway	2
	Chile	2		Philippines	6		Austria	1
	Ecuador	2		India	4		Italy	1
	Argentina	1		Subtotal	211		Latvia	1
	Bolivia	1	Russia	28	Slovakia	1		
	Brazil	1	Mongolia	6	Spain	1		
	Colombia	1	Turkey	5	Subtotal	66		
	Costa Rica	1	Israel	4	Africa	Burkina Faso	3	
	St. Kitts and Nevis	1	Belarus	3		Gambia	1	
	Subtotal	169	Afghanistan	1		Sao Tome and Principe	1	
Australia	3	Kazakhstan	1	South Africa		1		
Kiribati	1	Ukraine	1	Subtotal		6		
Oceania			Subtotal	49				

19


Degree-Seeking International Students Top 10 Countries

Country	Numbers of Degree Seeking Students
Korea	82
USA	65
Japan	45
Malaysia	29
Russia	28
Canada	17
Guatemala	16
Nicaragua	14
Thailand	14
El Salvador	13
Germany	13
Singapore	12


Degree-Seeking International Students by Academic Year



21



National Chengchi University
國立政治大學



346 Incoming Exchange Students (2010)

Region	Country	Number
Europe	France	52
	Germany	28
	Netherlands	18
	Spain	16
	Finland	10
	Italy	10
	Poland	10
	Austria	8
	Denmark	6
	Sweden	6
	Czech	5
	Iceland	4
	Belgium	3
	Ireland	3
	Lithuania	3
	Norway	3
	Portugal	2
	UK	2
	Switzerland	1
	Subtotal	190

Region	Country	Number
North America	USA	20
	Canada	17
	Subtotal	37
South/Central America	Brazil	2
	Mexico	1
	Subtotal	3
Asia Pacific	Korea	46
	Hong Kong	28
	Japan	20
	China	9
	Singapore	4
	Thailand	1
	Subtotal	108
Western Asia	Turkey	4
	Mongolia	1
	Russia	1
Subtotal	6	
Oceania	Australia	2
	Subtotal	2
Africa	Subtotal	0
Total		346

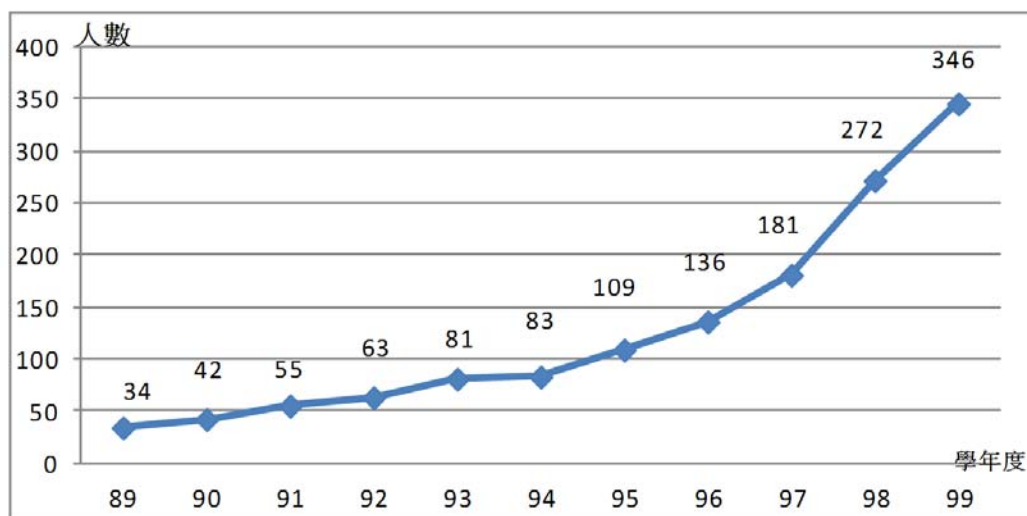
22

Incoming Exchange Students Top 10 Countries

Country	Numbers of Incoming Exchange Students
France	52
Korea	46
Germany	28
Hong Kong	28
USA	20
Japan	20
Netherlands	18
Canada	17
Spain	16
Finland	10
Poland	10
Italy	10

23

Incoming Exchange Students by Academic Year



24



NCCU
International
Summer
School

- Theme: Taiwan in the Global Context (July only)
- 4/8 Week Program
- Intensive Chinese Language courses
- Credit Courses
- One-on-Two Chinese Tutoring

National Chengchi University
INTERNATIONAL SUMMER SCHOOL
Taiwan in the Global Context
<http://oic.nccu.edu.tw/11summerschool/>

July 4-29, 2011
August 1-25

25



National Chengchi University
2011 International Summer School

Credit Course

Session	Course Title	Class Date	Class Time (Mon-Fri)	Weeks	Teaching Hours
1	Taiwan in the Global Context	July 4-Jul 29	morning	4	40

Chinese Language Program

Session	Class Date	Class Time (Mon-Fri)	Weeks	Teaching Hours
1	Jul 4 - Jul 29	2 pm - 5 pm	4	60
2	Aug 1 - Aug 25	2 pm - 5 pm	4	60

26

Outgoing Exchange Students

- Study Abroad Fair
- Scholarship for Outgoing Exchange Students
- Outgoing Exchange Students
- Summer Program
- Overseas Program 境外教學
- Dual Degree 雙聯學位

27



Study Abroad Fair Guideline 「海外留遊學週」

本處每年10月舉辦 (Study Abroad Fair)，邀集締約學校代表及經由各種不同管道出國學習的學生至現場進行說明與經驗分享

- 海外留學展-締約學校教育展
- 交換計畫與獎學金申請
- 海外暑期短期進修介紹
- 海外進修經驗分享-出國留遊學停、看、聽座談



2011 Study Abroad Fair


Day	Topic
Day 1	海外留學展-締約學校教育展
Day 2	交換計畫與獎學金申請
Day 3	海外暑期短期進修介紹
Day 4	海外進修經驗分享-出國留遊學停、看、聽座談
Day 5	海外進修經驗分享-出國留遊學停、看、聽座談
Day 6	海外進修經驗分享-出國留遊學停、看、聽座談
Day 7	海外進修經驗分享-出國留遊學停、看、聽座談
Day 8	海外進修經驗分享-出國留遊學停、看、聽座談

出國獎學金種類


Scholarship for Outgoing Students / Research

- 教育部學海系列獎學金 MOE Scholarship
- 本校鼓勵學生赴國外進行短期進修獎學金 NCCU Scholarship for Outgoing Exchange Students
- 交換生獎學金 Exchange Scholarship for Indicated Area
 - 交換留學獎學金
 - 赴德國、奧地利：台德獎學金、台奧獎學金
 - 赴日本：日本交流協會短期交換留學生獎學金、真如苑佛教會短期留學獎學金
 - 出國進修獎學金
 - 赴韓國：韓國大學校互惠語文獎學金
 - 赴波蘭：波蘭政府獎學金
 - 赴獨立國協地區：獨立國協地區獎學金
 - 赴阿拉伯語地區：科威特獎學金、約旦獎學金、紹德國王大學獎學金等
- 研究相關獎學金 Scholarship for Research Abroad
 - 真如苑佛教會資料收集獎學金
 - 國科會千里馬計畫（補助博士生赴國外進行短期研究）

29



National Chengchi University
國立政治大學



348 Outgoing Exchange Students (2010)

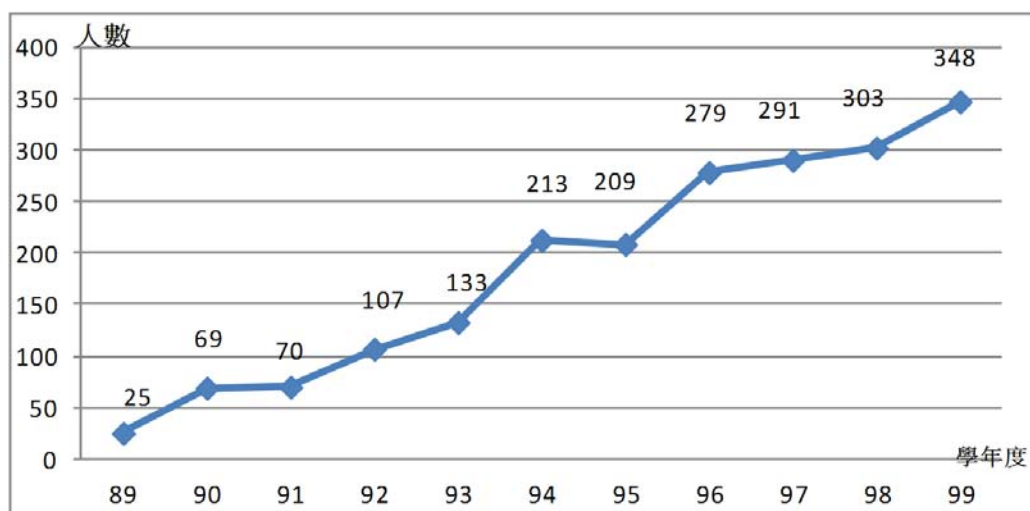
Region	Country	Number
Europe	France	28
	Germany	27
	Netherlands	18
	Spain	9
	Finland	7
	Italy	7
	Czech	6
	Sweden	6
	Denmark	5
	Ireland	4
	Poland	4
	Austria	3
	Norway	3
	UK	3
	Belgium	2
	Portugal	2
	Liechtenstein	2
	Iceland	1
	Switzerland	1
Subtotal		138
West Asia	Russia	46
	Syria	10
	Turkey	8
	Kuwait	6
	Jordan	1
	Saudi Arabia	1
Subtotal		72
Asia Pacific	Japan	47
	Korea	39
	Hong Kong	13
	Singapore	3
Subtotal		102
Africa	Tunisia	4
Subtotal		4
North America	USA	17
	Canada	7
Subtotal		24
Oceania	Australia	2
Subtotal		2
South America	Mexico	3
	Brazil	2
	Peru	1
Subtotal		6
Total		348 ³⁰

Outgoing Exchange Students Top 10 Country

Country	Numbers of Incoming Exchange Students
Japan	47
Russia	46
Korea	39
France	28
Germany	27
Netherlands	18
USA	17
Hong Kong	13
Syria	10
Spain	9

31

Outgoing Exchange Students by Academic Year



32

 National Chengchi University
國立政治大學

Summer Programs

- ▶ EU Delegates
- ▶ Georgia Tech
- ▶ Purdue University
- ▶ University of Innsbruck
- ▶ UCLA
- ▶ Stanford University
- ▶ UC Berkeley
- ▶ University of Cambridge
- ▶ University of Toronto
- ▶ National University of Mongolia

33

境外教學 Overseas Program

- 自97學年起鼓勵教師規劃境外教學--「國外短期學習課程」。
- 此類課程由教師們自行規劃，帶領學生赴國外進行數週之學習，內容與教師專業高度結合，讓學生能利用寒或暑假期間，同時精進所學及體驗異國文化。
- 至目前為止，已有171人次參與過此課程。

34

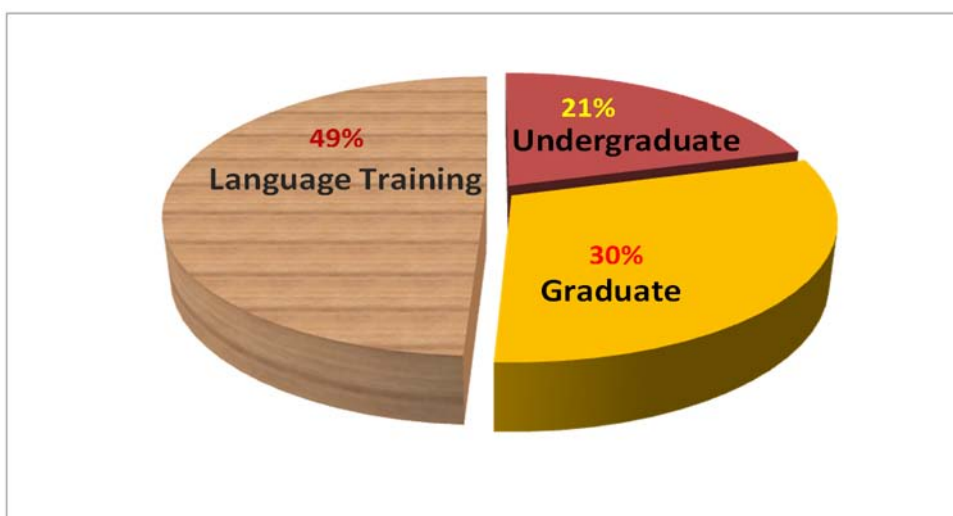
雙聯學位 Dual Degree

- American University 美國美利堅大學
- National University of Ireland, Galway 愛爾蘭高威大學
- University of Washington 美國華盛頓大學
- University of Illinois at Urbana-Champaign 美國伊利諾大學
- University of Florida 美國佛羅里達大學
- Michigan State University 美國密西根州立大學
- University of Texas at Austin 美國德州大學奧斯汀分校
- Arizona State University 美國亞利桑那州立大學
- University of Queensland 澳洲昆士蘭大學
- Grande École ESCP Europe, Paris/France 巴黎高等商業學院
- IESEG School of Management, Paris - Lille/France 里爾天主教大學管理學院
- HHL - Leipzig Graduate School of Management 萊比錫管理學院

35

English Taught Courses

More than 600 English Taught Courses in each Year



36

Running a collaborative international degree programme

Reflections on 6 years of leading an
EU Erasmus Mundus programme
at the IOE, University of London
Edward Vickers

1

The EU's aims for Erasmus Mundus

- Promoting **Europe** (in competition especially with America) as a destination for top international postgraduate students (but **Europe** as distinct from any single EU country)
- Internationalizing European higher education (by promoting the development of ties with institutions outside Europe)
- 'Harmonizing' Europe's higher education system – bringing national regulations and laws more closely into line (related to the Bologna Process)

2

The Erasmus Mundus Scheme

- European universities have to form **consortia** (consisting of at least 3 institutions in 3 different countries) (from 2010, non-European institutions can also be included)
- These consortia then bid to the EU for **scholarship funding** for five years (*i.e. five cohorts of students*)
 - scholarships originally only for non-EU students, but now available for EU students as well (a total of **20-24 per year**)
 - funding also goes to support **visiting scholars** from outside the EU
- Students have to study in at least two different European countries
- From 2010, PhD as well as MA programmes have been supported by the Erasmus Mundus scheme

3

The Erasmus Mundus Lifelong Learning MA

- Originally 3 partners:
 - Faculty of Education, University of Aarhus (Denmark)
 - Institute of Education, University of London (UK)
 - University of Deusto, Bilbao (Spain)
- First successful bid 2005 – first students started the programme in 2006
- 2010 – successful bid to the EU for another 5 years of funding
- From 2011 the Graduate School of Education, University of Melbourne also joined (only European students can go here – to study one module mid-way through the course)

4

MALL course content and rationale

- A general course in Comparative Education, but with a particular focus on 'Lifelong Learning' (a concept that EU policymakers have been keen to promote).
- In addition to more general comparative education courses, students also study developments in vocational learning, workplace learning, adult education, etc. (i.e. they are encouraged to look at learning in contexts beyond conventional schooling and university/college education).

5

MALL structure

- A two-year, full-time course (different from the standard one-year English MA programmes).
- All modules are compulsory.
- Students take their first year either in London or Copenhagen, then go to Spain for a semester. In the final, fourth semester students can go to any one of the three partner universities to work on their dissertation.
- Assessed by:
 - 6 modules each assessed through a 5,000-word assignment;
 - A 20,000-word dissertation.

6

MALLL modules

- Semester 1 (IOE or Aarhus):
 - Comparative Education: Theories and Methods
 - Lifelong Learning: Theories and Perspectives
- Semester 2 (IOE or Aarhus):
 - Education Traditions and Systems in Europe;
 - Vocational and Workplace Learning
 - *[At the end of Semester 2, European students go to Melbourne to take one module there – in place of one of these two modules]*
- Semester 3 (Deusto, Spain):
 - 2 modules on the assessment and accreditation of learning in non-formal contexts
- Semester 4 (any partner university):
 - dissertation

7

Programme administration – the Steering Committee

- University of Aarhus performs the role of **consortium coordinator**
- But all key decisions are discussed and approved by a **Steering Committee** consisting of the course leaders in each partner institution, plus another academic colleague.
- The Steering Committee:
 - jointly assesses applications from prospective students and visiting scholars
 - discusses and agrees all procedures relating to the running of the course
 - deals with any issues or ‘crises’ that arise
- Day-to-day running of the course within each institution is in the hands of the **course leaders**

8

What do the partner universities aim to gain from EM?

- Faculty of Education, University of Aarhus:
 - International students (from outside Scandinavia)
 - a heightened international profile (beyond Scandinavia)
 - a broader range of international ties (visiting scholars are important)
 - Good relations with the European Commission in Brussels
- The IOE, University of London:
 - *Good quality* international students
 - Stronger ties with *key* international partner institutions (especially Aarhus, Melbourne – members of the ‘Global Alliance’)
 - The maximum possible *fee income*
- The University of Deusto, Spain:
 - International students from outside the Spanish-speaking world
 - A heightened international profile (beyond Spain and Latin America)
 - Good relations with the European Commission in Brussels
- Graduate School of Education, University of Melbourne:
 - Stronger ties with key international partners (IOE, Aarhus)
 - European international students

9

What has the EM MALL achieved?

- Some very impressive students from a very wide range of countries (Armenia, Ethiopia, Kenya, Vietnam, the Philippines, Bhutan, Iran, Argentina...)
- Quite a strong network amongst these students
- Some students have gone on to study for PhDs in Education, others have gone into careers as government education officials, college lecturers, educational administrators, or education-/training-related jobs in the private sector
- The programme has strengthened ties between the institutions involved – despite problems in the early years, the programme runs smoothly in a spirit of trust and cooperation.

10

What challenges has the MALLL faced?

- Different institutional aims
- Different levels of experience in running international programmes, and dealing with international students
 - reflected in different approaches towards the selection of scholarship candidates – especially over the issue of **language**
- Tensions over differences in regulations and procedures between different institutions/countries
- A tendency to view the programme as an arena for competition between the partners
- → **Problems of trust between the partners** (leading removal and replacement of the coordinator in 2009)
- Within institutions:
 - disagreements over ‘ownership’ of the programme – lack of clarity over who has responsibility for managing it;
 - failure to properly involve a sufficient number of colleagues **from the beginning**, and persuade them of the benefits of the programme → unwillingness of some colleagues to participate or take on extra work.

11

Lessons from the MALLL Erasmus Mundus experience

- Understand your partner institutions and their aims for the programme; accept that different partners will have slightly different aims – and discuss these openly;
- Make sure fundamental issues are agreed *before* the programme is launched, e.g.:
 - Who will coordinate the programme?
 - What will be the responsibilities of the coordinator and the partners?
 - Student registration
 - Advice on visas and travel documents
 - Accommodation
 - Insurance
 - Handling student complaints...
 - Will there be a ‘Steering Committee’? Who will belong to it? What will be its function?
 - How will the admissions process work? According to what criteria will applicants be assessed? *Who* will assess the applications?
 - What role will **language proficiency** have as an admission criterion?
 - Will there be one set **fee** for the programme? Who will collect it? How will fee income be distributed amongst partner institutions?
 - Will the consortium have its own budget for marketing the programme, paying for Steering Committee meetings, making grants to students and visiting scholars, etc.? If so, who will control this budget?

12

Issues internal to each institution

- Make sure that key academic and administrative colleagues within your university understand why the new programme is desirable, and are involved/consulted from an early stage;
- Be very clear about **who** has the main responsibility for running the programme within your university (international partners need to know with whom they should be dealing)
- Make sure that this person has the necessary support from senior management, administrators and academic colleagues

13

開会挨拶 （東北大学大学院教育学研究科長 宮腰英一教授）



基調講演 （アジア共同学位開発プロジェクト・リーダー 本郷一夫教授）



資料 3

講演 1 (北京師範大学 李家永准教授)



講演 2 (華東師範大学 徐光興教授)



講演3 (南京師範大学 傅宏教授)



講演4 (高麗大学校 韓龍震教授)



講演 5 (ソウル国立大学校 宋眞雄教授)



講演 6 (国立台湾師範大学 林家興教授)



講演 7 (国立政治大学 詹志禹教授)



講演 8 (ロンドン大学 エドワード・ヴィッカーズ教授)



シンポジウム集合写真



あ と が き

国際シンポジウム「国際的共同学位による新たな人材育成の可能性」を終えて

東北大学大学院教育学研究では、2011年4月から2016年3月までの5年間にわたり、「アジア共同学位開発プロジェクト」に取り組むことになりました。

このプロジェクトは、ASEAN 諸国を視野に入れつつ、東アジアの国と地域を中心として共同学位の共同開発を目的とするものです。今日、急速にグローバル化が進展し、あらゆる領域で国境の「壁」が低くなってきています。教育分野においても高等教育を中心として、学生の流動性が高まりつつあります。また世界高等教育ランキングは講義の英語化を促進し、今後、言語の「壁」は低くなっていくでしょう。さらに教員のリクルートも国境を越えることが見受けられるようになりました。

このように高等教育の世界標準化が進展する一方で、東アジアの国と地域には共通する固有の教育課題、あるいは類似した教育課題も多々あります。たとえば、人口の流動化が進む中で多文化共生は喫緊の課題です。また学校教育は社会的選抜のツールとしての機能が前面に出ており、子どもたちが基礎教育を受け、個々の資質能力を全面的開花させ、やがて真理の探求者として自立するという教育本来の機能は、むしろ背景に退いています。それは、青少年におけるさまざまな心理的・社会的な問題、あるいは新たな社会的格差を惹起しています。

このプロジェクトにおいては、国という「壁」が低くなり、国を超えて共通する教育的課題が浮かび上がっている今日、国境を越えたネットワークを持ち、共通の課題に対して協働できる新たな教育専門職の育成を目指しています。このため東アジアの有力諸大学と連携し、共同学位（ジョイント・ディグリー）の創設を目指します。

私たちの構想する共同学位には、さまざまなメリットが考えられます。その第一は、日本の大学の国際化です。アジアからの留学生は、留学生受入の伝統と実績のあるアメリカや豪州に惹きつけられる傾向があり、逆に日本は敬遠されがちです。魅力あるプログラムを創り出すことにより、日本の大学の国際的な魅力を高めることができます。第二に、アジアの人々と国々を皮膚感覚で知っている教育専門職を育成することができます。彼らは実践的資質を備えた教育専門職となるでしょう。これが、本プロジェクトのコアであることは言うまでもありません。第三は、大学院教育の質的向上です。高い資質能力を有する学生が東アジアの諸地域から集うことにより、大学院教育の実質化が促進されます（その具体例については、このシリーズの「アジア型エラスムス・ムンドゥスの可能性」の早稲田大学の事例をご参照ください。）共同学位により、大学院教育が活性化することが期待されます。

しかし、共同学位を創設し、それを維持し、さらに発展させることは容易ではありません。東アジア地域だけに限定しても、教育制度やその具体的な運用はまちまちです。昨今の議論さ

れている大学の秋入学の問題1つをとってもご理解いただけるものと思います。授業料もハードルになるでしょう。また共同学位の運営は、ヴィッカーズ先生の報告にもあるように、欧州でさえ未だに試行錯誤の中にあります。さらに教育に用いる言語、教科書・教材、またアセスメントなど直接教育に関わる場面においても摺り合わせが必要です。そして修了生の出口をいかに確保するのか。深刻な問題が山積しています。

こうした問題意識から、このシンポジウムでは東アジアの諸大学に集っていただき、共同学位の理想と現実について討論していただきました。以下においては、本シンポジウムのポイントを若干整理して、あとがきに代えさせていただきます。

第一に、国際化の進展です。今回お招きした大学は、いずれの大学もグローバル化を世界の趨勢と認め、積極的に国際化への対応を行っています。ソウル国立大学校では、世界主要教育機関国際連盟 (IAIEI) や APRU (環太平洋大学協会) 教育学部長会議などの国際的なネットワークを活用しつつ、国際化を推進しています。また北京師範大学では、今後いっそう進展するであろう国際化を見据えて、学部を4年制から6年制へと転換する構想もあるようです。これらの事例に示されるように、国際化を推進する上ではネットワーク形成による積極的な情報収集が必要ですし、国際化に対応するための大胆な制度改革さえ行われようとしているのです。

その一方で、無理のない可能な範囲で共同学位を推進している事例報告もありました。国立台湾師範大学の報告で、マレーシアや米国の大学との間でデュアル・ディグリーを実施しており、その具体的な運営のノウハウの一端を紹介していただきました。国立台湾師範大学では、問題を抱えつつも、大きな制度的改変を伴わない形で共同学位を実施しています。

こうした国際化を進めるうえで、高麗大学校の事例は参考になります。積極的なプログラムの展開もさることながら、海外の大学に高麗大学校生専用の宿舎を設けるなどの施設整備も行っています。国際化を進める上では、もちろん優れたプログラムの開発が重要であることは言うまでもありません。しかし、それは必要条件にすぎません。実際に学生を派遣する場合、あるいは受け入れる場合、宿舎などの整備は不可欠です。さまざまなレベルでの学生の生活を支援する体制を整えていかなければなりません。

第二に、新たな人材育成のビジョンです。東北大学では、汎用型コンピテンスの育成を目指して、KASP というビジョンを掲げました。専門的な知識 (Knowledge)、アジアに対する理解と共感 (Attitude)、研究の技法と言語 (Skills)、実際に情報を発信してネットワークを形成し、現実を改善していく力 (Practice) を総合的に育成するビジョンです。残念ながら、東北大学の構想はいまだビジョン (幻) にすぎません。

同様のビジョンについては、北京師範大学やソウル国立大学校からもご報告いただきました。北京師範大学では、次世代育成のビジョンとして、Academic、Practice、International、Creative の4つの頭文字をとり、APIC を掲げています。時間の都合で詳しいご報告をいただけなかったのは残念です。またソウル国立大学校からは、GLOBAL LEARNing に基づき、GEC (Global Education Competence) を高めようとするビジョンが紹介されました (ソウル国立大学校のスライド 30 をご参照ください)。

こうしたビジョンをすでに実践しているのが、台湾の国立政治大学です。国立政治大学では、コア・コンピテンスとして、専門的な能力、思考能力、イノベーション能力、リフレクション能力、コミュニケーション能力、生涯学習能力、世界的な視野、リーダーシップ、チームワーク力、シチズンシップ的素養などを掲げ、これらの資質能力を学寮生活（「書院」）の中で体得させていくプログラムを実施しています。

こうした汎用型コンピテンスの育成は、新しいタイプの人材育成を目指すプログラムを立ち上げるさい、とても重要です。そしてそのためのカリキュラムを構想しなければなりません。ハードな学問的知識の教育ばかりではなく、暗黙の知（ポラニー）、あるいは実践的知（シヨーン）、さらにスキルや態度・価値まで包括するカリキュラムを編成しなければなりません。

高度職業専門人の育成についてご報告いただいたのは、華東師範大学と南京師範大学です。近年、中国では2年制の専門職学位制度が発足しました。2年の課程の中では、学生の背景を配慮しつつ、ケースワークに重点を置いた教育が行われています。東北大学においても、フィールドワークを取り入れたカリキュラムを構想しています。フィールドワークの実施体制——フィールドの選択、教員の配置、内容、方法、評価など——は、今後早急に具体化していく必要があります。この点において、2大学の報告は示唆に富むものでした。

第三に、実際に共同学位プログラムを実施する上では、多くの困難な課題が山積しています。たとえば、国立台湾師範大学の報告でも触れられていましたが、共同プログラムであるものの、互恵的で対等な関係を維持することは容易ではなく、学生交換は一方方向になりがちであること、奨学金の確保と継続性、担当教員の有無などの問題があります。

私たちが共同学位の先駆的事例と見ている欧州のエラスムス・ムンドゥス・プログラムでは、実際どのような問題があるのでしょうか。今回のシンポジウムでは、エラスムス・ムンドゥスの運営に実際に携わられた経験を有するロンドン大学教育研究院のヴィッカーズ先生をお招きしました。ヴィッカーズ先生は、共同学位プログラム運営上の問題点をきわめて具体的かつ率直に指摘してくださいました。

第一に機関（大学）の問題です。たとえば、共同でプログラムを運営しているものの、パートナー機関の間には別々の目的が潜んでおり、それが時としてプログラム運営に深刻な危機をもたらすことです。パートナー機関が共同プログラムにそれぞれ独自の目的を持ち込むことは不可避のことでしょう。こうした齟齬を乗り越えて、機関間の信頼関係を構築していかなければなりません。

また機関内においても、責任あるプログラム実施体制が確保されなければなりません。実務者に負担が集中するのではなく、機関としてプログラムを支援する組織づくりが必要です。

第二に持続性です。討論の中でも持続性に対する質問がありました。共同のプログラムを運営すること自体、相当の資源を必要とするでしょう。さらに実際に学生を受け入れ、派遣するためには、奨学金などの資金の確保はきわめて重大な問題です。現在、東北大学のプロジェクトでは5年後の見通しは立っていません。

しかし、こうした持続性に関わる問題は、エラスムス・ムンドゥスにおいても同様であるこ

とがわかりました。継続的に外部資金を獲得するためには、魅力あるプログラムを作り、質の高い教育を行い、真に必要とされる人材を育成していくことが基本です。同時にプログラムの魅力と意義を広く世界に情報発信していかなければなりません。

第三に、共同プログラムにおける教育に関わる問題です。討論の中では、使用する言語、教科書、教育用の図書資料などについて議論されました。東北大学のビジョンは東アジアにおいて実施されるプログラムですが、この地域において共通言語は英語しかありません。しかし、プログラムが完全に英語で行われるとすれば、東アジアで学ぶメリットは見えにくくなります。また大学の中では英語で生活できても、現地語を知らなければ、フィールドワークや街の中での生活は困難です。アジアに重きを置く東北大学の提案では、「母語＋英語＋現地語」を掲げています。しかし、これが果たして現実的なのか、なお検討を要するでしょう。

言語の問題に関わって、図書などの資料も重要です。ヴィッカーズ先生も指摘なされていたように、英語の講義を提供できても、学生が学ぶ図書や資料がなければ、あるいは不足しているならば、教育プログラムの運営は困難となります。

第四に、制度上の問題です。全体討議の中で北京師範大学の李家永先生がご指摘なされているように、現在中国では制度上、共同学位プログラムにコア・パートナーとして加わることは制限があります。こうした制度上の問題をいかにクリアするか、現段階では見通しは立っていません。

このほかにも多くの困難な問題があるでしょう。その一方で建設的で具体的なご意見もたくさんいただきました。たとえば、国立台湾師範大学の林家興先生からは、規程改正を要せず、事務的にも比較的単純なデュアル・ディグリーから始めたらどうか、とのご提案をいただきました。南京師範大学の傅宏先生からも、最初は一部の実際のカリキュラムからスタートし、段階的に共同育成や共同学位制度へと発展させていきたいとのご提案をいただきました。

また複数の大学からサマー・プログラムのご報告をいただきました。東北大学でも来年度よりサマー・スクールを計画しています。この経験も有効に活用し、学生交換のノウハウを蓄積し、教員や機関の間の関係を深めていきたいと思います。

現在、東北大学ではジョイント・ディグリーを目指しています。単位互換やデュアル・ディグリーが現実的な目標ではありますが、あくまでもジョイント・ディグリーを目標としています。ハードルの高いジョイント・ディグリーの創設によって、大学院教育の質を高めることを企図しているからです。私たちにとってジョイント・ディグリーと大学院教育の質保証とは、いわば車の両輪なのです。

今回のシンポジウムを終え、率直な印象として、日本の大学はアジアの主要大学から遅れを取り、水をあけられているように思えました。おそらくそれが現実でしょう。今後、今回お招きした諸大学と連携を深めつつ、ジョイント・ディグリー創設の可能性を探りつつ、また同時に質の高い大学教育の可能性を模索していきたいと思います。

今回のシンポジウムが多少なりとも成功したとすれば、それはご出席くださった諸大学の先生方のご協力の賜物です。また 4 カ国語の同時通訳を引き受けて下さったサイマル・インター

ナショナルの方々のご協力にも感謝いたします。最後にご協力をいただきました皆様に心より御礼申し上げます。

2012年3月

アジア共同学位開発プロジェクト・サブリーダー
東北大学 清水 禎文

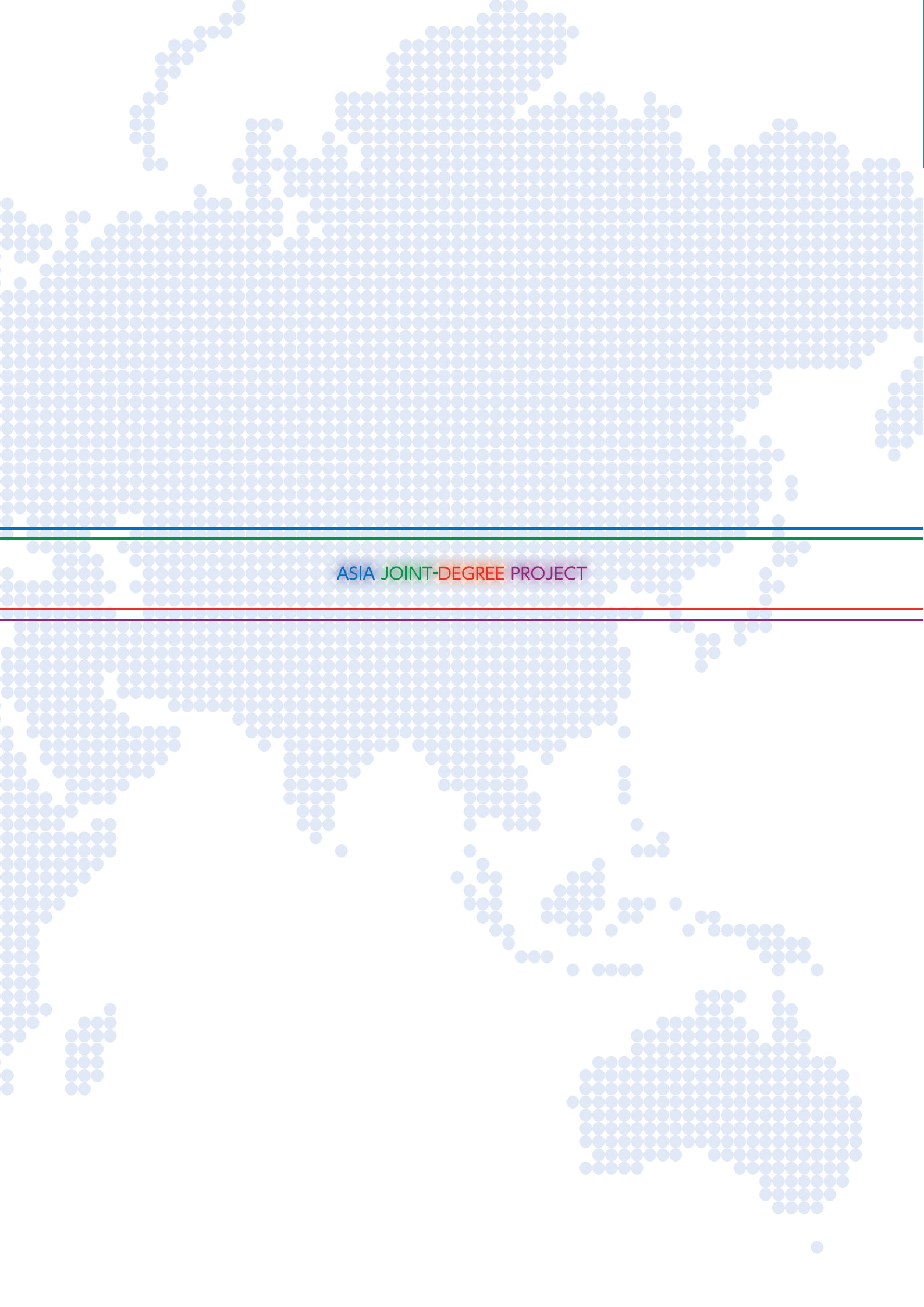
編集者

- 本郷 一夫 東北大学大学院教育学研究科副研究科長
アジア共同学位開発プロジェクト・リーダー
- 清水 禎文 アジア共同学位開発プロジェクト・サブリーダー
- 朴 賢淑 アジア共同学位開発プロジェクト・専任教員
- 朴 仙子 アジア共同学位開発プロジェクト・教育研究支援者
- 仇 暁芸 アジア共同学位開発プロジェクト・教育研究支援者

アジア共同学位開発プロジェクトシンポジウム報告集Ⅱ

『国際的共同学位による新たな人材育成の可能性』

- 発行日 2012年3月26日
- 発行者 東北大学大学院教育学研究科
東北大学大学院教育学研究科教育ネットワークセンター
- 代表者 本郷 一夫
- 住所 仙台市青葉区川内 27-1
- Tel/Fax 022-795-3756
- E-mail ajp@sed.tohoku.ac.jp



ASIA JOINT-DEGREE PROJECT